

高野遺跡

農村基盤総合整備事業 飯田市久
米地区にかかる埋蔵文化財包蔵地
高野遺跡発掘調査報告書

1989年3月

長野県飯田市教育委員会

高野遺跡

農村基盤総合整備事業 飯田市久
米地区にかかる埋蔵文化財包蔵地
高野遺跡発掘調査報告書

1989年3月

長野県飯田市教育委員会

序

現在、人口9万人余を数える飯田市は、南信濃の中核として位置づけられ、長い歴史の中で、はぐくまれてきたものです。市内には、各種各様の文化財が先人の知恵の証として残されています。中でも、埋蔵文化財の包蔵地は、市内各所にあり、古くから人々の生活適地として開けた土地柄であったと考えております。

今回発掘調査を行った高野遺跡は、飯田市街地の南西部、飯田市久米及び朝臣の地にあたります。久米には重要文化財に指定された阿弥陀如来像のある古刹光明寺もあり、山間の地ではありますが、早くから新しい文化を受け入れた先進の地であったといえます。

発掘調査の結果として、新しい歴史事実のいくつかが、発見されたわけですが、とりわけ、平安時代の製鉄址は長野県内で最古ということで、広く注目を集め、近くにある光明寺との関連をはじめ、当地方古代史研究上はもちろんのこと、様々な観点で極めて重要な意味を持った遺跡であることが明らかになったといえましょう。

おわりに、調査実施にあたって、種々ご協力をいただいた地権者の方々をはじめとする関係者各位に、また、献身的に調査していただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

1989年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

1. 本書は農村基盤総合整備事業飯田市久米地区に係る埋蔵文化財包蔵地高野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が実施した。
3. 保護協議の過程より、高野はか1遺跡としていたが、調査開始より事業の性格等により高野遺跡として一括し、発掘調査及び整理作業において一貫して遺跡名に略号TKNを用いた。
4. 調査実施にあたり、100m四方の大区画、4m四方の小区画に分割して作業を行なった。区画は真北を基準とし、大区画は東端を基点に西方へ向かってA・B・C～、北方へ向かって1・2・3～とした。小区画の呼称はA1b15・B2f20などとなる。
5. 調査は、昭和62年度中に試掘調査を実施し、本調査を昭和63年5月18日～6月18日、9月26日～11月4日の二度にわたって実施した。統いて昭和63年度末まで整理作業及び報告書の作成を行った。
6. 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、小林正春・佐合英治・馬場保之が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお、本文の一部について小林が加筆・訂正を行った。
8. 本書に掲載された図面類の整理は佐合が、遺物実測は佐合・馬場があたった。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・吉川豊・川上みはる・木下玲子・小平不二子・田中恵子・林勢紀子・福沢育子・吉川悦子が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合・馬場が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、ロー状光沢はスクリーントーンで示した。
12. 本調査により発見された製鉄関連の資料について、島根大学山陰地域研究総合センター客員研究員葉賀七三男先生に、分析及び考察までに至る玉稿をいただき、調査

結果の後に付編として掲載させていただいた。

13. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序	
例言	
目次	
I 経 過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2
II 遺跡の環境	4
1 自然環境	4
2 歴史環境	4
III 調査結果	14
遺構と遺物	14
1) 積穴住居址	14
① 1号住居址 ② 2号住居址 ③ 3号住居址	
2) 堀立柱建物址	17
① 堀立柱建物址 1 ② 堀立柱建物址 2 ③ 堀立柱建物址 3	
④ 堀立柱建物址 4 ⑤ 堀立柱建物址 5 ⑥ 堀立柱建物址 6	
3) 溝 址	23
① 溝址 1 ② 溝址 2 ③ 溝址 3 ④ 溝址 4	
⑤ 溝址 5 ⑥ 溝址 6 ⑦ 溝址 7	
4) 小 積 穴	29
① 小積穴 1、溝状址 1	
5) 溝 状 址	33
① 溝状址 2 ② 溝状址 3 ③ 溝状址 4 ④ 溝状址 5	
6) 土 坑	34
① 土坑 1 ② 土坑 2 ③ 土坑 3 ④ 土坑 4	
⑤ 土坑 5 ⑥ 土坑 6 ⑦ 土坑 7 ⑧ 土坑 8	
⑨ 土坑 9 ⑩ 土坑 10 ⑪ 土坑 11 ⑫ 土坑 12	
⑬ 土坑 13 ⑭ 土坑 14 ⑮ 土坑 15 ⑯ 土坑 16	
⑰ 土坑 17 ⑱ 土坑 18 ⑲ 土坑 19 ⑳ 土坑 20	
㉑ 土坑 21	

7) 柱穴群	43
① 試掘グリット17柱穴 ② A 2・3区柱穴群 ③ B 2区柱穴群	
④ B 3区柱穴群 ⑤ C 3区柱穴群 ⑥ F 4区柱穴群	
8) 暗渠	50
① 暗渠	
9) その他の遺構	50
① F 4区土器包含層 ② 漆黒色土落ち込み(旧水田区画)	
10) 遺構外遺物	51
IV まとめ	54
付編 高野遺跡出土鉄滓・羽口の金属学分析調査報告	63

挿図目次

挿図1 高野遺跡位置及び周辺遺跡図	3
挿図2 調査位置及び周辺図	5・6
挿図3 試掘グリット及び調査位置図	7・8
挿図4 TKN B 2区遺構位置図	10
挿図5 TKN B 3区・C 3区遺構位置図	11・12
挿図6 TKN A 2・3区トレンチ、F 4区遺構位置図	13
挿図7 TKN 1号住居址	14
挿図8 TKN 2号住居址	15
挿図9 TKN 3号住居址	16
挿図10 TKN 堀立柱建物址1・2	17
挿図11 TKN 堀立柱建物址3、周辺柱穴	18
挿図12 TKN 堀立柱建物址4、周辺柱穴	19
挿図13 TKN 堀立柱建物址5、周辺柱穴	20
挿図14 TKN 堀立柱建物址6、周辺柱穴	22
挿図15 TKN 溝址1・2、暗渠	24
挿図16 TKN 溝址3、土坑6、周辺柱穴	25
挿図17 TKN 溝址4、周辺柱穴	26
挿図18 TKN 溝址5	27
挿図19 TKN 溝址6(試掘グリット128)	28
挿図20 TKN 溝址7	29

挿図21	TKN	小豎穴1、溝状址1、土坑20・21、周辺柱穴、(用地境土層断面含む)	31・32
挿図22	TKN	土坑1、漆黒色土落込み(旧水田区画)	34
挿図23	TKN	土坑2・3・4・5・7・8・9・11・12、漆黒色土落込み(旧水田区画)	36
挿図24	TKN	土坑10、周辺柱穴、漆黒色土落込み(旧水田区画)	38
挿図25	TKN	土坑13・14、周辺柱穴、土坑15・19、土坑16・17・18、周辺柱穴、漆黒色土落込み(旧水田区画)	40
挿図26	TKN	溝状址2、周辺柱穴	43
挿図27	TKN	A 2・3区柱穴、溝状址3・4・5、試掘グリット17	44
挿図28	TKN	B 2 m 6周辺柱穴	45
挿図29	TKN	B 2 n 4、B 2 o 4周辺柱穴	46
挿図30	TKN	B 2 s 11周辺柱穴	47
挿図31	TKN	B 2 n 10、B 2 q 17、B 2 s 15、B 2 s 19周辺柱穴	48
挿図32	TKN	B 3 1 18周辺柱穴	49
挿図33	TKN	C 3 b 15周辺柱穴	50

表 目 次

第1表	TKN	小豎穴1、溝状址1出土鉄滓サイズ表	58
-----	-----	-------------------------	----

図 版 目 次

第1図	TKN	2号住居址出土土器	86
第2図	TKN	2号住居址出土土器	87
第3図	TKN	2号住居址出土土器	88
第4図	TKN	2号住居址出土石器	89
第5図	TKN	1号・3号住居址、溝址2、土坑1・4・8・20出土土器、石器	90
第6図	TKN	各地區柱穴出土土器、石器	91
第7図	TKN	小豎穴1出土土器	92
第8図	TKN	小豎穴1出土土器	93
第9図	TKN	小豎穴1出土土器	94
第10図	TKN	小豎穴1、溝状址1出土土器	95
第11図	TKN	溝状址1出土土器	96
第12図	TKN	溝状址1出土土器	97

第13図	TKN	溝状址1出土土器	98
第14図	TKN	小竪穴1、溝状址1出土羽口	99
第15図	TKN	A 2・3区、B 2区遺構外出土土器、石器	100
第16図	TKN	B 2区遺構外出土土器、石器	101
第17図	TKN	B 2区、B 3区・C 3区遺構外出土土器、石器	102
第18図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土土器	103
第19図	TKN	C 3区遺構外出土土器	104
第20図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土土器	105
第21図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土土器	106
第22図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土土器	107
第23図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土土器、石器	108
第24図	TKN	B 3区・C 3区遺構外出土石器	109
第25図	TKN	B 3区・C 3区・D 3区、F 4区土器包含層出土土器、石器	110
第26図	TKN	F 4区遺構外出土土器	111
第27図	TKN	F 4区遺構外出土土器、石器	112
第28図	TKN	2号・3号住居址、溝址2、土坑2 A 2・3区、B 2区、B 3区・C 3区、F 4区出土石器	113
第29図	TKN	A 2・3区、B 3区・C 3区出土土器、各地区出土鐵製品	114

写 真 図 版 目 次

図版1	TKN	B 2区調査地全景（南から）、同（北東から）	116
図版2	TKN	B 3区調査地全景（南から）、同（東から）	117
図版3	TKN	2号住居址、同遺物出土状態	118
図版4	TKN	掘立柱建物址1、掘立柱建物址2・溝址3・土坑6	119
図版5	TKN	掘立柱建物址3、掘立柱建物址4	120
図版6	TKN	掘立柱建物址5、掘立柱建物址6・溝址7	121
図版7	TKN	溝址1、溝址4	122
図版8	TKN	溝址2・暗渠、暗渠断面	123
図版9	TKN	溝址5、溝址7	124
図版10	TKN	小竪穴1、溝状址1・小竪穴1（南から）	125
図版11	TKN	溝状址1・小竪穴1（東から）、同（西から）	126
図版12	TKN	溝状址1土器出土状態	127
図版13	TKN	土坑1、土坑2・3、土坑4・5	128

图版14	TKN 土坑7、土坑9·8、土坑11·12	129
图版15	TKN 土坑13·14周边柱穴、土坑15、土坑16·17·18	130
图版16	TKN 土坑19、土坑20、土坑21	131
图版17	TKN 1号·2号·3号住居址出土土器	132
图版18	TKN 2号住居址出土土器	133
图版19	TKN 2号住居址、小竖穴1出土土器	134
图版20	TKN 小竖穴1出土土器	135
图版21	TKN 小竖穴1出土土器	136
图版22	TKN 小竖穴1出土土器	137
图版23	TKN 满状址1出土土器	138
图版24	TKN 满状址1出土土器	139
图版25	TKN 小竖穴1、满状址1出土羽口	140
图版26	TKN 小竖穴1、满状址1出土羽口	141
图版27	TKN 小竖穴1、满状址1出土铁滓	142
图版28	TKN 小竖穴1、满状址1出土铁滓	143
图版29	TKN 小竖穴1、满状址1出土铁滓	144
图版30	TKN 小竖穴1、满状址1出土铁滓	145
图版31	TKN 土坑1·4、F4区土器包含层出土土器、石器	146
图版32	TKN A2·3区遗構外出土土器	147
图版33	TKN A2·3区遗構外出土土器	148
图版34	TKN A2·3区、B2区遗構外出土土器	149
图版35	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	150
图版36	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	151
图版37	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	152
图版38	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	153
图版39	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	154
图版40	TKN B3区·C3区遗構外出土土器	155
图版41	TKN B3区·C3区遗構外出土石器	156
图版42	TKN B3区·C3区遗構外出土石器	157
图版43	TKN F4区遗構外出土土器	158
图版44	TKN F4区、A2·3区、B3区·C3区遗構外出土土器、石器	159
图版45	TKN A2·3区、B3区·C3区、F4·5区遗構外出土铁製品	160
图版46	TKN 調査風景	161

付 編 図 目 次

第1図 調査資料出土状況	64・65
第2図 資料1・2、X線回析結果	69
第3図 資料1・2、螢光X線分析結果	69
第4図 資料3、X線回析結果	77
第5図 鶴子銀山羽口	80

付 編 表 目 次

第1表 資料の物理性	68
第2表 資料のX線分析結果	68
第3表 EPMA 分析結果	76
第4表 三穂丘陵地区雲母化学分析結果	83

付 編 写 真 図 版 目 次

図版 1 写真1 試料1	66
図版 2 写真2 試料2	67
図版 3 写真3 試料1 切断面	70
図版 4 写真4 試料2 切断面	70
図版 5 写真5 試料1 反射顕微鏡像	71
図版 6 写真6 試料2 反射顕微鏡像	72
図版 7 写真7 試料1 透過顕微鏡（オーブン）像	73
図版 8 写真8 試料1 透過顕微鏡（クロス）像	74
図版 9 写真9 試料3	75
図版10 写真10 試料4	75
図版11 写真11 試料3 切断面	77
図版12 写真12 試料3 反射顕微鏡像	78
図版13 写真13 羽口	79
図版14 写真14 鶴子銀山羽口	80

図版15 写真15 小豎穴1内土質	82
図版16 写真16 鼎中平採取、黒漆土	82

I 経 過

1. 調査に至るまで

飯田市久米地区は飯田市街地の南西部、伊賀良地区と山本地区の境に位置する。二ツ山山塊の南東麓にあたり、山塊から伸びる尾根に抱かれた典型的な洞地形である。このため耕地が小規模かつ不整形で、従来農業の機械化、大型化は思うにまかせなかった。また温暖な気候に恵まれ、豊富な水が供給される一方で、基盤に強粘質の粘土層があるため温田化し、農作業の支障となるばかりか生産性もそれほど高くなかった。それ故に農業の近代化、大型化や生産性の向上を図る上で農村基盤整備事業の早期実現が求められてきたわけである。

一方、本地区は地形的にかなり制約を受けるものの、先史以来各所にその人間活動の痕跡をとどめ、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が知られている。その歴史は縄文時代にまで遡り、古代にはその地理的特性を活かして比較的早い時期に水田經營が行なわれたことが考えられる。また平安時代以前に創建が求められる光明寺の存在は、古代末においてこの地区が伊那谷で重要な位置を占めていたことを伺わせるし、今日伝えられる公文所、朝臣等の地字は中世莊園の存在を是認すべき状況にある。このように、歴史的文化的遺産を数多く抱える地区であるといえる。

基盤整備事業地域内には上平、高野、上の原、権現原の4つの埋蔵文化財包蔵地が含まれるために、昭和61年9月29日長野県教育委員会文化課、飯田市農林部、飯田市教育委員会の三者が現地で協議を行なった。その結果、とりあえず事業地域全体にわたって試掘調査を実施し、調査結果に基づいて改めて協議することとなった。試掘調査は昭和62年11月16日から12月4日にかけて実施され、遺構等確認された4地区について拡張して本調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

諸協議に基づいて現地調査に着手した。昭和63年5月18日、A2・3区、B3区において重機によって表土を剥ぎ、遺構検出作業の結果、竪穴住居址・溝址・溝状址・土坑等確認され、精査を行なった。それらについて写真撮影・測量調査を実施し、6月18日作業を一旦終了した。9月26日C3・B2区に重機を入れ、表土剥ぎを行なった。竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址・土坑等が確認され、遺構掘り下げ作業を行なった。続いてF4区について重機で拡張し、小竪穴・溝状址・土坑等検出し、精査した。併行して写真撮影・測量調査を実施し、11月4日現地作業を終了した。なお調査期間中の10月29日、フイゴの羽口や鉄滓が多量に出土したF4区について、島

根大学客員研究員、葉賀七三男氏・飯田市文化財審議委員会委員長大沢和夫氏の視察を受け、遺構・遺物の検討並びに御指導を賜った。

また、調査期間中伊那史学会主幹原田藤村氏・飯田長姫高校教諭岡田正彦氏等により、隨時種々の指導をいただいた。

引き続いて、昭和63年度末まで飯田市考古資料館において、記録された図面・写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、実測・写真撮影等行ない、報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

①調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和・佐合 英治・吉川 豊・馬場 保之

作業員 木下 当一・細田 七郎・高橋収二郎・木下 傳・木下 和子・横井 近枝
大島 利男・高橋 寛治・平沢俊太郎・荻原 和一・福沢トシ子・正木実重子
北村 重実・福沢 昌子・松下 真幸・池田 洋子・唐沢古千代・川上みはる
木下 玲子・柳原 剛・小平不二子・丹羽 由美・牧内 八代・松本 恵子
宮内真理子・吉川 悅子・吉川 寿人・吉沢まつ美・林 勢紀子・森 信子
福沢 育子・田中 恵子・河尻真美珠

②事務局

飯田市教育委員会

竹村 隆彦（社会教育課長）

中井 洋一（社会教育課文化係長）

小林 正春（ “ 文化係）

吉川 豊（ “ “ ）

馬場 保之（ “ “ ）

土屋 敏美（庶務課）

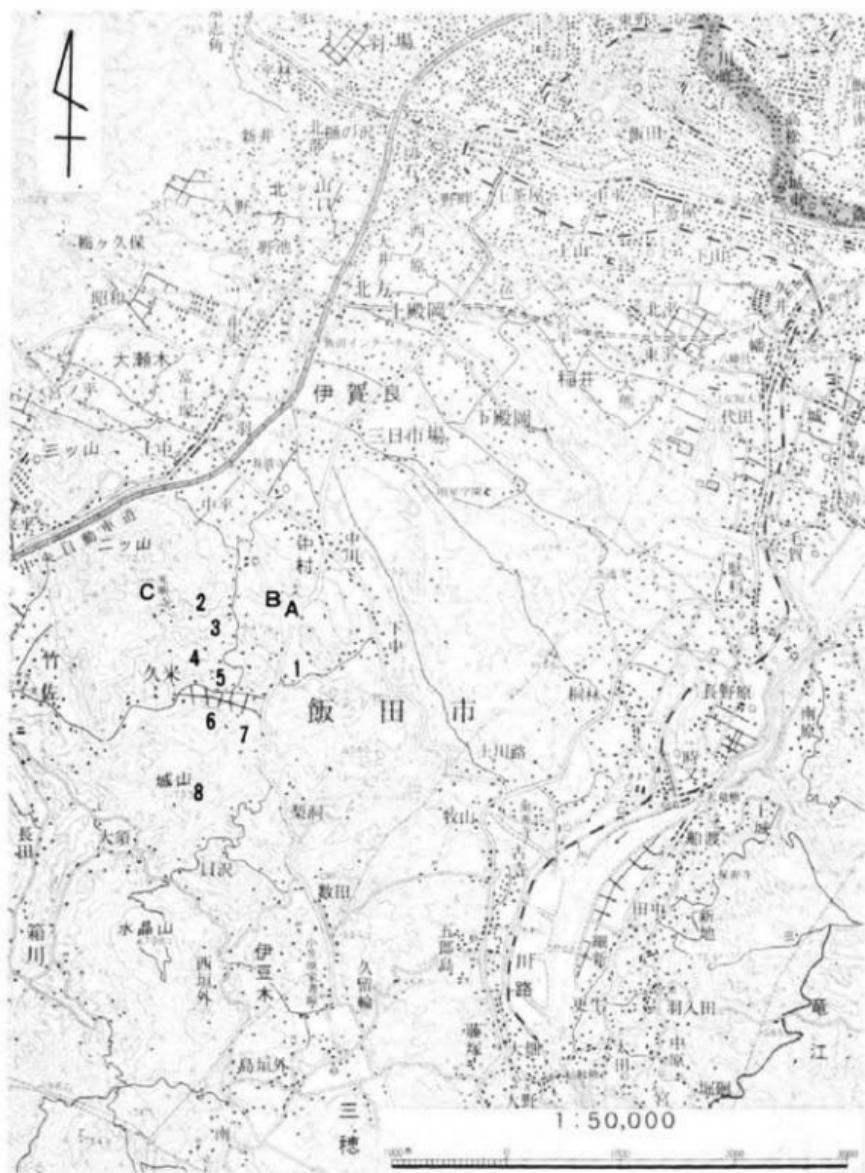


図1 高野遺跡位置及び周辺遺跡図

- A高野遺跡 B上ノ原遺跡 C光明寺
 1上ノ平遺跡 2洞口遺跡 3久米中尾遺跡 4新九田遺跡
 5宮下(大通田)遺跡 6大畠遺跡 8城山遺跡

II 遺跡の環境

1. 自然環境

高野遺跡は飯田市中村朝臣、山本久米北平地籍に所在する。

飯田市は長野県南部に位置し、東側は赤石山脈、伊那山地に、西側を木曾山脈によってさえぎられた細長い盆地状の南縁にあたり、その中を天竜川が南流する。天竜川とその支流は複雑な段丘面を形成し、さらに上位段丘にあっては支流による扇状地が複合し、複雑な微地形を呈している。飯田市南部以南は山地が迫り平地は狭隘となり、河川急谷となる。本遺跡はちょうどその移行する部分に相当する。

本遺跡は独立した山塊の二ツ山の南東麓に位置する。付近は山地から張り出した尾根に抱かれた洞地形が各所に存在し、本遺跡もその一つ、いわゆる「光明寺洞」にある。豊富な湧水に恵まれ、比較的温暖な気象と相俟って早くから水田が営まれたと思われる地域の一つである。一方で基盤には疊層が各所に露出するとともに強粘性の粘土が広く分布しており、このためグライ化が著しい。

洞中央には森下沢川が蛇行し東流しており、右岸が勾配の急なのに対し、左岸は比較的傾斜がゆるやかである。

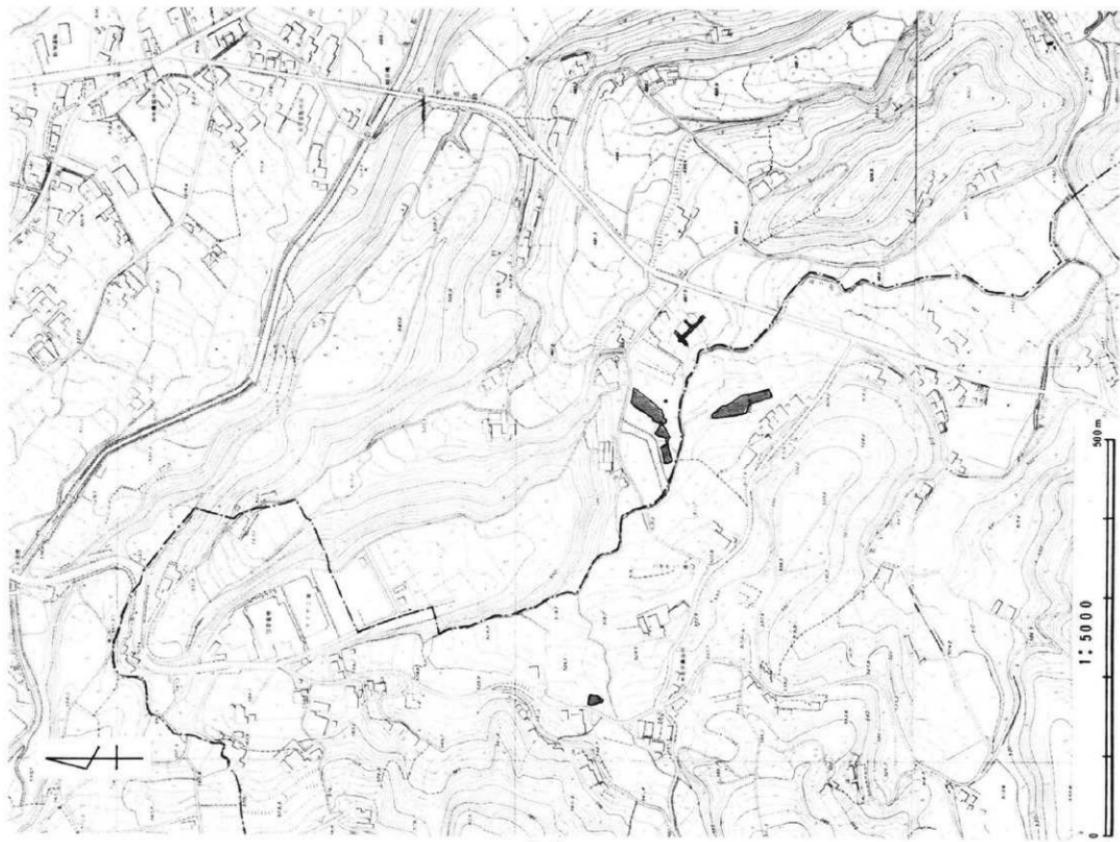
2. 歴史環境

伊賀自、山本地区は数多くの埋蔵文化財包蔵地をはじめ、歴史文化遺産に恵まれた所である。各所に刻まれた先人達の足跡は旧石器時代まで遡ることが可能であり、山本の石子原遺跡は長野県最古の旧石器時代の遺跡である。また中島平遺跡では、有舌尖頭器が出土している。

縄文時代早期の遺跡は笠松山系などの山麓、丘陵に濃密に分布している。調査された遺跡は少ないが、立野、石子原遺跡（早期）、中島平遺跡（早、前期）、山口・小垣外遺跡（前期）等である。中期になると遺跡数は急激に増加し、上の平東部、酒屋前、滝沢井尻、辻垣外、小垣外遺跡が中央道建設に伴ない調査されている。本事業地域内においても該期の資料が得られている。後期になると小垣外遺跡で良好な資料が得られているほかは、中部高地における縄文時代遺跡の消長と同様伊賀良、山本地区でも遺跡数は極端に減少する。

弥生時代後期には、台地から山麓にかけて遺跡が増加し、これまで調査された遺跡も多い。中央道関係で、酒屋前、滝沢井尻、上の金谷遺跡等が調査されているほか、中島平、宮の先でも該

図2 調査位置及び周辺図



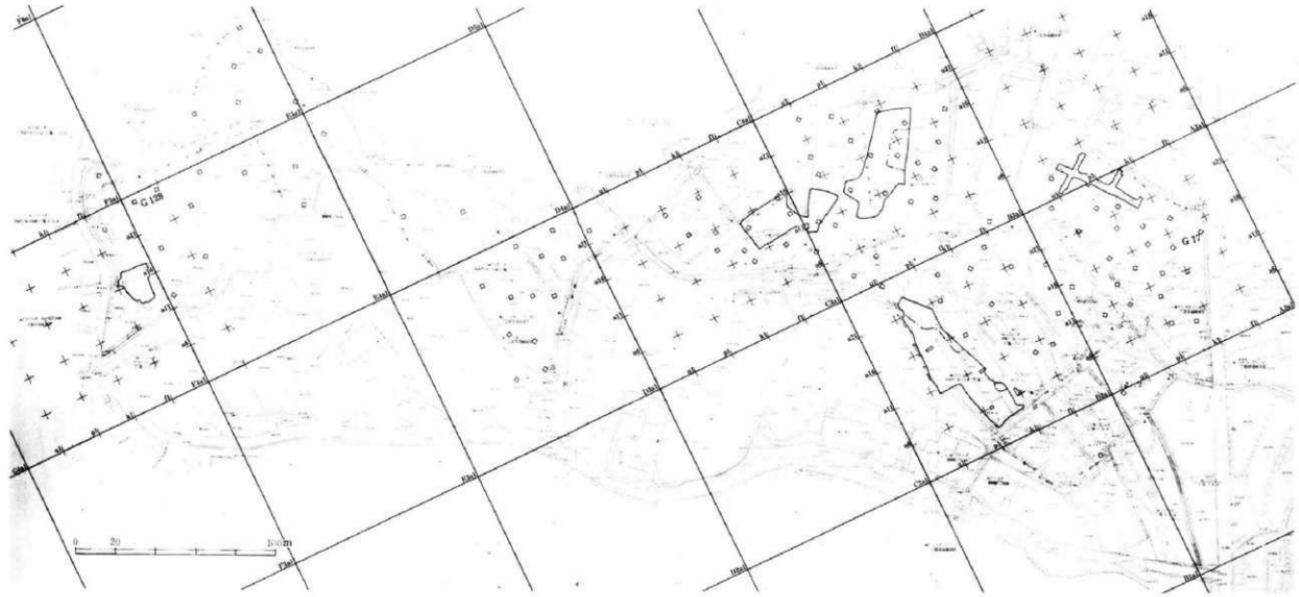


図3 試掘グリッド及び調査位置図

期の集落址が調査されている。

古墳時代には伊賀良地区では三塚測、上の金谷、中島平遺跡等で住居址が検出されている。一方山本地区でも該期の遺物散布地が比較的多い。

伊賀良地区の古墳は52基を数えるが、現存するものは、数基にすぎない。その分布は笠松山麓に発達した扇状地の扇央部分、茂都計川、新川の縁部に集中する。いずれも規模の小さい後期の円墳である。また山本地区においては、古墳の数は伊賀良に比してさらに少ない。これまで集落址の調査例はないが、古墳の分布や遺物散布の状況から該期集落の調査も今後増加しよう。一方これらを支えた生産基盤の実態は必ずしも明らかではないが、地域内の各所に平安時代中期以前に水田が営まれたと考えられる。

奈良時代にあっては古代東山道に「育良駅」の名がみえる。諸説あっていまだ定まらないが、伊賀良地区的いざれかに在った可能性が高い。

本遺跡とは指呼の間にある真言宗の古刹光明寺には胎内に「保延六年」(1140年)の銘を持つ薬師如来坐像がある。少なくとも本寺の創建はこれ以前に遡ると思われ、伊那谷の中ではいちはやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。

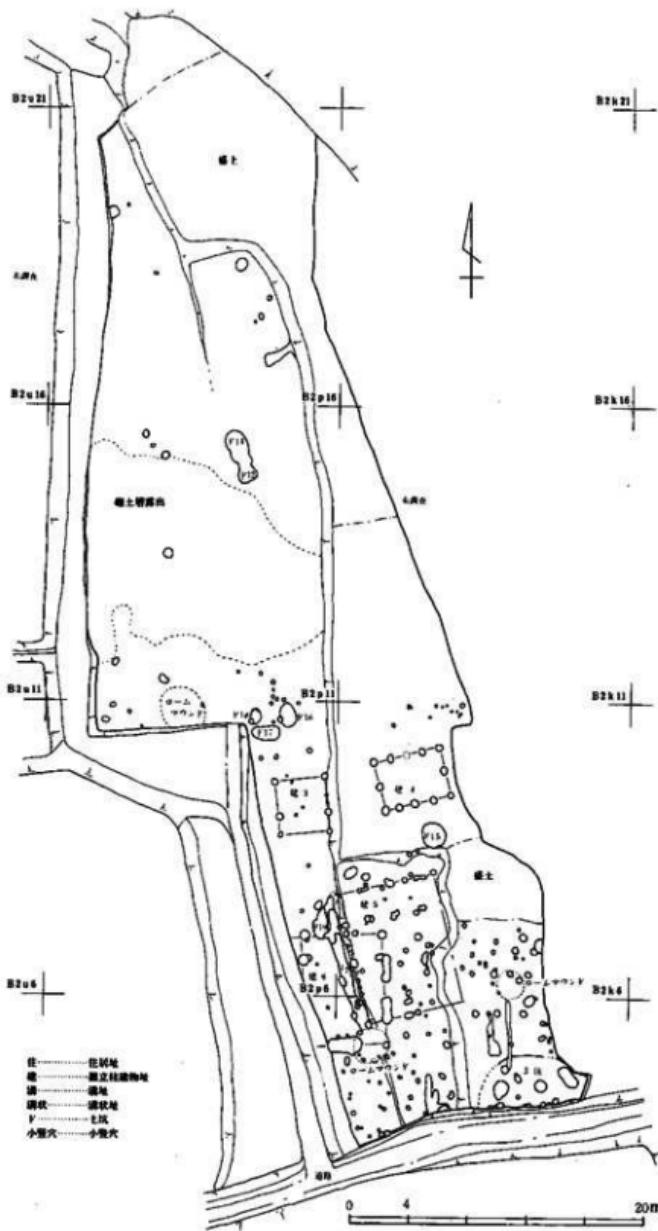
鎌倉時代伊賀良庄地頭は北条時政であり、以後北条氏の一族江馬氏が世襲した。そして鎌倉末には莊園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。本遺跡周辺では公文所、朝臣等の地字が今日に伝えられており、中世莊園の存在を是認すべき状況がある。この時代の文化財としては国指定の重要文化財である光明寺の阿弥陀如来坐像があげられる。藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の優品である。

北条氏の滅亡とともに伊賀良庄は小笠原氏の所領となり、伊賀領井開鑿など伊賀領地区の開発が大規模に進んだ。

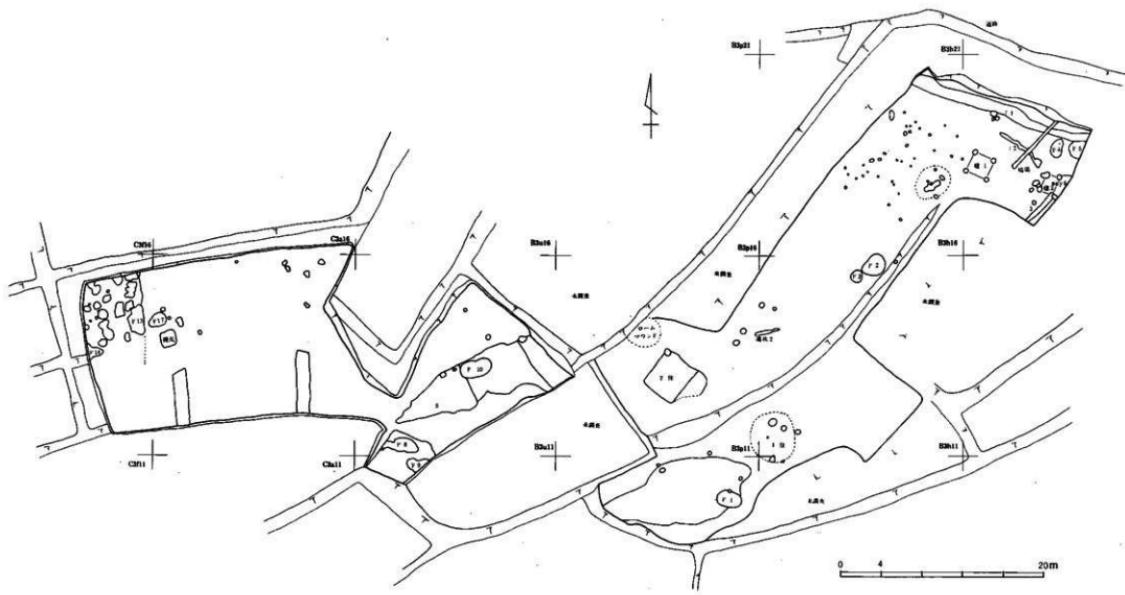
尚、朝臣には近世の窯址があり、周辺に広く分布する粘土と燃料とを用いての陶器製造も行なわれた。

このように本地区は文化遺産を多く継承しており、特に古代末から中世にかけては、飯田下伊那はおろか長野県の中でも先進文化を受容した地域の一つであったといえる。

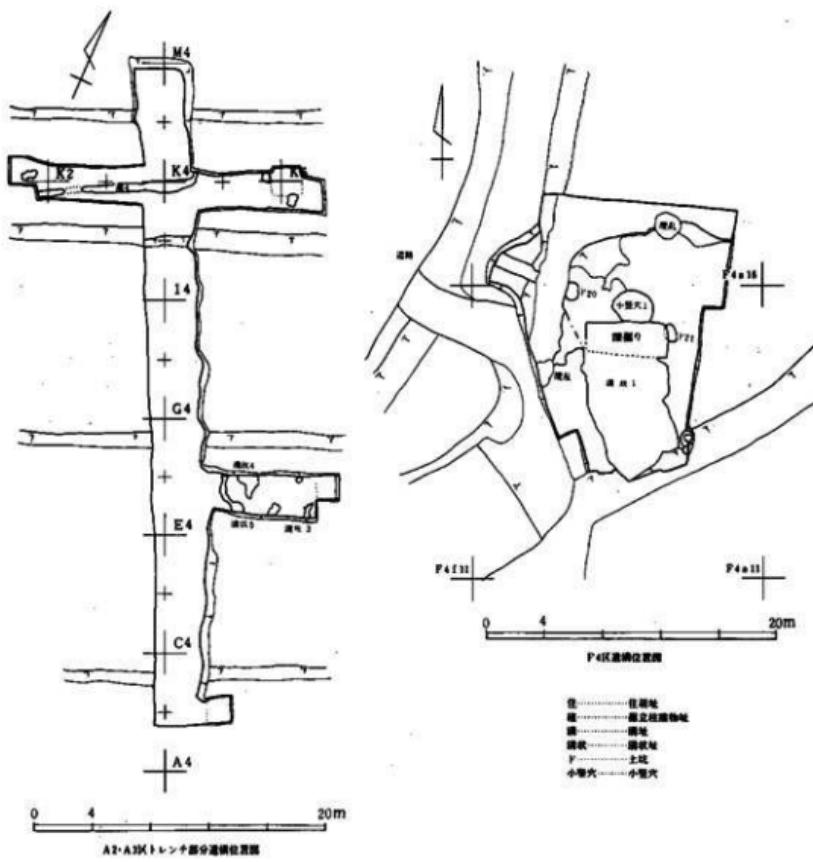
(馬場保之)



挿図4 TKN B2区遺構位置図



挿図5 TKN B3区・C3区遺構位置図



挿図6 TKN A2・3区トレンチ、F4区造構位置図

III 調査結果

1. 遺構と遺物

1) 桁穴住居址

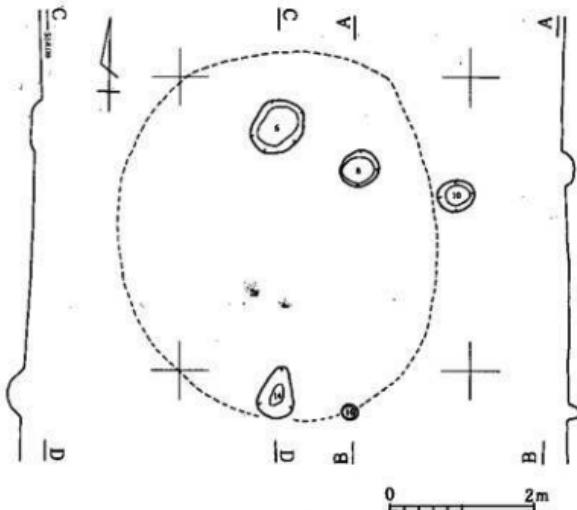
① 1号住居址（挿図7 第5図）

B3区調査範囲の南側、ほぼ中央に検出した。耕作などにより削平され、平面形、規模、主軸方向等はすべて不明である。覆土と思われる漆黒色土が4m程の範囲に広がっており、遺物の出土状況から住居址と判断した。壁高、壁面、周溝、カマド等住居址に伴う施設もすべて不明である。床面も確認できないが、地山から3、4cm上面に焼土と炭が認められる部分が有り、この面が本址の床面であったと考えられる。柱穴は5本確認したが、大きさ、深さともばらつきが有り、本址に伴うものかは不明である。

遺物の出土はきわめて少なく、図化できるものは、土師器壺底部（第5図1）、小形の壺（2）、高壺脚部（3）のみである。

時期は、古墳時代と考えられるが、出土遺物が少なく詳細時期は不明である。

（佐合 英治）



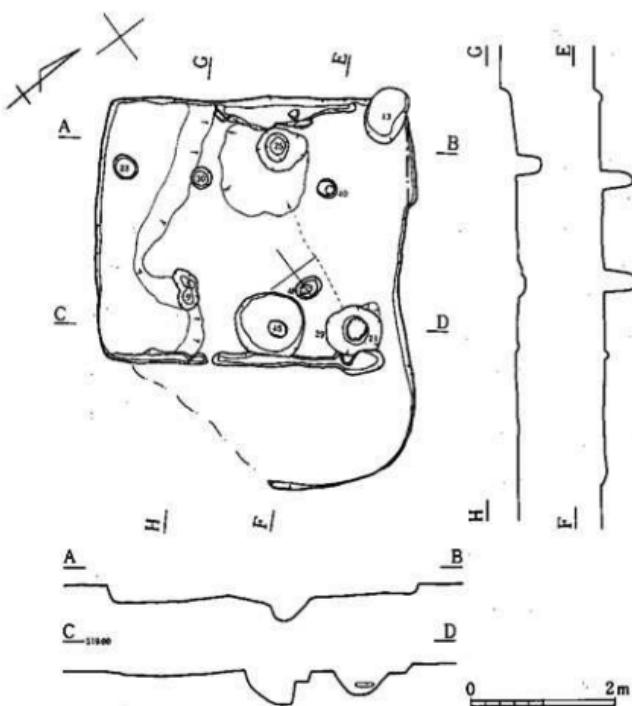
挿図7 TKN 1号住居址

② 2号住居址（挿図8 第1・2・3・4・28図）

B3区の調査範囲南西に検出し、南東13mに1号住居址がある。上面を耕作等により削平されるがほぼ全体が調査できた。方形窓穴住居址で、規模は3.6×4.3mを測る。主軸方向はN51°Wを示す。覆土は漆黒色土の一層で粘土質の強いものである。壁は北西14cmを測るが、南東側は削平され、壁そのものは残っていない。残存部表面はほぼ垂直の立ち上がりをなしている。周溝は北西と南東の壁下に確認され、南東側の周溝も壁直下に掘られていたものと考えられる。幅は北西壁側のものは30cmと広いが、本来は15cm前後と考えられる。深さは5~8cmを測る。また、南東側は壁から1m程の範囲に床面が認められず、深さ6cm前後の凹み部となった。床面はハリ床で中央部は堅く良好であるが、全体としてはやや軟弱である。主柱穴は4本確認した。住居址中央部に寄っており、壁面に対しやや歪んでいる。小形の掘り方で径30cm程を割る。深さは南隅の一本が12cmと浅いが、ほかの三本は34cm~48cmである。ほかに、本址に伴う施設として、南東側に底部が叩き状の、張りだし部分が確認された。いわゆる貯蔵穴と考えられる穴も、この同壁側

に二つ確認されており、入り口施設と考えられる。炉址は北西側中央部の穴が考えられるが、周辺のわずかな凹み部分に炭が堆積していたのみで、穴の覆土中に焼土等は何も認められず、確証はない。

遺物は比較的多く出土した。北西及び南東壁に寄った部分からの出土が多く、ほとんどのものが床面、または、壁に密着していた。土器器表には大形のものと（第1図1・2、



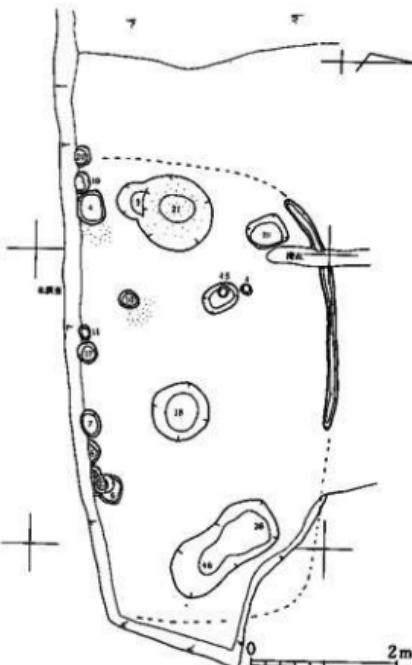
挿図8 TKN 2号住居址

第2図3・4・6)、やや小形なもの(第2図1・2・5)がある。両者とも球形の胴部を持つもので、1図1は内外面ともハケナデの整形を主とする。2はミガキを主とするものである。2図1は胴部をヘラミガキしており、2はハケの整形後ナデを行なっている。3~5の破片にはハケ整形がみられる。出土した土師器壺(第1図3~7)はみな小形で、いわゆる小形丸底に属する。整形はナデを主としたものである。3は口縁部が胴最大径より大きくなるもので、頸部よりゆるく外反している。4は上から少し押しつぶされた様な器形のものである。5の底部にはヘラケズリが見られる。7はこれら小形の壺のなかでは、きわめて球形に近い胴部のものである。ほかに器形の知れるものに、土師器高坏(第3図)がある。坏部のわかるもの4点の内2点には、種が認められるが退化している。整形は、坏部は内外部ともヘラミガキ、脚部は8と9を除いて外面ヘラミガキ、内面ナデを主としたものである。8・9は内外面ともナデによる整形がなされている。器形もほかのものと異なっており、9は器台の可能性もある。石器には、砥石(第4図1・2)と、台石(3)がある。砥石は自然石をそのまま使用している。台石は花崗岩で東隅のいわゆる、貯蔵穴から出土した。ほかに、海滨石(第28図1)がある。

時期は出土遺物から、古墳時代前期後半
に位置づけられる。
(佐合 英治)

③ 3号住居址 (挿図3 第5・28図)

B2区調査範囲の東隅に検出した。南側は調査範囲外となり、上面は水田造成時の削平を受けている。確認できたのは周溝の一部と、部分的に残る床面であるが、全体の $\frac{1}{2}$ 程を調査したものと考えられる。平面形は隅丸方形と考えられ、規模は一辺が6m程を測ると思われる。仮の主軸方向は灰暗めと思われる穴の位置からN91°Wを示す。覆土は床面直上が漆黒色土と確認できたのみである。壁はどの部分でも確認できなかった。周溝は北壁側を確認した。幅12cm、深さ2~10cmを測る。床面は堅く良好なものであるが、部分的に確認できただけである。また、床面上には締まった焼土が認められ、火事の住居址と考えられる。主柱穴は北西隅から1.6m程の所にある。



挿図9 TKN 3号住居址

二段構造の穴が考えられるが、東側の想定位置に、土坑状の穴が有り確実でない。ほかに、本址に伴う施設として西端の穴があり、径1m深さ21cmを測る。覆土中に多量の焼土が混入しており、いわゆる灰溜めの穴と判断される。また、このことから、カマドは西壁に造られているものと考えられる。

出土遺物はきわめて少ない。図化等できるものに、甕の破片三点（第5図4～6）がある。いずれも胴の長くなるもので、カキメ整形されている。ほかに黒曜石の剥片（第28図2）があるが、本址には伴わないものである。

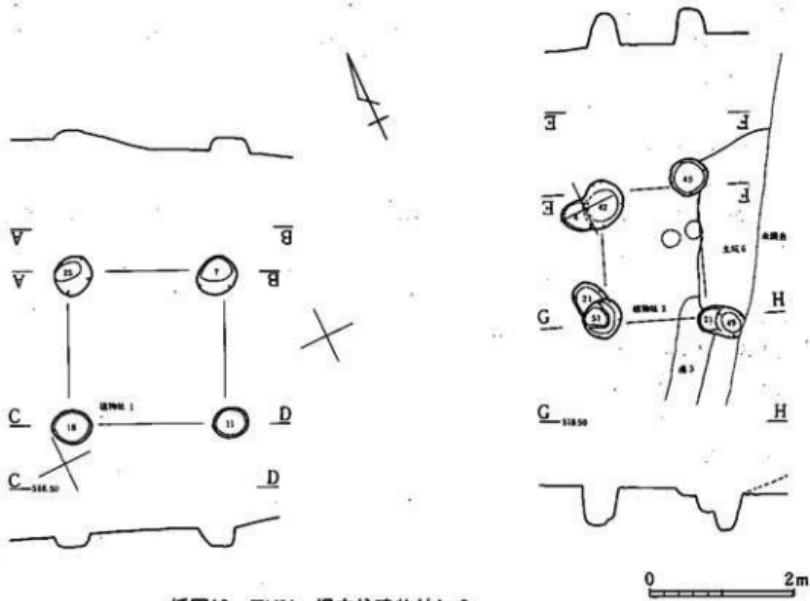
時期は、出土遺物から平安時代に位置づけられる。

（佐合 英治）

2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址1（挿図10）

B3区調査範囲の北東に検出した。1×1間の掘立柱建物址である。規模は2.1×2.1mの正方形で、仮に南北軸を平行とすると、方向軸はN21°Eを示す。柱掘り方は、ほぼ円形で径40～55cm、深さ13～23cmを測る。壁面は検出面が傾斜しているため、東側の掘り方はほとんど削平されているが、垂直に近い立ち上がりを成している。底部は平坦である。土層等による柱痕は確認で



挿図10 TKN 掘立柱建物址1・2

きなかった。覆土は漆黒色土で、壁ぎわに地山と同じ黄灰色の粘質土が混入する。

遺物は、何も出土しなかった。

時期は、不明であるが、周辺の穴の出土遺物、及び状況等を考えると、中世に位置づく可能性がある。

(佐合 英治)

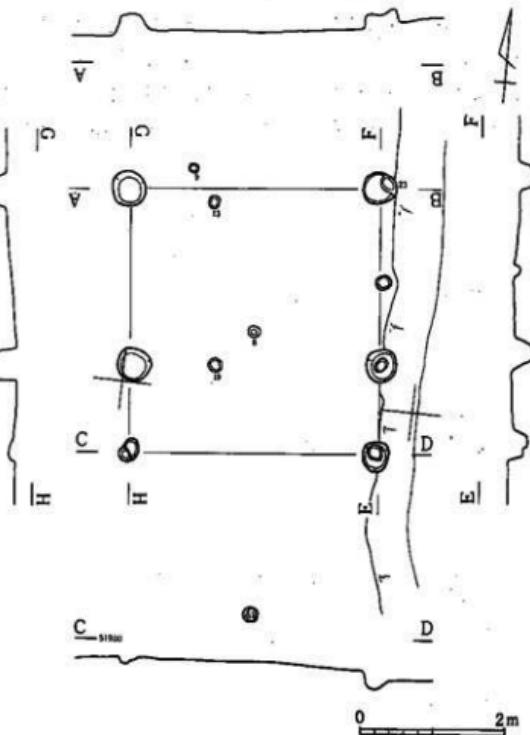
② 挖立柱建物址 2 (挿図10)

B 3 区調査範囲の北東隅に検出した。溝址 3、土坑 6 と重複するが、切り合い関係は不明である。1 × 1 間の掘立柱建物址である。規模は桁行 1.8m、梁行 1.35m を測り、桁行方向は N 22° E を示す。柱掘り方は北東隅のものを除いて、同規模の新旧関係不明の穴と重複している。切り合う穴は、深さに 8 ~ 30cm と差があり、柱間が一定にならないことから、柱抜き取りの穴と判断したが、実際にどの層から掘られていたかが不明のため、建て替えも考えられる。個々の柱掘り方は、ほぼ円形の平面形を成し径 40 ~ 64 cm、深さ 46 ~ 57 cm を測る。壁面はほぼ垂直に掘られており、底部は平坦である。覆土は漆黒色土の一層で、土層等による柱痕は確認できなかった。

遺物は、何も出土しなかった。

時期は不明であるが、西側に本址と同時期と考えられる掘立柱建物址 1 が有り、周囲の出土遺物及び遺構の状況から、中世に位置づく可能性がある。

(佐合 英治)



挿図11 TKN 掘立柱建物址3、周辺柱穴

③ 挖立柱建物址 3 (挿図11)

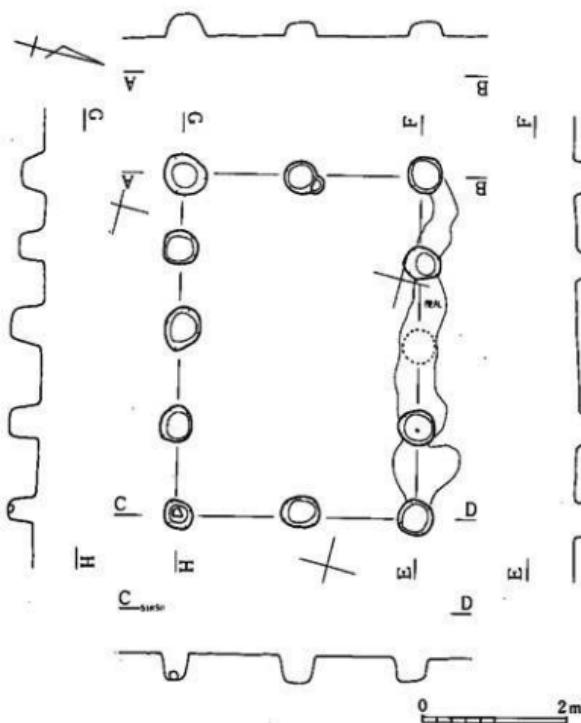
桁行3間、梁行1間、規模3.6m×3.4mの側柱のみの掘立柱建物址で、主軸方向はN 6° Wを示す。柱穴径40~50cmのものと、径20cm程度の小さいものがあり、底部のレベルは一定せず、径の大きいものは深い。東側桁方向の柱穴は内部が一段低くなっている、柱痕と思われる。

付近から土師器甕口縁部が出土したほか出土遺物はなく詳細時期は不明であるが、他の遺構との関連から平安時代に比定されよう。

(馬場 保之)

④ 挖立柱建物址 4 (挿図12)

桁行4間、梁行2間、規模4.65m×3.30mの掘立柱建物址で、主軸方向N 75.5° Eを示す。側柱のみの建物址で、梁方向の柱穴は深さが割合一定するが、桁方向は揃わない。擾乱のため、北側中央の柱穴は検出できなかった。南東隅の柱穴底部に石が入る。また南側西から1・2本目、



2・3本目の間隔は小さい。

本遺跡から出土した遺物は外赤褐色・内面黒褐色を呈する土師器甕小片3点である。

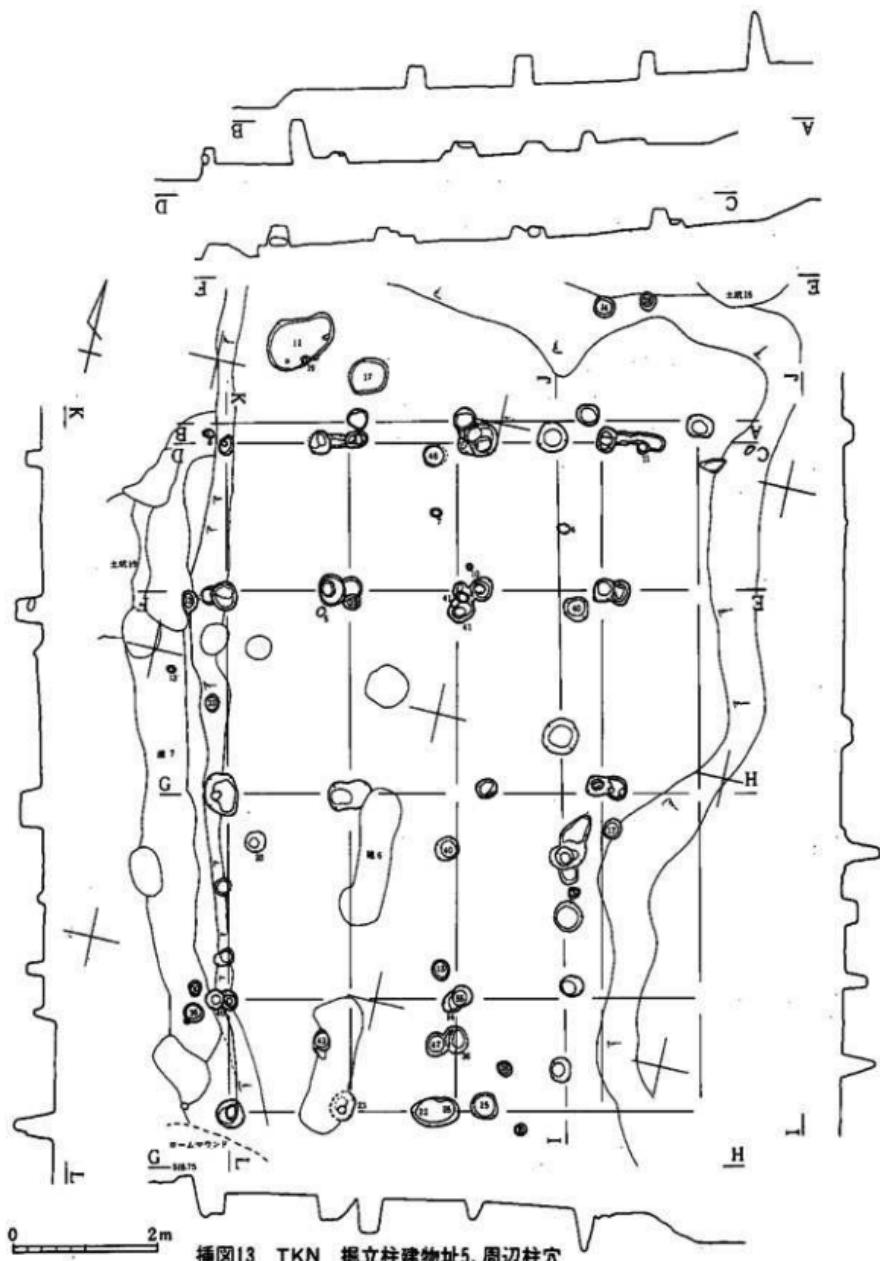
詳細時期は不明であるが、平安時代に位置づくものと考えられる。

(馬場 保之)

⑤ 挖立柱建物址 5 (挿図13)

B 3区調査範囲の南端、掘立柱建物址が集中する部分に検出した。掘立柱建物址6と重複するが、切り合い関係は不明である。総柱の掘立柱建物址で、北側に張り出し部を持つ4(5)×4間と判断

挿図12 TKN 挖立柱建物址4、周辺柱穴



插図13 TKN 柱立柱建物址5、周辺柱穴

したが、東側が水田の造成の為削られており、北側と東側に張り出しを持った $4(5) \times 3(4)$ 間の掘立柱建物址となる可能性がある。また、西側は溝址7に切られている為はっきりしなかったが、北側の張り出し部と同様の小穴が數本確認されており、西にも張り出し部があった可能性が高い。 4×4 間の掘立柱建物址とすると、規模は桁行9.0m、梁行6.5mを測り、桁行方向はN13°Wを示す。桁行柱間は中の2間が2.75m、南側が1.5m、北側が2.0mを測る。掘り方の平面形は、歪むものもあるがほぼ円形で、径20~55cm、深さ14~77cmを測るものまであり、ばらつきが見られる。掘り方壁面はほぼ垂直のものと、底部に近くなるほど緩くなるものがあるため、底部との境が明瞭でないものもある。梁行柱間は北西隅のものから1.7・1.5・2.0・1.3mを測り、3間めの間には、列の通らない柱穴が連続する。柱掘り方は2、3本の柱穴が切り合っているものが多く、同位置に建て替えを行なったものと思われ、やや大きめの柱穴は小穴が切り合って一つの柱穴になったものと考えられる。また、北側の柱穴には深さ8cm程の溝を伴ったものが有り、これは上屋の構造に起因すると考えられる。覆土は北側の二列が暗褐色土で、炭が多量に混入するものがあり、それ以外のものは黒色土である。柱痕等は確認できなかった。

遺物の出土した穴は、数本しかなく、土師器小片と北隅の柱穴から、山茶碗とも思える粗雑な、灰釉皿の破片が出土している。

詳細時期は不明であるが、出土遺物、周囲の遺構の状態などから、平安時代以降と考えられる。

(佐合 英治)

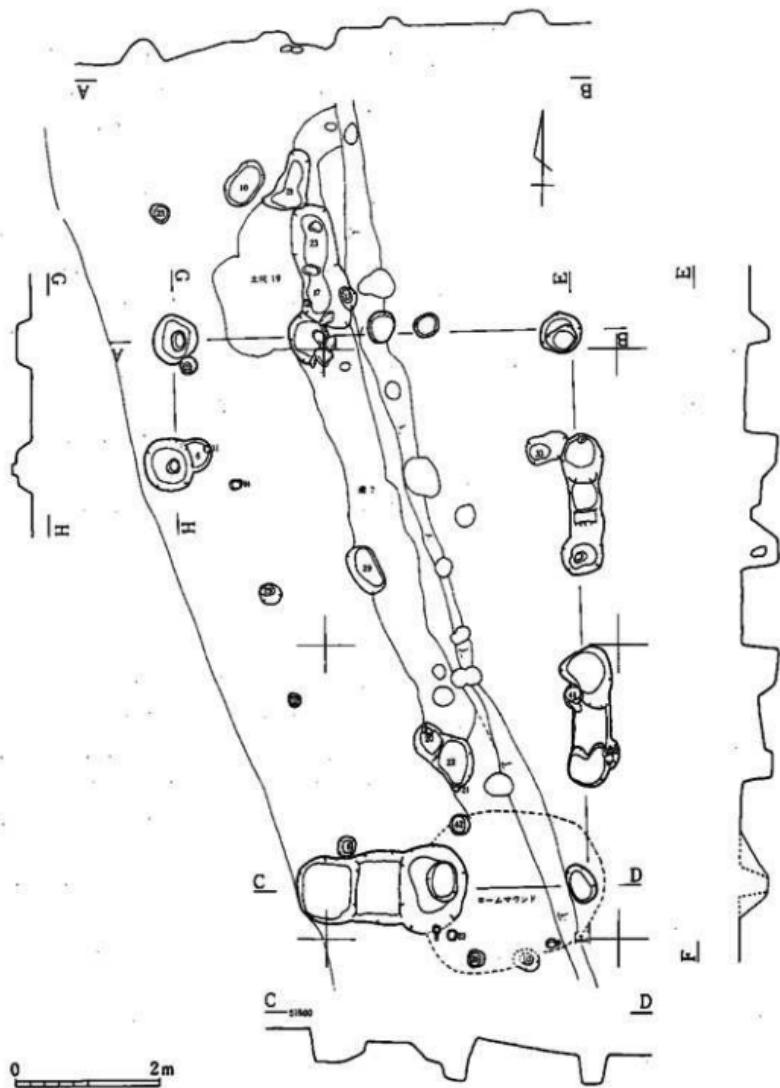
⑥ 掘立柱建物址 6 (挿図14)

B 2区の南端に検出した。南西側は未調査部分に延びており、溝址7、ロームマウンドを切り、掘立柱建物址5と重複するが、新旧関係は不明である。側柱のみの掘立柱建物址で 5×3 間を確認した。規模は桁行7.53m、梁行5.48mを測り、桁行方向はN1.5°Wを示す。柱間はそれぞれ桁行1.5m、梁行1.8mを測る。個々の掘り方平面形は、切り合い等から歪むものもあるが、方形に近い楕円形である。径は0.42~1.2mを測り、南側桁の掘り方は、ほかのものに比べて大きい。深さは検出面が傾斜していることもあり、地表からは27~63cmである。また、二本の柱穴を一つの掘り方内に持つものがあり、北側梁が溝址と重複していることも考えると、隅と西側桁の柱掘り方を除いて、同様の形態を取っていたものと考えられる。壁面はほぼ垂直に掘られている。底部は平坦なものであるが、柱の圧痕と思われる凹部があるものもある。土層等による柱痕は確認できなかった。覆土は北西角の三本が暗褐色土で、それ以外のものは漆黒色土である。

出土遺物は少ない。土師器、須恵器片があるが、本址に直接付くものかは不明である。

詳細時期は不明であるが、出土遺物、遺構の切り合い等を考えると、掘立柱建物址のなかでは一番古いものと判断される。

(佐合 英治)



挿図14 TKN 堀立柱建物址6、周辺柱穴

3) 溝 址

① 溝址1（挿図15）

B.3区調査範囲の北端に検出した。暗渠、土坑5に切られている。西と東側の未調査部分へさらに延びている。東西方向に長さ17.6mを確認し、西から東へ43cm傾斜している。把握できた幅は最大1.4m、最小0.7mであるが、北側は急斜面となっており、覆土の状態等もかんがみると2.5m程の幅が想定される。深さは西端で33cm、東側の残存状態の悪い部分で4cmを測る。壁面は緩やかな角度で立ち上がる。底部は水流の浸食による凹凸が一部に認められ、ゆるい船底状となる。覆土は上部より、漆黒色土、灰黒色粘質泥土、砂利の三層である。漆黒色土、灰黒色粘質泥土とも、周辺の造構検出面の上に広く認められた層と同じもので、このあたりが湿地帯となる時期において、ゆっくり埋まったものと考えられる。また、張りだした尾根据の部分に、地形の傾斜に添って検出されたことから、自然の流路と考えられる。

出土遺物に混入品も多いため、詳細時期は不明であるが、古墳時代に位置づくものと考えられる。

（佐合 英治）

② 溝址2（挿図15 第5・28図）

B.3区調査区北側に検出した。暗渠に切られている。東西方向に長さ4.3mを確認し、東側では穴と切り合って消滅する。西から東へ9cm傾斜している。幅は35cm前後で、深さは10cm前後を測る。壁面は比較的緩く立ち上がるもので、底部は平坦である。覆土は漆黒色土一層である。地形の傾斜に添って検出されているが、残存部分が浅く、性格等は不明である。

出土遺物には、撲文鉢片（第5図7）、黒曜石剝片、石錐（第28図3）のほか土師器細片があるが、磨滅している。本址に直接伴うものはないと思われる。

時期は、近世以降の暗渠より古いことが把握できただけである。

（佐合 英治）

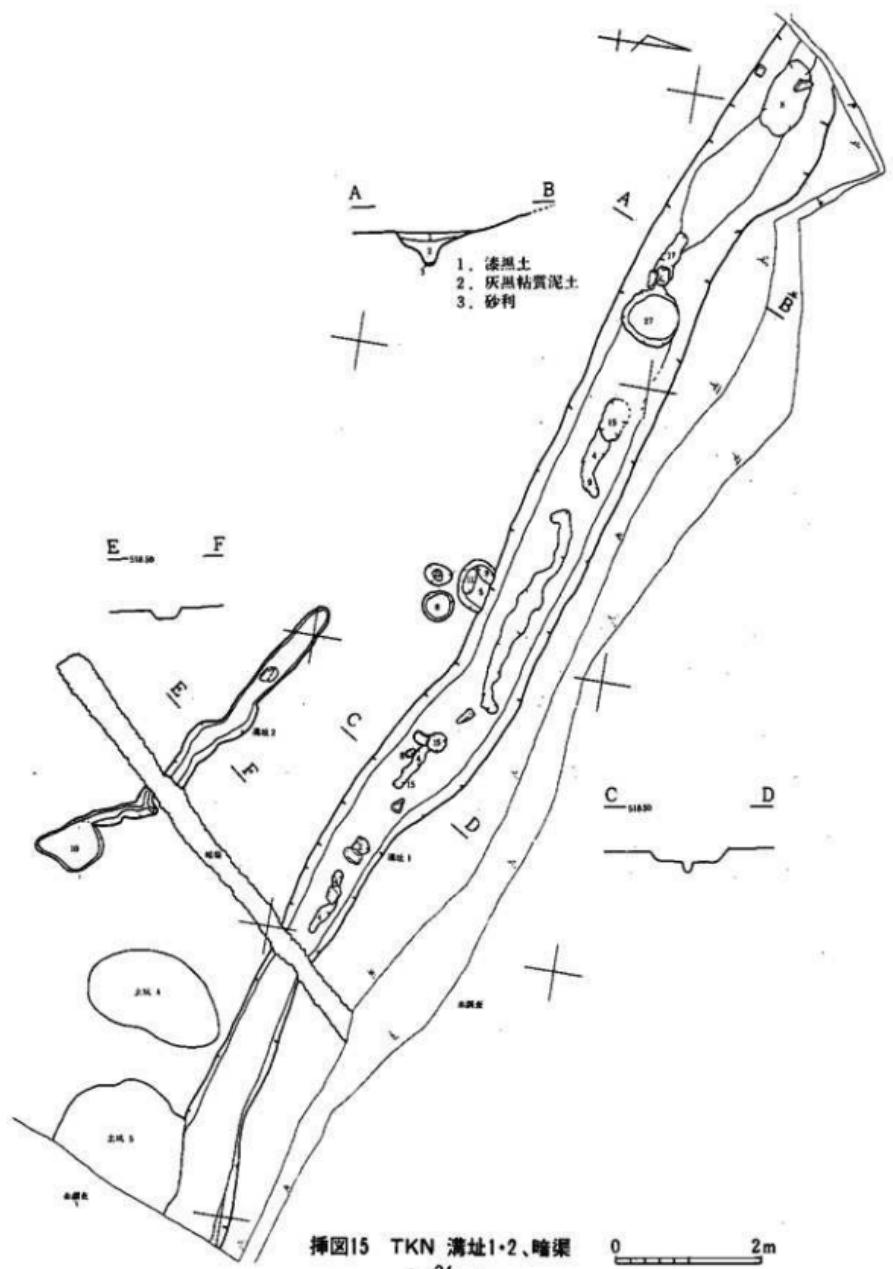
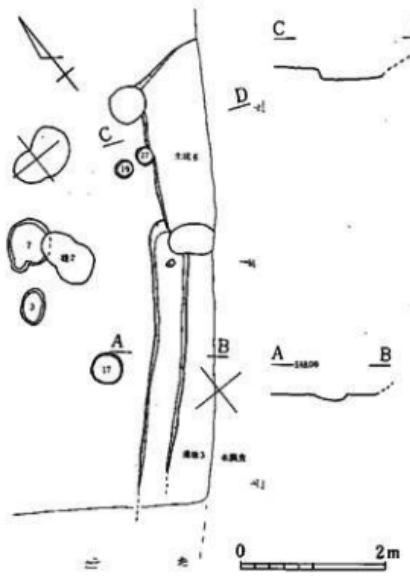


插图15 TKN 沟址1·2、暗渠



挿図16 TKN 溝3、土坑6、周辺柱穴

③ 溝3 (挿図16)

B3区調査区北側東隅に検出した。掘立柱建物址2、土坑6を切り、南側は浅くなり消滅するが、さらに延びていたものと考えられる。北東、南西方向に長さ4m程を確認した。比高差は北から南側へ4cmである。幅45cm前後で、深さは良好な残存部で8cmを測る。壁面は底部に近いため緩く立ち上がる。底部は平坦なものである。覆土は黒色土の一層で一気に堆積したものと思われる。また、地形の傾斜に対し横に検出され、底部の比高差がないことから、区画等なんらかの目的で、人為的に掘り回められた溝址と考えられる。

遺物は、何も出土しなかった。

時期は、掘立柱建物址2より古いことが把握できただけで、中世以降と判断される。

(佐合 英治)

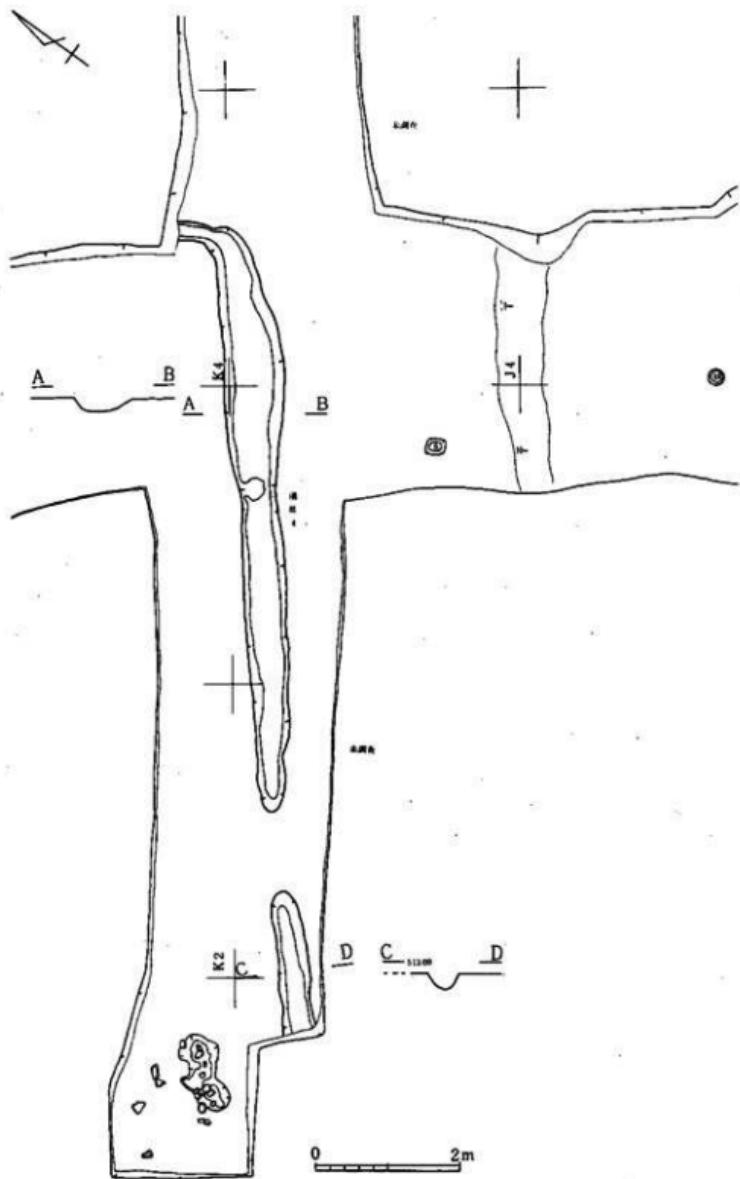
④ 溝4 (挿図17)

A2・3区レンチ調査部分の北側に検出した溝址である。北東、南西方向に長さ11mを確認し、両端は未調査部分に延びている。北東側では北西方向に、ほぼ直角に向きを変えている。幅は25~80cmで、深さは検出面から7~27cmを測る。壁面は緩く傾斜し、船底状の底部となるため、底部との境は明瞭でない。また、比高差は17cmあるが、同一方向に傾斜しているものではなく、南西側では1.1m途切れる部分もある。覆土は灰色粘質土で、一気に埋まったものと考えられる。本溝址は、地形の傾斜に対し横に検出されており、人為的に掘り回められた溝址と考えられる。

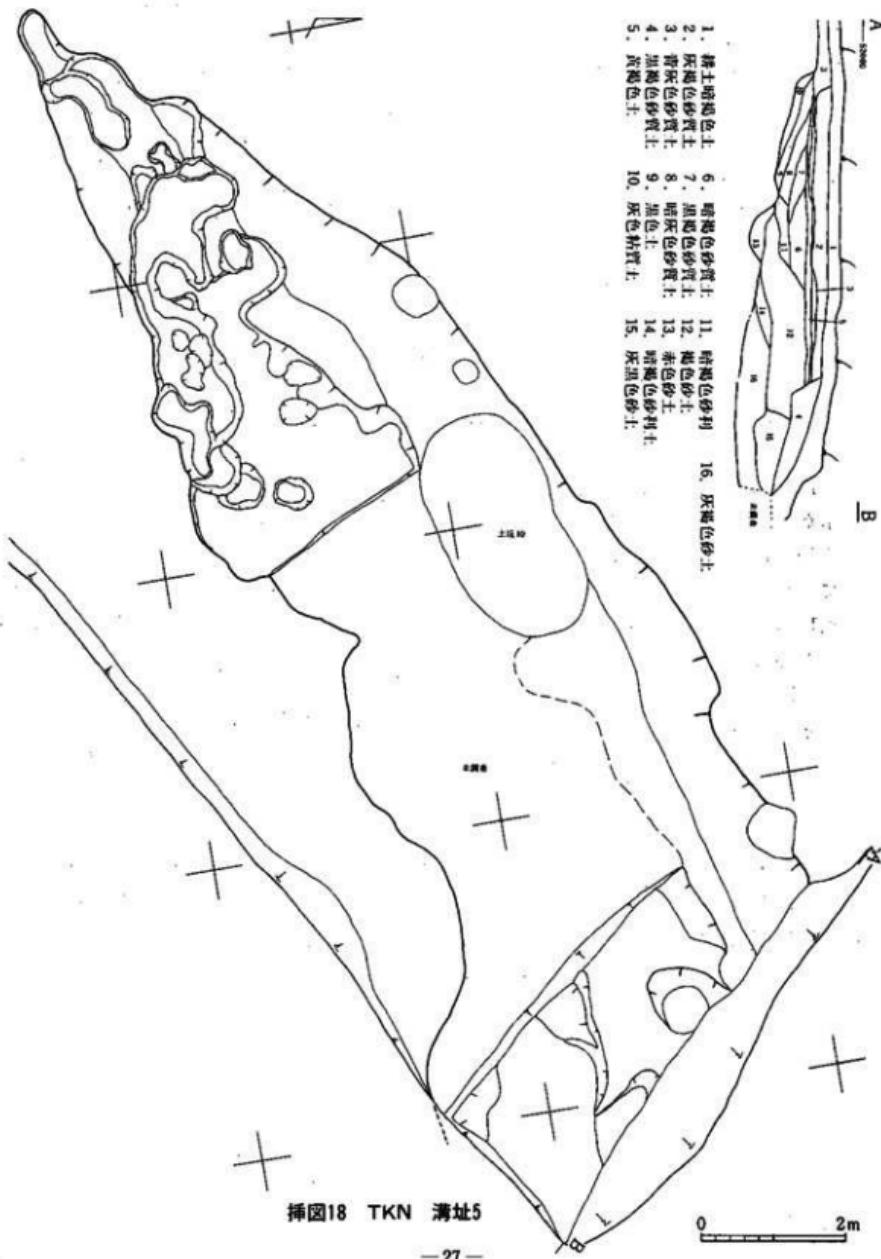
遺物には、須恵器壺、蓋があるがいずれも細片で、本址に直接伴うものではないと思われる。

時期は、不明である。

(佐合 英治)



插図17 TKN 溝址4、周辺柱穴



⑤ 溝址 5 (挿図18)

土坑10に切られる。本址の方向はN67.5° Eで、旧水田区画の方向とおよそ一致する。平面形は自然流路状を呈し、幅は一定しないが、広いところで6m以上を測る。西側上部は幅が狭いが、削平を受けたと考えられ、本来はもっと広いと考えられる。埋土は灰色系の砂土・砂質土と、黒色系の土・砂質土の互層状を呈し、流れの勢いはさほど早くない溝で、やや乾いた時期と豊富に水が供給された時期があったことが窺える。基底は灰色粘土層に達し、凹凸があり、側面もだらだらと壅む。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

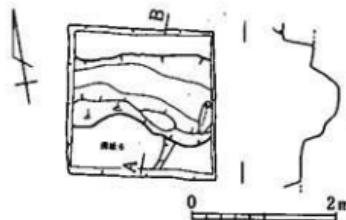
(馬場 保之)

⑥ 溝址 6 (挿図19)

E4区の試掘調査グリット (G-128)に検出した。東西方向に延びる溝址で、長さ1.9mを確認した。東へ5cm傾斜しており、幅は1m程、深さ45cm前後を測る。壁面は緩く傾斜し、底部には水流の浸食による凹凸がある。覆土は暗灰色粘質土と砂利の二層で、砂利層には大きな石も混入しており、かなりの水量があったものと思われる。地形の傾斜に添って検出され、覆土等の状態から、自然の溝址である。

出土遺物には、時期不詳の土師器破片がある。

時期は、不明である。 (佐合 英治)



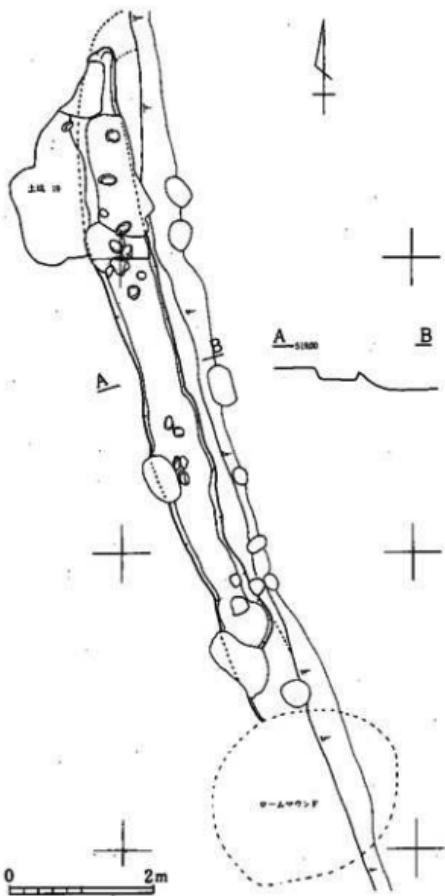
挿図19 TKN 溝址6
(試掘グリット128)

⑦ 溝址 7 (挿図20)

掘立柱建物址6、土坑19、ロームマウンドと重複する。長さ約9m、幅70cm、深さ10~20cm程度の溝址で方向はN18.5° Wを示す。現在の水田の畦畔とほぼ同じ方向をとる。基底ほぼ中央に20~30cmの礫がある。壁は急な立上がりを示し、人為的に掘り込まれた水路と考えられる。

土師器小片が出土したのみで、平安時代に属することのほか詳細時期は不明である。

(馬場 保之)



挿図20 TKN 溝址7

4) 小豊穴

本来、各遺構ごとに記述すべきであるが、溝状址1は遺物、遺構の状況から見て、関連性が極めて強いと考えられ、一括してここで扱った。

① 小豊穴1、溝状址1

(挿図21・第7~14図)

小豊穴1は規模 $280 \times 200\text{cm}$ 、長軸方向N 82.5° W を示す不整形を呈する掘込みである。北東壁下に $100 \times 70\text{cm}$ の落込みがある。特にフイゴの羽口、鉄滓が集中出土し、西壁寄りに完形の須恵高台壺が出土した。本址中央付近でごく微量ながら炭化物が検出された。

溝状址1は小豊穴1付近で屈曲し、その西側ではN 65° W 、南側でN 12° W の方向を示す。幅は5~6mで、側面はだらだらと壅み、中央より左縁寄りに幅約2mの急に落込む部分がある。この一段低い部分は大円錐混じりの砂疊層で埋まり、その上部に漆黒土が全体に被っている。須恵器蓋・壺・甕、土師器壺、フイゴ羽口、鉄滓等の大半はこの上層よりの出土である。

小豊穴1は溝状址1に関連した掘り込みであろう。

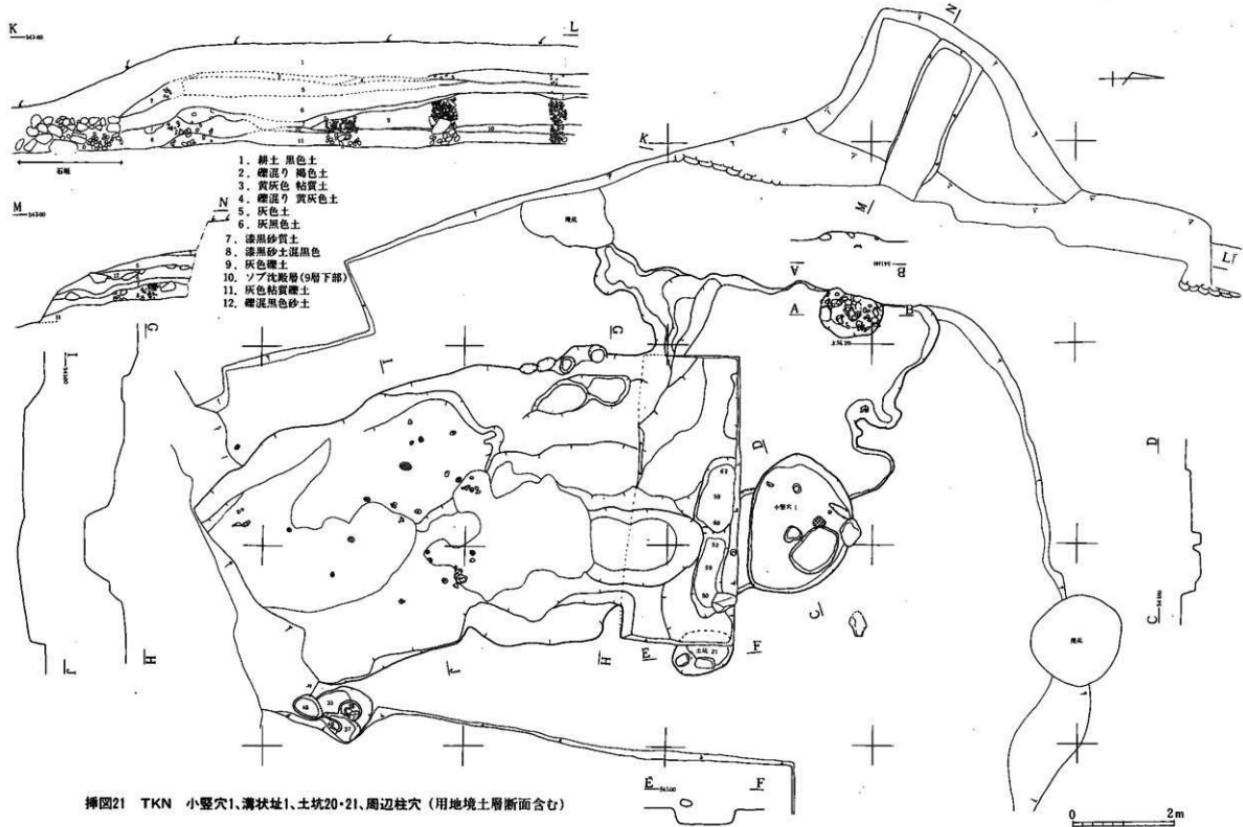
第7図~第9図3は小豊穴1出土の遺物である。第7図1~11の土師器甕は外面及び内面にクシ状工具によるカキ目が施される。それぞれの内面は口縁部にカキ目が頸部以下にナデが施されるもの(1・2)、口縁部に横ナデが以下横位のカキ目が施されるもの(4)、口縁部以下カキ目が施されるもの(3)がある。胴部以下では横位のカキ目が施されるもの(5)もあるが、大半はナデが施されるものである。口縁部はいずれも外反するが、4は頸部の屈曲がゆるやかで口縁がやや立ちぎみである。12は土師器壺底部、13~15は土師器甕底部で、13は外面にススが付着している。16は口縁部横ナデ、以下クシ状工具による整形後ナデが施される。内面にはヘラミガキ

が施され、坏底部付近に接合痕が残される。第8図1～7は須恵器裏の破片で1は内面に明瞭に同心円文が認められる。このほか2・6・7は同心円文が磨り消されている。7は内面底部付近に黒色を呈する付着物があり、漆かと思われる。第8図8～11は須恵器蓋で、外面上半はヘラケズリ、それ以外の部分にはロクロナデが看取される。8・9はロクロ左回転、10・11は右回転である。8は酸化焰焼成の褐色がかった蓋である。第9図1～6は高台坏で、いずれも内外面にロクロナデ、高台内にヘラケズリが施される。1は内面底部が擦れる。6は口径16.3cm、高さ5.9cmの大形完形坏であるが、焼け歪みがある。7～18・第10図1～3は須恵器环である。いずれも内外面にロクロナデがなされ、底部に回転糸切り痕をとどめる。10は接合しないものを含めて3遺存し、底部が膨らむ。13は他と器形を異にし、体部の立上がりは急で、口縁部が僅かながら肥厚する。16・18は底径は8cm内外と大きい。17は酸化焰焼成の褐色を呈する坏である。

第10図4～第13図は溝状址1出土の遺物である。土師器蓋（第10図4～15）はいずれも平安時代に比定されるもので、（内）外面にクシ状工具によるカキ目が施される。4・5は外面口縁部に横ナデが施される。6の内面は指頭による調整後、ナデ調整される。4・10は器面が荒れる。15は外面板によるケズリ、内面ロクロナデが施され、底部には静止糸切り痕が看取される。土師器高坏（17）は坏部内面及び脚部外面はヘラミガキされ、脚部内面にヘラ調整痕がある。坏部内面は黒色処理される。第11図1は内面及び外面口縁部に横ナデが施され、口径32cm、胴径35.1cmを測る。2は内面口縁部及び肩部に灰がかぶる。3・4は叩きの後内外面ともにナデ調整され、口縁部は横ナデされる。3は体部が球形に膨らみ、頸部の立上がりは小さい。4は頸部に僅かながら屈曲を持つ。内面の調整痕としては、ハケ痕を持つもの（5）、ロクロナデされるもの（7）、叩きの後磨り消すもの（10・第12図2）、ナデ及び指頭整形のもの（1）等がある。第12図1は肩部に蓋が付着する。3は外面体部下半にケズリが施される。4は口径19.4cm、胴径18.4cm、底径7.9cm、器高12.0cmの小型の裏でロクロ水引きされる。底部に静止糸切り痕が看取される。長頸瓶（5）・鉢（6）とともにロクロナデされ、長頸瓶口唇には自然釉がかかる。蓋はいずれもロクロ右回転のナデ痕を有し、外面上半にヘラケズリが施される。8は青味がかった灰色を呈する。9は焼き歪みがあり、縁の付近に灰がかぶる。台付坏（第13図1～5）はいずれも底部が膨らむ。内外面にロクロナデが、また高台内にヘラケズリが施される。4はケズリの後、ナデられている。坏（6～15）底部は6が荒れて不明であるが、静止糸切りの9以外は回転糸切りである。8はほぼ完形であるが、歪んでいる。

第14図は小堅穴1、溝状址1のフイゴ羽口を一括した。いずれも破損しており、遺存部位は先端が多い。先端部の内径は1.8～2.4cmと小形で、内面の形状は先端と根元の径が同一のもの（2～4・6）、根元の方が大きいもの（1・5・7～10）とがある。6は分析資料として送付した。鉄滓は大小あわせて602点が出土した。この中には橢形滓が62点含まれる。また、ブルーに発色したものも散見される。

小堅穴1、溝状址1の所属時期は出土遺物から平安時代初頭に比定される。（馬場 保之）



挿図21 TKN 小豊穴1、溝状柱穴、土坑20・21、周辺柱穴 (用地境界土層断面含む)

5) 溝状址

① 溝状址2 (挿図26)

B3区調査範囲のほぼ中央に検出した。東西方向に長さ2.5mを確認した。両側へさらに延びている。幅は35cm前後で、深さ5cm程を測る。壁はほとんど削平されており、底部は平坦なものである。覆土は漆黒色土一層である。地形の傾斜に添って検出され、かなりの削平を受けていることから、自然の溝址の底部が部分的に残ったものと考えられる。

遺物は、何も出土しなかった。

時期は、不明である。

(佐合 英治)

② 溝状址3 (挿図27)

A2・3区のトレンチ調査部のほぼ中央に、溝状址4・5とともに検出した。南東側は未調査部分となる。1.1mを確認した。幅は25cm、深さは5~10cmを測る。壁面、底部とも凹凸がある。覆土は黒色の泥土で、性格等は不明である。

出土遺物には、土師器細片があるが本址に伴うものかは不明である。

時期は、不明である。

(佐合 英治)

③ 溝状址4 (挿図27)

A2・3区のトレンチ調査部に検出し、南西に溝状址5がある。二本に枝分かれし、北西側は未調査部分になる。両方も、くの字に折れ曲がっている。確認した長さは、南西側1.25m、北東側1.7mを測る。幅はどちらも30cm前後で、深さはそれぞれ13cm程と8~30cmを測る。南西のものには傾斜はなく、北東のものは南東へ14cm傾斜する。覆土は黒色泥土である。

遺物は、何も出土しなかった。

時期・性格は不明である。

(佐合 英治)

④ 溝状址5 (挿図27)

A2・3区のトレンチ調査部に検出した。北西側は未調査区へ延びており、南東側は穴と切り合い不明となる。北西側で枝分かれし、確認した主たる溝状址は途切れている。長さは2.4mを測り、幅は30cm前後である。南東へ16cm傾斜しているが、深さは底部が急に落ち込むところもあり、一定でなく10~20cmを測る。緩く蛇行し、壁面、底部とも凹凸がある。覆土は黒色泥土である。

出土遺物はない。

時期・性格は、不明である。
(佐合 英治)

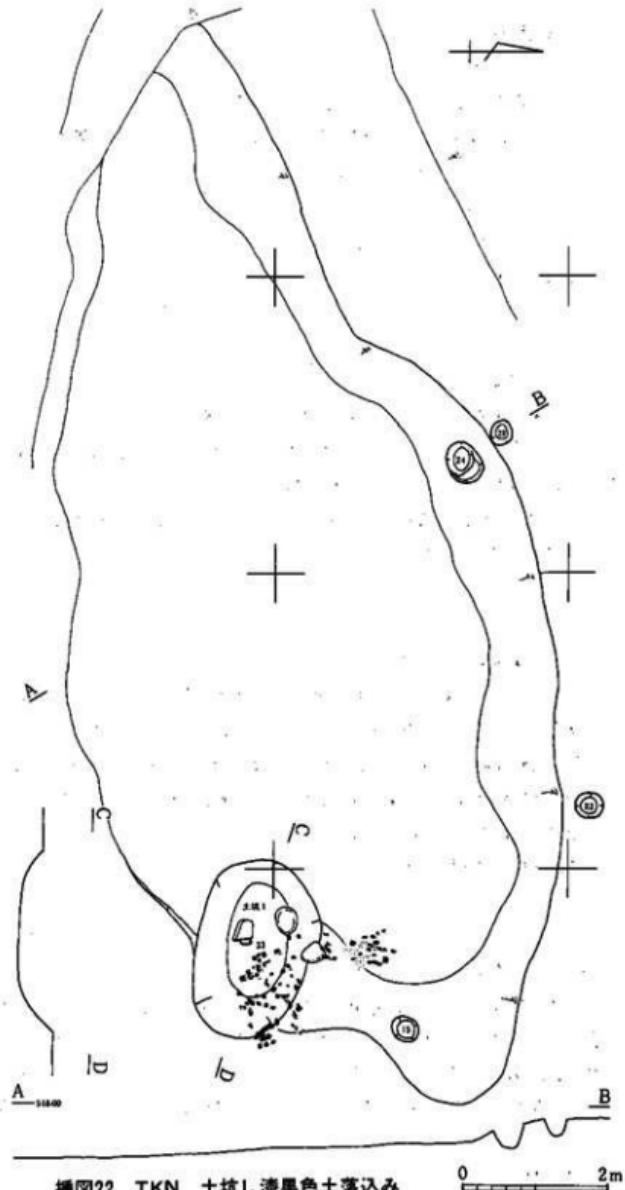
6) 土坑

① 土坑1

(挿図22 第5図)

B 3区の調査範囲

南端に検出した。旧水田の区画と考えられる漆黒色土の落ち込みに切られる。平面形は整った梢円形で、規模は 2.46×1.58 mを測る。深さは最深部で57cmを測る。長軸方向はN73°Wを示す。壁面は比較的緩く掘り凹められ、底部は船底状となる。覆土はほとんど漆黒色土であるが、検出面中央部にわずか褐色土がレンズ状に混入していた。また、検出面上には3m程の範囲に炭・焼土が認められた。しかし、本址中心部をそれており、覆土中にはまったく炭・焼土が認められず、確実に本址



挿図22 TKN 土坑1、漆黒色土落込み
(旧水田区画)

に伴うものであるかは把握できなかった。

出土遺物は少ない。図化等できるものは、縄文土器（第6図8）のみであるが、ほかの破片も縄文時代の深鉢である。

時期は、出土遺物から縄文時代中期初頭に位置づけられる。

（佐合 英治）

② 土坑2（挿図23 第28図）

B3区の調査範囲中央やや西寄りに検出した。南西に土坑3が近接する。平面形は北東南西方に向長い、崩れた梢円形である。規模は $2.45 \times 1.9m$ を測り、深さは最深部で1.06mを測る。壁面は場所により変化があるが、全体としては緩やかなものである。底部は穴の底部が重複したような状態となる。覆土は四層認められ、レンズ状の堆積を成し、最下層以外はゆっくり埋まつたものと考えられる。

遺物は、底部に密着して出土した、杭状の木片と石錐（28図4）がある。石錐は本址に直接付くものではないと思われる。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）

③ 土坑3（挿図23）

B3区の調査範囲中央やや西寄りに土坑2と隣り合って検出された。平面形は歪んだ梢円形である。北東、南北方向にやや長く、規模は $1.24 \times 1.1m$ を測る。深さは最深部で63cmである。壁面は緩く掘凹められている。底部は穴状の凹み部分もあるが、全体として船底状となる。覆土は漆黒色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）

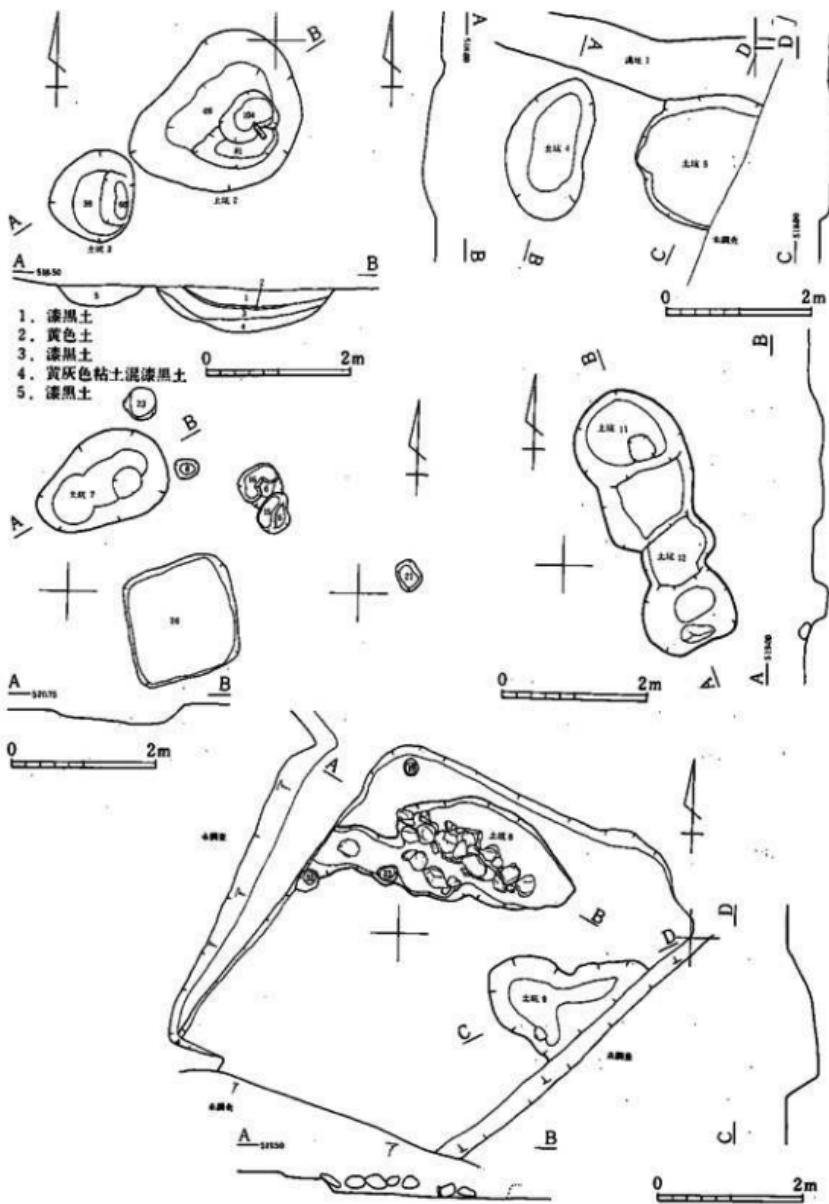
④ 土坑4（挿図23 第5図）

B3区北東端に検出した。平面形はやや長い歪んだ梢円形で、規模は $1.94 \times 1.8m$ を測る。深さは最深部で22cmを測る。長軸方向はN16°Eを示す。壁面はきわめて緩く立ち上がるもので、底部は船底状となる。覆土は漆黒色土の一層である。

出土遺物には、土師器片と自然石をそのまま利用した磁石（第5図9）があるのみである。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）



插図23 TKN 土坑2・3・4・5・7・8・9・11・12、漆黑色土落込み（旧水田区画）

⑤ 土坑5（押図23）

B3区の調査範囲北東隅に土坑4、暗渠などとともに検出し、溝址1を切っている。東側は未調査部分となり、確認できたのは全体の1/2程と思われる。平面形はほぼ円形と考えられ、規模は径1.8mを測る。壁面は角度を持って立ち上がり、底部は比較的平坦である。覆土は漆黒色土の一層である。

遺物は、何も出土しなかった。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）

⑥ 土坑6（押図16）

B3区の調査範囲北東部に検出した。掘立柱建物址2と重複するが、新旧関係は不明である。溝址2に切られ、東側は調査範囲外となる。平面形は切り合いが有るためはっきりしないが、方形と考えられ、確認した規模は $2.3 \times (0.8)$ mである。壁面は残存部が少ないので、ほぼ垂直の立ち上がりを成している。底部は平坦なものである。覆土は漆黒色土の一層である。

出土遺物はない。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）

⑦ 土坑7（押図23）

185×120cm、深さ29cmの卵形を呈する土坑で、長軸方向はN57.5°Eを示す。内部はだらだらと窪み、南東部は5cm程低い。

出土遺物はなく詳細時期は不明である。

（馬場 保之）

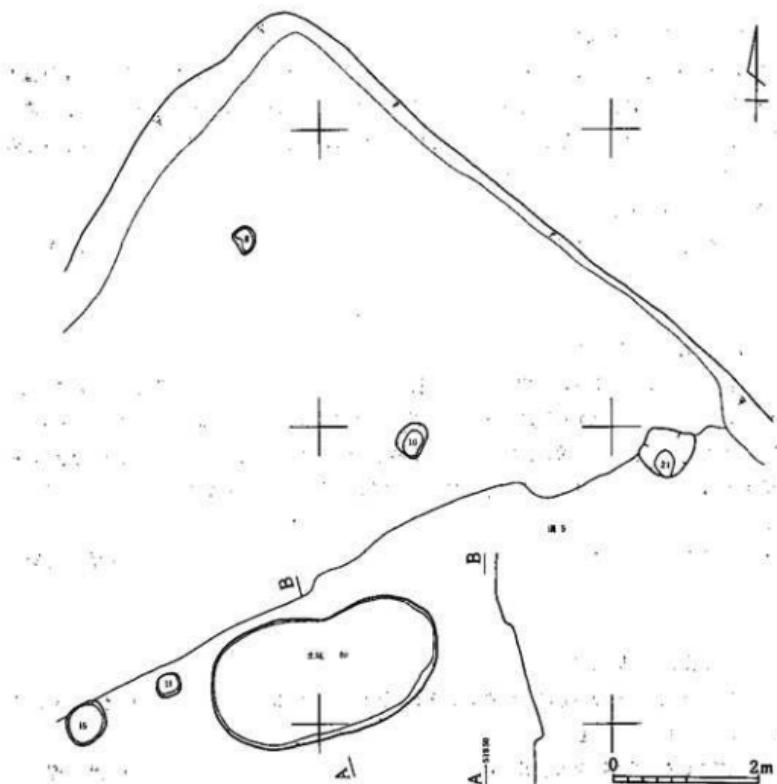
⑧ 土坑8（押図23）

一端が調査区外にかかり未調査で、東壁の一部はすでに削平されている。確認された一辺は140cm、深さ15cm程度の不整形の土坑である。底部ないしそれより若干上から20~40cm程の礫が入る。

本址より縄文時代中期の土器片（第5図10~12）、黒曜石剥片が出土した。10は縄文施文後縁沈線が施される。口縁外縁の隆帯は欠損し、内面までナデが施される。12は深鉢形土器の体部上半の破片で、外面褐色を呈し、内面は荒れている。

出土遺物等から縄文時代中期後半前葉に比定される。

（馬場 保之）



挿図24 TKN 土坑10、周辺柱穴、漆黒色土落込み（旧水田区画）

⑨ 土坑9（挿図23）

調査区外にかかり全体を調査できなかった。深さ約40cmの不整形の土坑である。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、底部南西側がやや低い。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。（馬場・保之）

⑩ 土坑10（挿図24）

320×170cm、長軸方向N75°Eを示す草履形を呈する土坑である。断面皿状を呈するが、底部

は南側に下がっている。

本址より遺物は出土しておらず、詳細時期は不明である。

(馬場 保之)

⑪ 土坑11 (押図23)

B 2 区調査範囲中央やや北に検出した。土坑12と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は最終的に北西、南東方向にやや長い楕円形となり、底部の状態から二つの土坑が切り合ったものと考えられる。北側の土坑の平面形はほぼ円形で、規模は径1.4×1.1mを測り深さは最深部で47cmを測る。南側の土坑の平面形は方形に近いものと思われ、切り合いのない部分で径1.3mを測る。深さは31cmである。壁面は両方とも角度を持って立ち上がっている。底部は北側のものが碗状、南側のものが平坦である。覆土は両者とも漆黒色である。

遺物は、きわめて少ない。縄文土器片、時期不詳土器数点があるが、本址に直接付く可能性は少ない。

時期は、出土遺物等からは位置づけられなかった。

(佐合 英治)

⑫ 土坑12 (押図23)

B 2 区調査範囲の中央やや北側に、新旧関係不明の土坑11と切り合って検出された。検出面では確認できなかつたが、最終的に底部の状態から土坑11と同様に、二つの土坑が重複していたものと判断される。平面形は両者とも、方形に近い楕円形と考えられる。規模は南側のものが1.3×1.0m、北側のものは切り合いのない部分で径1.0mを測る。深さはそれぞれ35cmと18cmである。前者の壁面は比較的角度を持って掘られており、床面は碗状である。後者はほぼ垂直な壁面を持ち、床面は平坦である。覆土は両者とも漆黒色土の一層である。

遺物は、出土しなかつた。

時期・性格は不明である。

(佐合 英治)

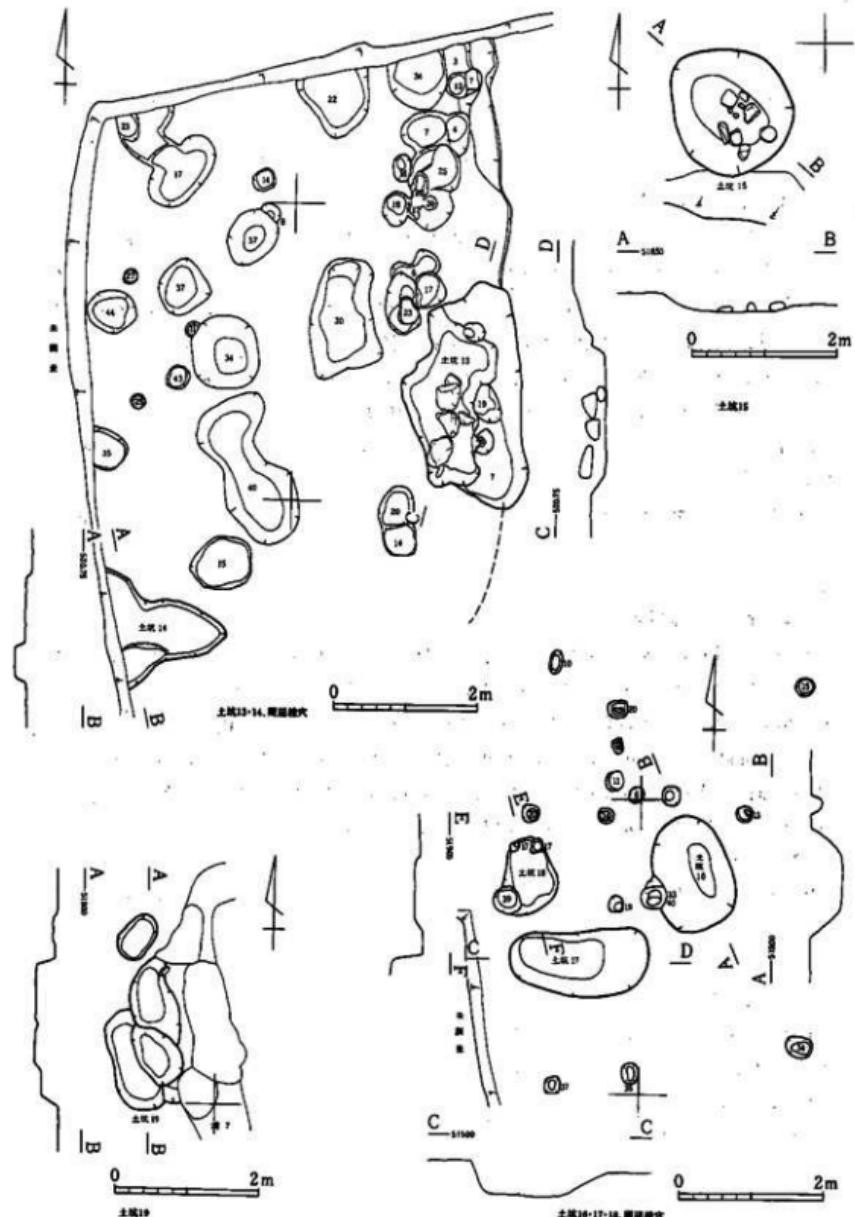
⑬ 土坑13 (押図25)

規模310×165cm、長軸方向N 5° Wを示す不整形の土坑である。西側が一段低くなり、31cmを測る。底部から10~20cm浮いた状態で40cm前後の疊が中に入る。

出土遺物は多く、土師器壺・高壺・甕・須恵器甕片等が出土した。

本址の所属時期は平安時代に比定される。

(馬場 保之)



插図25 TKN 土坑13-14、周辺柱穴、土坑15-19、土坑16-17-18、周辺柱穴、
 - 40 - 漆黒色土落込み（旧水田区画）

⑭ 土坑14（挿図25）

C 3 区で検出された。調査区外にかかり断片的に調査したにとどまるが、確認された規模は $160 \times 150\text{cm}$ である。深さ約8cmで南側はさらに15cm程度む。

本址からは土師器坏・甕が出土している。

平安時代に位置づくことのほか、詳細は不明である。

（馬場 保之）

⑮ 土坑15（挿図25）

B 2 区調査範囲の南、B 2 n 8 グリットに検出した。北に掘立柱建物址 4 、南に掘立柱建物址 5 がある。平面形は北西・南東にやや長い崩れた梢円形で、規模は $1.75 \times 1.6\text{m}$ を測る。深さは最深部で25cmである。壁はきわめて緩く傾斜し、底部との境は明瞭でない。底部には20cm前後の石が認められた。石の厚さはみな5cm程で、底部に密着していることから、敷きつめられていたものと考えられる。覆土は暗褐色土の一層で、一気に埋まつたものと考えられる。

遺物は、出土しなかった。

時期・性格は、不明である。

（佐合 英治）

⑯ 土坑16（挿図25）

B 2 区調査範囲の中央やや南に、土坑17・18と併に検出した。平面形は崩れた梢円形である。北西・南東に長く、規模は $1.5 \times 1.05\text{m}$ を測る。深さは最深部で49cmを測る。壁面は角度を持って掘り凹められている。底部は丸味を持つもので、掘り方に比べ小さい。覆土は締まった褐色土である。

出土遺物には、縄文土器片がある。

時期は、出土遺物から縄文時代中期に位置付けられるが、詳細時期及び性格は不明である。

（佐合 英治）

⑰ 土坑17（挿図25）

B 2 区調査範囲の中央やや南のB 2 q10 グリットに検出した。北側に土坑16・18が近接する。平面形は歪んだ長梢円形である。規模は $1.92 \times 0.9\text{m}$ を測り、東西方向に長い。深さは最深部で47cmを測る。壁面は西側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、東側はきわめて緩く立ち上がる。底部は船底状となる。覆土は締まった褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。

時期・性格は、不明であるが、覆土、造構等の状態が土坑16と同じことを考えると、縄文時代

に位置づく可能性がある。

(佐合 英治)

⑩ 土坑18 (挿図25)

B 2 区調査範囲中央やや南に検出した。土坑16・17が南東に近接する。平面形は歪んだ方形で、南北にやや長い。規模は 1.0×0.65 mで、最深部は10cmを測る。残存部が少ないためか、壁面は比較的緩い立ち上がりである。底部は細かな凹凸は有るもの、平坦なものである。覆土は褐色土の一層である。

出土遺物は何もない。

時期・性格は、不明である。

(佐合 英治)

⑪ 土坑19 (挿図25)

B 2 区で検出された。溝址 7 と重複する。 210×100 cmの不整形を呈する土坑である。内部は平らな部分を 3 つもち、それぞれ深さは 24、33、33cm を測る。

出土遺物はなく、詳細時期等不明である。

(馬場 保之)

⑫ 土坑20 (挿図21、第5図13)

F 4 区で溝状址 1 と重複して検出された。 120×85 cm、深さ 30cm の不整形円形を呈する。だらだらと落込む掘り方で、10~30cm 程度の疊が多数入っていた。

出土遺物には、完形の須恵器壺の他、土師器甕、内黒壺が出土した。第5図13は内外面灰色を呈し、口径 12.9cm、底径 6.9cm、器高 5.4cm を測る。内外面ともロクロナデが施され、底部糸切り痕はロクロ右回転を示す。

出土遺物等から平安時代前期、九世紀前半に比定される。

遺物は小豎穴 1 、溝状址 1 とほぼ同時期のもので、これに関連した施設である可能性もある。

(馬場 保之)

⑬ 土坑21 (挿図21)

F 4 区で検出された。溝状址 1 と重複しており、西側を確認できなかつたが、規模 $120 \times (95)$ cm、深さ 14cm の不整形円形を呈する土坑と思われる。南壁側がゆるやかな立ち上がりを示し、内部に 30~40cm の疊が 2 個入る。中央側の疊は台石の可能性もある。

本址からは土師器甕片が出土したのみである。

出土遺物等から平安時代に位置づけられる。

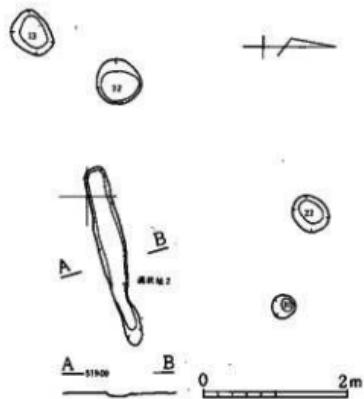
(馬場 保之)

7) 柱穴群

① 試掘グリット17柱穴 (挿図27)

A 2区の東、道路脇の試掘グリットである。複数の穴が切り合っているものと判断したが、最終的に掘り上りは、溝状址及び土坑状となった。どちらも未調査部分にかかる。溝状のものは東側で深さ26cm、北側で47cmを測る。壁面はほぼ垂直で、底部は平坦なものである。土坑状となつたものは、底部に18cmの段差が認められ、二つの造構が切り合ったものと考えられる。深さは最深部で56cmを測った。灰色粘土の地山に、漆黒色土の覆土が入っていた。

遺物は、上部の黑色水田客土層から、縄文土器、黒曜石、土師器、須恵器壊などが破片で出土



挿図26 TKN 溝状址2、周辺柱穴

しているが、遺構覆土からは出土しなかった。

時期・性格は、不明である。

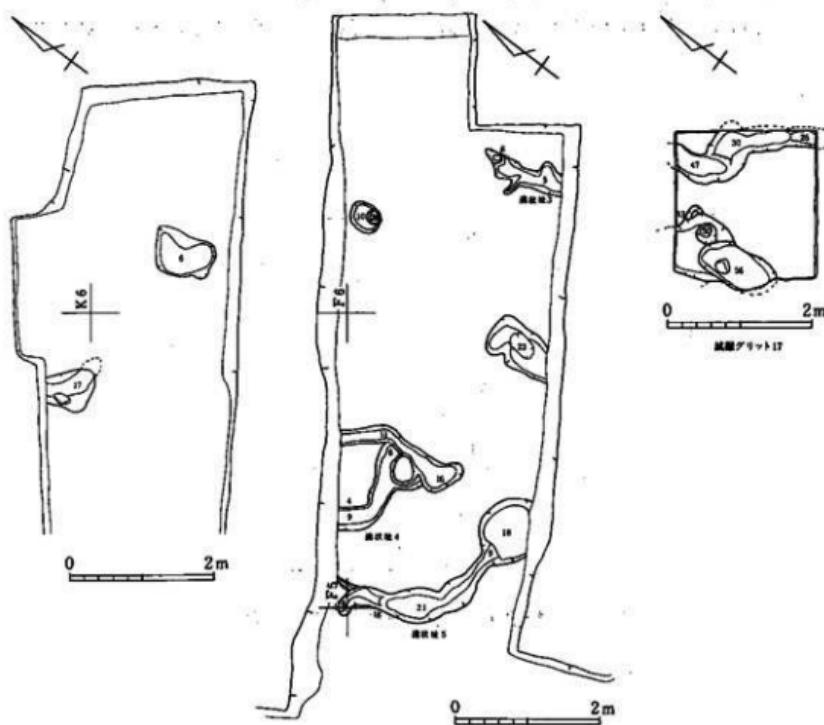
(佐合 英治)

② A 2・3区柱穴 (挿図27)

A 2・3区のトレンチ調査部分の柱穴である。全体で9本確認された。柱穴の集中する部分もなく、規格性もない。この内、北西隅には栗石と思われる径10cm程の石を伴った柱穴が二つ切り合って検出された。覆土は、栗石を伴う穴と、径20cmの小形の穴が黒色土で、他のものは漆黒色土である。

柱穴に直接伴う遺物は出土せず、時期・性格は、不明である。

(佐合 英治)



挿図27 TKN A2・3区柱穴、溝状跡3・4・5、試掘グリット17

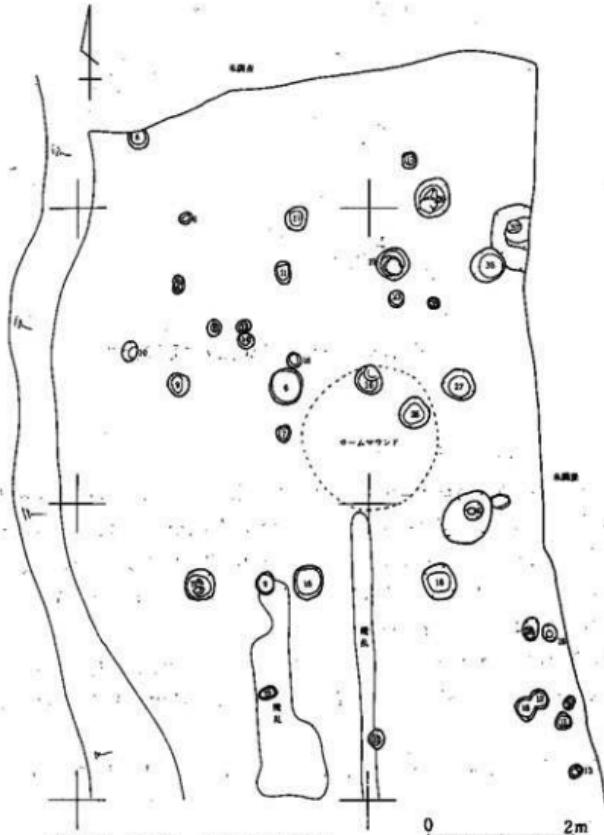
③ B2区柱穴群（挿図28・29・30・31 第6図）

B2区調査範囲内の柱穴は、掘立柱建物址が検出された南側に集中する。検出面が全体に傾斜するためと、水田の造成により、深さはさまざまであるが、平面形はみな円形である。覆土から見ると、径40cm程を測るものと、径30cm以下とのものとに別れ、前者が漆黒色土、後者が黒色土又は、暗褐色土になるものがほとんどである。また、後者は覆土中に炭が含まれるものがあり、底部も叩かれたよう堅く締まっているものもある。規格性のある並びは把握できなかったが、掘立柱建物址掘り方の補助的な穴、もしくは柵など区画等の柱穴が想定される。

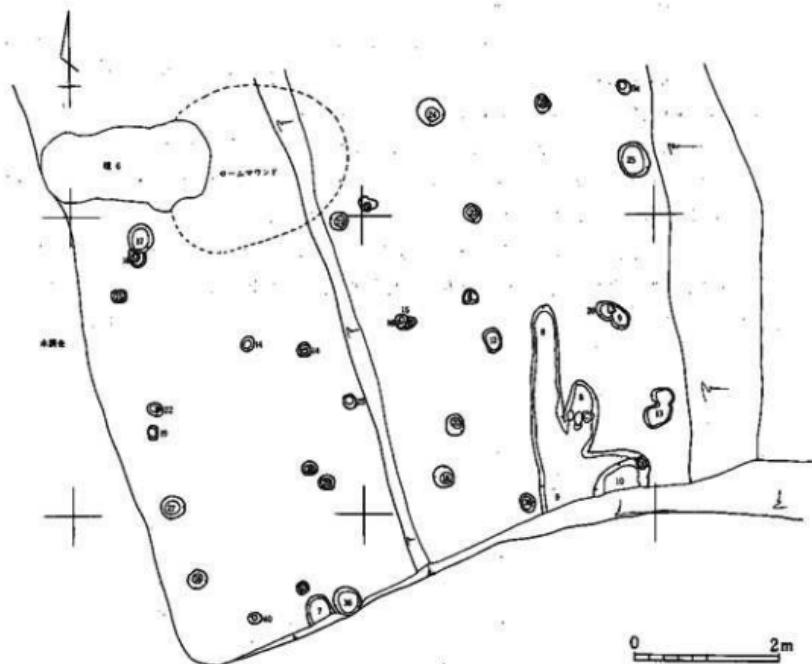
遺物は、ほとんど出土しない。土師器、灰釉陶器のほか砥石（第6図1）があるのみである。

時期が確実に把握された穴はない。周辺の出土遺物、造構の状態から、中世に位置づくものが多いと思われる。

（佐合 英治）



挿図28 TKN B2m6周辺柱穴



挿図29 TKN B2n4、B2o4周辺柱穴

④ B 3 区柱穴群 (挿図32 第6図)

B 3 区の柱穴は、径40cm前後を測るものと、20cm程のものに大別される。後者は漆黒色土が厚く堆積していた、北側の湿地部分に集中する。覆土は漆黒色土で、底部の状態などから、掘り方ではなく、杭を打ち込んだものと考えられる。並ぶ列は確認できなかったが、柵や区画のためのものと判断した。前者は全体で十数本検出したが、集中するものもない。覆土も黒色土、褐色土、灰黒色土などさまざままで、性格は不明である。

この内、掘立柱建物址 1 の南西に検出した穴の周りには、叩き状の面が認められ、穴の中より、いわゆるカワラケの皿の完形品（第6図2）が出土した。中世に位置付く、なんらかの遺構が存在した可能性がある。

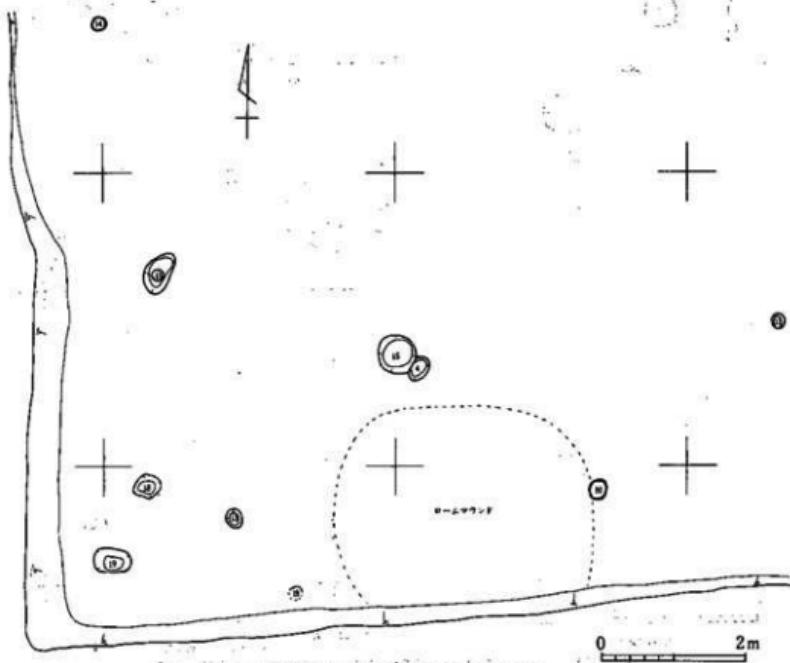
ほかの穴の遺物は、土師器片ある。磨滅しており、遺物から時期、性格等を把握できるものはない。

（佐合 英治）

⑤ C 3 区柱穴群 (挿図 5・25・33、第6図 3~8)

C 3 区の柱穴群はやや疎な分布を示す一群と、土坑13西側に集中する一群がある。前者は径40~50cm程度の柱穴がいくつか検出されたが、建物址を構成するものとは思われない。また、出土遺物も少ない。後者は土坑13を通り N 5° W の方向に延びる旧水田区画の西側、漆黒砂土の範囲から検出された。基底はいずれも褐色砂疊層に達している。径20cm程の小柱穴から205×100cmの不整形を呈するものまでさまざまであり、深さは4~44cmと不揃いである。

第6図 3~5 は C 3 c15p 1 出土の土師器甕体部破片である。ともに外面に縦位のカキ目、内面横ナデが施され、4・5 は同一個体である。平安時代に比定される。6 は C 3 g14p 2 出土の土師器甕底部片で 1/2 遺存する。内外面ともナデが施されるが、器面は荒れている。7 は C 3 g14p 5 出土の土師器の底部で壺と思われる。内外面ナデが施され、底部中央の凹部は指頭の調整により作出される。8 は C 3 f15p 1 出土の須恵器杯で、内外面にロクロナデが施される。他に C 3 f 15p 1 からは土師器高环・甕等遺物が多く出土した。図化が困難なものとしては以下のものがある。土師器甕・壺・須恵器杯 (C 3 f15p 5)、土師器甕・高环・須恵器甕 (C 3 f14p 2)、土師器甕・須恵器片 (C 3 f15p 3)、土師器甕 (C 3 f14p 1)、須恵器甕 (C 3 e14p 1)、カワラケ系の皿



挿図30 TKN B2s11周辺柱穴

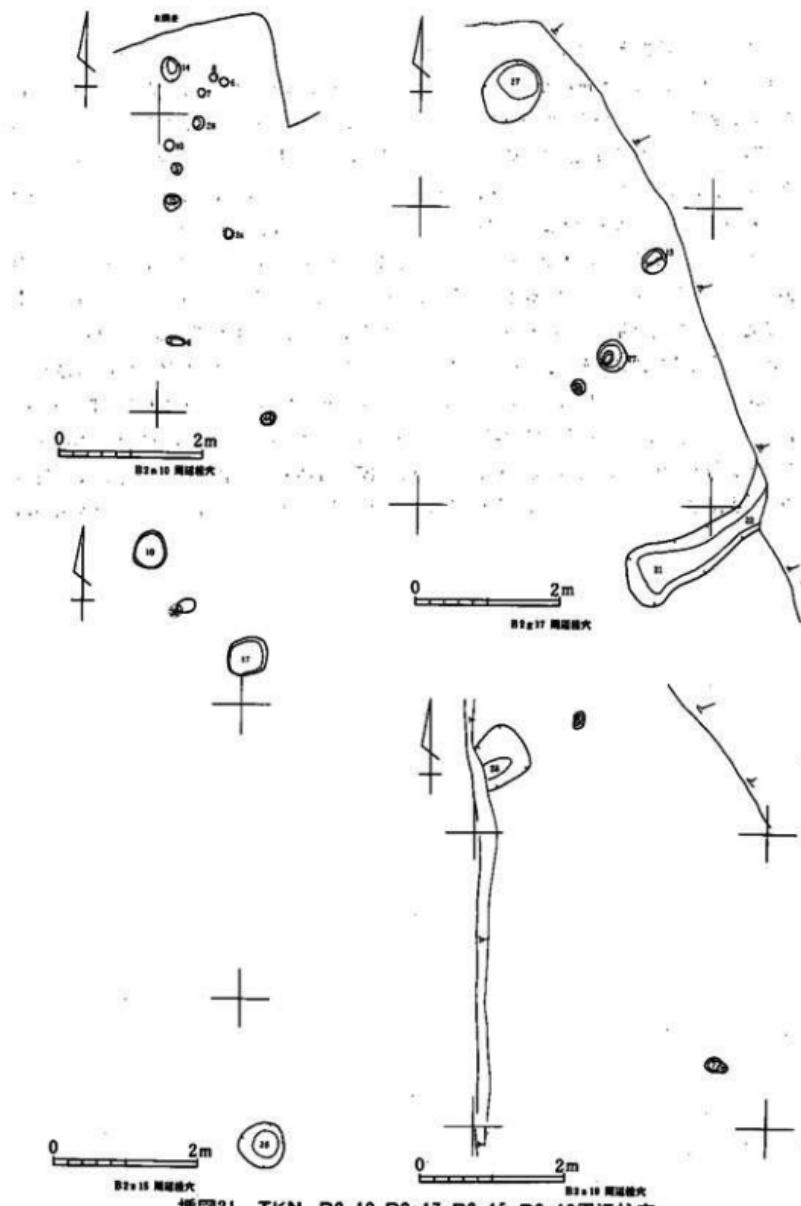
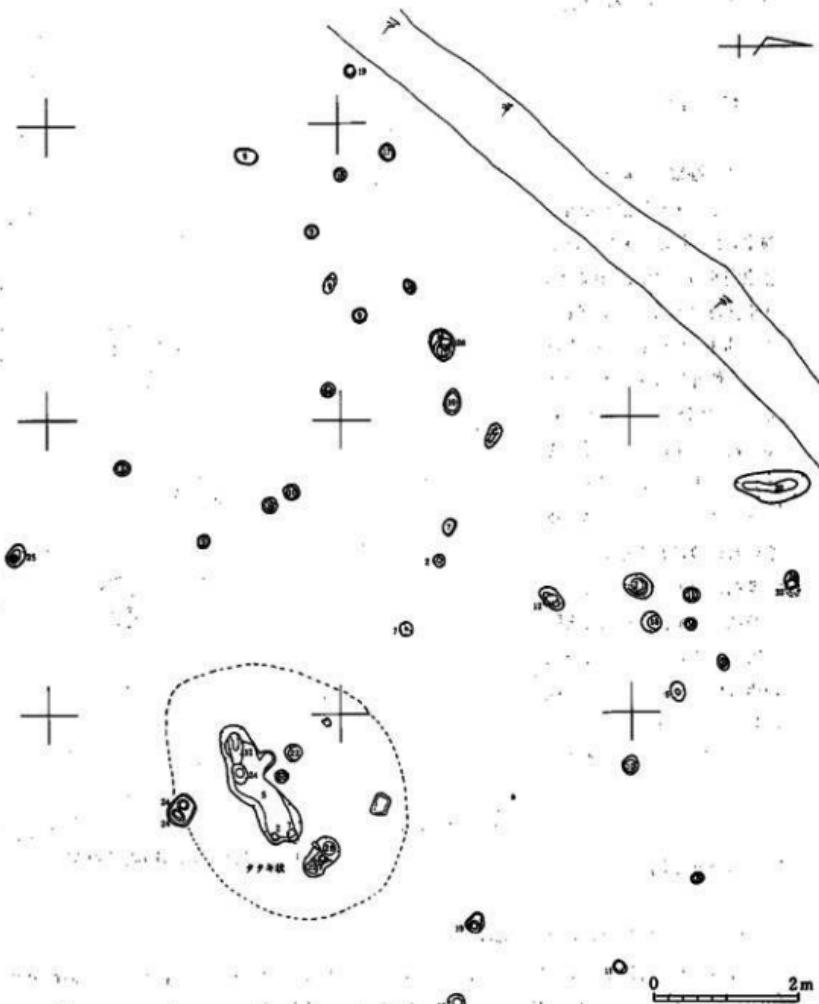


図31 TKN B2n10、B2q17、B2s15、B2s19周辺柱穴

片 (C 3a15p1)、石器 (C 3f14p 3)、土師器片 (C 3f13p1、C 3f14p 3、C 3f15p 2、C 3g 13p1、C 3g14p 3・p 4)、須恵器片 (C 3g14p1) である。C 3f13p1の土師器片はやや量が多い。

出土遺物等から本区の柱穴は大半が平安時代に属するものと考えられる。(馬場 保之)



挿図32 TKN B3118周辺柱穴

⑥ F 4 区柱穴群 (挿図6・21)

溝状址1に接し、調査区南東端に検出された。約半分が未調査で全体形は不明であるが、内部は幾段かに窪む。20~30cmの礫が入る。

出土遺物はなく、詳細時期不明である。(馬場 保之)

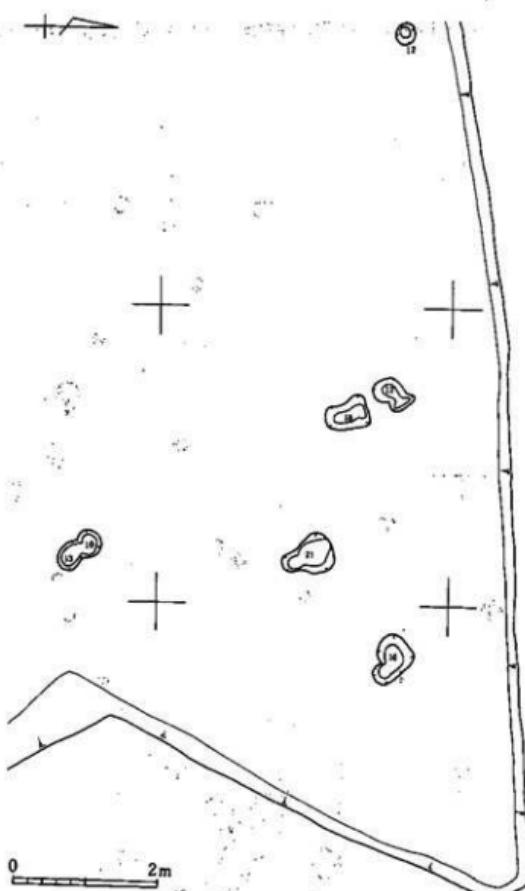
8) 暗渠

① 暗渠 (挿図15)

B 3 区の調査範囲北東端に検出した。溝址1・2を切る。北東南北方向に6.3m確認し、北東側は未調査区に延びている。幅40cm程をわずか掘り凹め、両側面に竹を二本づつ置き、中央部を水ミチとしている。杭をX字に打ち込み竹を固定し、上面を5~15cmの花崗岩自然石で覆っている。排水のための暗渠である。

遺物は出土しなかった。時期は、現在の水田畦と同一方向に確認されたことや、遺構の状態を考えると、近代以降に位置付けられる。

(佐合 英治)



挿図33 TKN C3b15周辺柱穴

9) その他の遺構

① F 4 区土器包含層 (第25図)

F 4 区の調査範囲北東端の漆黒色土中に、同時期の遺物が多数出土した。精査したが遺構のプランは捉えられず、包含層と判断した。図化できるものに土師器壺 (第25図11・12)、高杯 (第

25図13・14・15)がある。壺11は外面ヘラミガキするもので、胴が張り、球形となるもの、12はやや胴の長くなるものである。高环は、环部に棱を持つものと持たないものがあり、整形は器面が荒れるためはっきりしない。

これら土器の時期は、混入品もあるが、古墳時代前期から後期にかけてのものである。

(佐合 英治)

② 漆黒色土落ち込み(旧水田区画)

B 3 区の南側中央部と南西隅、及び C 3 区の西隅に確認した。どの部分も当初堅穴住居址と考え掘り下がったが、床面が確認できぬまま地山が露呈した。全体が自然地形に添ってわずかづつ傾斜している。漆黒色土の覆土もこれに添って堆積し、落ち込みの確認できる部分が厚く、低い部分になる程薄くなり把握できなくなった。B 3 区南の落ち込みは、精査すると緩やかなものとなり、ほかの二カ所のものは凹凸の激しいものとなった。遺物の出土状態や、周囲の微地形から、旧水田の区画ではないかと判断した。しかし、部分的な把握であるため確証は得られなかった。

出土遺物は、土師器、須恵器等の破片がある。上面に多く本遺構には直接伴わないものと思われる。

時期は、不明である。

(佐合 英治)

10) 遺構外遺物

遺構外遺物は、一括して記述すべきであるが、調査の対象範囲が広範囲に及ぶため、河川等により生活面が寸断されている部分があり、地形からみて同一面となる、大グリットの範囲をいくつかに分けて掲載することにした。

① A 2・3 区遺構外遺物 (第15・28・29図)

A 2・3 区において、トレンチ調査部分と、試掘坑から出土した。水田の耕土下の客土と思われる黑色土からほとんどの遺物が出土した。この層には、炭化した細かな木片が混入していたが、この層の時期は不明である。

この地区での縄文時代遺物はきわめて少なく、中期土器片(第15図1)があるのみである。

土師器には、壺の底部(2)と、小形の壺(3)があり、後者はトレンチ調査部分の南にある河川の付け替え工事部分から出土しており、B 3 区の該期に属する遺構等から転落した可能性が高い。

須恵器には、壺(4・5)、高台付きの環(6)があり、平安期に位置づくものである。

ほかに、灰釉陶器(7)、下ろし皿(8)、瓦器製の摺り鉢(11)、天目茶碗(9・10)がある。7 の灰釉陶器の胎土は粗いもので、下ろし皿、瓦器同様中世に位置づくものと考えられ、天目茶

碗は近世以降である。土器としてはかに、第29図1の須恵器質の製品があるが用途等は不明である。

石器には、打製石斧（第15図12）、不定形石器（13）のほか、剥片石器（第28図5）がある。

鉄製品には、リング状のもの（第29図7）がある。用途等は、不明である。（佐合 英治）

② B 2区遺構外遺物（第15・16・17・28図）

B 2区の遺構外遺物は、試掘坑及び遺構検出面上部の、地山の漸移層と考えられる暗褐色土から出土している。

この地区での縄文時代土器には、中期土器片（第15図14・15）があるのみである。

器形の知れる土師器は出土しなかった。須恵器には、小形の壺または甕（16）、高坏（17）、底部に窓印のある小形の短頸壺と思われるもの（18）のほか、甕（第16図1～5）がある。

ほかに、灰釉陶器（6・7）、中世の皿（8・9）、摺り鉢（10）、陶器壺または鉢（11・12）、中近世の仏飯器（13）、磁器製茶碗（15）がある。

石器には、石庖丁（16）、不定形石器（17）、有肩肩状形石器（18）、砥石（19）、打製石斧（第16図1～5）、打製石器（6・7）、磨製石斧（8）のほか、黒曜石やチャート製の剥片石器がある。

（佐合 英治）

③ B 3・C 3区遺構外遺物（第17～25・28・29図）

この地区的遺構外遺物のほとんどは、水田客土下に広がる漆黒色土から出土した。北側では中世遺物が多く、南の河川により造られた肩部に縄文土器が集中する。

縄文時代土器には、中期の中頃と思われるもの（17図9～16）、中期後半前葉に位置づくもの（第17図17～23・第18・19図・第20図1～5）、中期後半後葉の土器（第20図6～20）がある。このうち第18図4～13は一固体である。

弥生時代の遺物として、壺（第21図1）、甕（2～8）があり、いずれも後期に位置づくものである。

土師器には、台付き甕脚部（第21図9）、甕（10）、てづくね（11）、のほか高坏（12～15）がある。全体形が不明のものもある為、詳細時期ははっきりしないが、古墳時代前期から後期にかけての土器と思われる。また、該期時期の須恵器として蓋坏（第22図1）がある。

平安時代の遺物には、甕（第23図1）、盤と思われるもの（2）、坏（3）、灰釉陶器（4）のほか、須恵器として坏（第22図2～4）、高台のつくるもの（5・6）、大小の壺（7・8）がある。また、甕（9～24）には古墳期のものも含まれている可能性がある。

灰釉陶器（第23図5）は、胎土が粗く中世に位置づくと考えられ、ほかに本期に位置づくものと

して、土師質の皿（6～15）、青磁（16）がある。ほかに須恵質土製品として、第29図2～5があるが用途は不明である。

石器として石匙（第23図17）、打製石斧（18～20・24図1～12）、横刃型石器（13～15）、打製石庖丁（第25図1～3）、このうち3は刃部のみを研磨している。半磨製石庖丁（4）、敲打器（5）、磨製石斧（6）、時期不詳砥石（7）がある。ほかに、黒曜石剥片、石核、尖頭器、石鎌等（第28図11～18）がある。

鉄器には、用途不明の第29図10と釘（11・12）があるが、所属する遺構、時代は不明である。

（佐合 英治）

④ D 3 区遺構外遺物（第25図）

遺物は、高環2点（第25図8・9）のほかは何もない。詳細時期は不明であるが、古墳期のものである。いわゆる地山まで1m以上測る部分で、最下層に50cm程厚く堆積する漆黒色泥土の上層、地上から60cmの黑色土中から出土した。黑色土上層の灰色粘質土も含め、自然に押し出され堆積した層と判断され、該期遺構が西側に想定される。

（佐合 英治）

⑤ E 5・F 4・5 区遺構外遺物（第26～第27図、第28図19・第29図8）

F 4 区からは縄文時代（第26図1）、弥生時代（2）、古墳時代（3・4）の遺物の他、小豊穴1、溝状址1に関連すると思われる平安時代初頭の多数の遺物が出土した。3は口径14.6cm、器高5.3cmの内面黒色処理された环で、内外面へラミガキが施されるが、底部付近は器面が荒れる。4はナデが施され、内面にしばり痕をとどめる。土師器甕（5～11）は口縁部横ナデ、以下内外面クシ状工具によるカキ目が施される。内面に5は刷毛ナデ、8は指頭・板によるナデが認められる。須恵器甕（12～17）のうち、内面に叩きの痕跡が認められるのは17のみで、それも磨り消されている。12は刷毛によるナデが施される。15・16は内面に灰がかぶる。19の台付甕は部分的に自然釉がかかる。須恵器环（第27図1～6）は回転糸切りされる。7は静止糸切りの後、高台が付される。9は陶器の小皿で縁がかった黄色の釉薬がかかる。その他、打製石斧（10）、砥石（11）、削器（第28図19）が出土した。

またE 5 区からは試掘調査の際、用途不明の板状の鉄製品（第29図8）が出土した。

（馬場 保之）

IV ま と め

以上、本書においては、発掘調査の結果明らかになった事実について示したが、当市内において、調査例の少ない山間地の傾斜面に立地する遺跡のため、調査実施にあたり若干のとまどいや遺構検出作業そのものに若干の問題を残す部分もあったが、一定の成果を上げ得たものと解している。

以下に、本調査の成果等から考えられる問題点のいくつかを挙げて、今後の諸分野での研究資料となることを期待したい。

傾斜地に立地するために、耕地確保の際に本来の地形がかなり削平された状況にあり、そのため遺構の残存状態も不良であったが、遺物としては、縄文時代中期の土器・石器が比較的多量に出土している。

土器の様相は、飯田市周辺の中期後半のそれと大異はないが、天龍川沿いからは若干西に寄る山間部でもあり、その位置的な条件もあってか、西方地域（美濃地方）との関連を強く感じられる文様の土器もある。また、石器について、天龍川沿いの一帯では、石鏃など小型利器以外は、その素材として天龍川原にある石材によっているが、本遺跡ではそれ以外の石材使用も目立つ傾向にある。

いずれも、飯田盆地を中心地帯とすれば、周辺的な様相を本遺跡の状況から感ずることができる。今後、関連する周辺遺跡のあり様を整理する中で、該期における他地域との交流あるいは文化伝播の様相を知ることができると考えられる。

弥生時代後期から古墳時代については、古墳時代前期の竪穴住居址及び、土器・石器類が発見されており、一定の期間集落が展開していたものと考えられる。

集落そのものについては、今回の調査のみでは具体的に明らかにされなかったが、今次調査範囲外及び、かつての耕地造成時に削平された部分に存在した可能性が強く、その規模については森下沢川沿いの湿地部分を基本とする可耕地を主たる生産基盤としての生産量に見合ったものであったと推考される。

いずれにしても、この時代において定着した人々が、今の久米・朝臣の様相を成さしめた基礎となっている可能性が強い。

古墳時代後期から奈良時代においては、具体的な遺構等の確認はできなかったが、土師器・須恵器の断片的な資料が発見されており、今次調査範囲外に関連する遺構等の存在が予想される。

ここで注目されるのは、次代にあたる平安時代の本遺跡の位置づけであるが、本文中をはじめ

各所で触れたとおり、光明寺との関連をどうとらえるのかが主たる觀点といえる。

検出された遺構として、住居址・掘立柱建物址・製鉄工房址などがあるが、地形的要因もあって、集中し、かつ多数が確認されるという状況ではなく、個々についてより深い考察を加えることは困難に近い。

しかし、傾斜地にもかかわらず、住居址・掘立柱建物址のいくつかを構築した事実は、該期においても、他時期同様に未調査部分に集落が展開したと考えられ、可耕地量に見合った集落規模であったと考えられる。

そして、これらの集落は、森下沢川の左岸・右岸の集落が互いに関連し合い、沢を登り詰めた位置に所在する光明寺存続に主体的にかかわった村であるといえる。

さらに、本遺跡と光明寺の関連をより強く感ずる事項として、小規模であり、具体的な形態等の把握はできなかったが、製鉄工房址の存在である。製鉄工房址については、葉賀先生の玉稿中に詳述されており、具体的な内容はそれによるが、本遺跡内で発見されたことそのものにいくつかの意味があると考えられる。

まず、当地方において、こうした山間地における製鉄址が普遍的にあるか否かは、他遺跡の既調査により具体的に示すことができず、現状では、本遺跡のみにみられる特異なものということができる。今後、同様な施設が他遺跡で発見されることも考えられるが、その生産活動については、原料の確保・技術的な専門性など、一般的な集落内に存在することは考えられず、より強く必要とする因があつてこそ、製鉄という行為がなされるといえる。

そこで、本遺跡についてその要因の一端を探ると、原材料の近隣での確保は困難な状況にありまた、農業生産を主体とする経済状況が鉄生産まで必要な地区として把えることも不可能でありむしろ、別の角度から見てこそ、その要因の解明は可能といえる。

つまり、再三にわたって触れた光明寺との関連がいかようであるかにつきるわけである。それは、光明寺創立にかかわるか、その盛期における活動の一環として、鉄生産も行なわれたと解するのが妥当と考えられる。ただ、今回の調査では、具体的な製品等により、その内容にまで言及することは困難であり、寺との関連を指摘するにとどめるべきといえる。

また、その時代決定には、伴出した須恵器等により、9世紀代の初期に位置づけられ、寺史による光明寺創立の天平年間の隔りはあるが、あえていえば、光明寺創建時期検討にもかかわるのと、今回発見された製鉄工房址であるとも考えられる。

中世以降について、今回の調査前から莊園等に関連する施設の発見される可能性が一部で指摘され、留意しての調査を行なったが、結果としてはその一端を知る資料を得たのみであった。

今回の調査に関連して、周辺地名の調査も検討したが、期間等の関連で果せなかつた。しかし今現在も使用されているもののうちにも、朝臣（あっそ）・公文所など、中世地名、さらには莊園に関連する地名がある。また、今回の構造改善事業実施により、全面的に改修され、名残りも

とどめないが、かつてかなり整備されていた水路もあり、莊園經營から続く姿もあったと考えられる。

結局、今回の調査で具体的にその様相を明らかにすることはできなかったわけではあるが、出土遺物の中には、輸入磁器をはじめとするかなりの良品もあり、前述の莊園經營から中世における久米・朝臣のあり様の一端を裏付ける資料の一つとして、今後の検討が必要であるといえる。

以上、時代別の諸事項について列記したが、個々の事象はもちろんあるが、本遺跡においては、その立地条件こそが、すべての時代を通じて、特筆されるべき最大の特徴といえる。

二ツ山山麓の東南裾に、茂都計川の支流による大小の浸食の結果できた、おぼれ谷的な地形を成す小盆地である。久米・朝臣の地は傾斜地が多い割には、全体に強い粘土質の土壤のため温潤な地帯であり、温暖な気候も関連して、弥生時代以降の農業生産が行なわれ続けた地といえる。

また、大小の温潤地を控えた尾根上及び緩傾斜地に縄文時代以来の集落が展開したといえる。

しかし、それらの遺跡については、今回の高野遺跡以外には調査例がなく、具体的に証明する材料もなく、類推の域はでないが、地形の変化による条件の差に合わせ、集落の展開もそれぞれの時代毎、地点毎に様々な姿で営まれていたといえる。

最後に、調査実施にあたり、おしみない協力をいただいた土地所有者をはじめとする久米・朝臣の皆様方及び、構造改善事業そのものと調査実施にあたっての調整に尽力いただいた、市役所農林部をはじめ、調査に関連したすべての方々に、記して謝意を表する次第である。

(小林 正春)

引用・参考文献

- 山本村誌編纂委員会 1957「山本村誌」
- 岡田正彦ほか 1972『中央調査報告－飯田市内その2－』長野県教育委員会
- 飯田市教育委員会 1977『伊賀良中島平』
- 飯田市教育委員会 1978『伊賀良宮ノ先』
- 飯田市教育委員会 1983『酒屋前遺跡』
- 飯田市教育委員会 1983『鳥屋平』
- 飯田市教育委員会 1987『殿原遺跡』
- 長野県史刊行会 1961『考古資料編－遺跡地名表』
- 市村成人 1955『下伊那史』第2巻下伊那誌編集纂会
- 市村成人 1961『下伊那史』第4巻下伊那誌編集纂会
- 宮下 振 1967『下伊那史』第5巻下伊那誌編集纂会
- 伊賀良村史刊行会 1973『伊賀良村史』
- 飯田市教育委員会 1987『飯田垣外遺跡・火振原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1988『北方遺跡群』
- 飯田市教育委員会 1988『小垣外・八幡面遺跡』
- 飯田市教育委員会 1986『恒川遺跡群』
- 米田明訓 1980『南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年』甲斐考古17-1
- 飯田市教育委員会 1988『丸山遺跡』

TKN小堅穴1、溝状址1出土鉄滓サイズ表

出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
小堅 (4)	12.0×10.7	3.2	480	楕形	小堅	6.5×5.5	2.8	60	発色
(7)	5.0×4.5	3.5	40	"		6.9×4.5	2.4	30	"
	4.0×3.3	2.4	18			3.8×3.0	2.2	15	"
	5.0×2.1	1.4	12			3.7×2.6	2.0	10	"
(9)	5.5×3.3	1.2	12			4.3×3.4	1.0	10	"
	2.8×1.9	0.9	2			5.0×4.5	1.1	29	楕形
(11)	2.4×2.2	2.4	2	発色		6.5×5.1	2.7	72	"
	2.9×1.9	1.3	2			9.3×4.1	5.0	189	発色
	4.6×4.2	0.9	14	楕形、発色		7.1×5.3	1.6	71	
	8.0×6.9	3.4	110			7.7×5.4	2.7	53	発色
	5.9×4.9	3.0	60			6.1×4.9	1.8	48	
	7.5×5.2	1.6	47	楕形		4.3×2.8	1.6	10	
	6.7×5.5	3.3	103	"		5.9×4.9	2.3	40	楕形
	3.4×2.4	1.6	8			4.4×4.0	1.7	19	発色
	4.2×3.1	2.1	20			3.8×3.5	2.4	15	"
	4.6×3.1	1.7	19	楕形		3.7×3.1	1.6	15	
	4.3×3.2	2.2	24			4.5×3.5	2.3	20	
	4.0×3.6	1.4	12			4.9×2.4	1.4	10	発色
	3.8×2.1	1.1	10	楕形		2.2×2.0	1.0	3	
	2.9×2.1	1.7	5			3.0×2.0	1.6	5	
	2.9×2.6	1.2	8			2.9×2.4	1.0	3	
	2.7×2.3	1.2	9			3.4×1.7	1.1	8	
	3.7×2.2	1.4	10			2.6×2.2	0.8	3	
	2.8×2.6	1.1	8			2.5×2.2	1.2	5	
	2.2×1.9	1.6	5			5.1×3.0	1.5	15	
	2.4×2.2	0.6	4			2.5×2.3	1.0	4	
	2.2×2.0	0.7	2			2.2×1.8	0.8	2	
	2.5×1.3	1.1	5			3.6×3.1	2.0	12	
	7.0×4.6	3.2	39	発色		2.6×2.0	1.5	5	
	4.0×3.9	3.0	20	"		2.3×2.2	1.4	5	発色

出土遺構 出土土器	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	出土遺構 出土土器	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
小堅	2.9×1.9	1.5	8		小堅	3.4×2.5	1.6	5	
	10.5×9.8	4	330	楕形		3.1×2.0	1.6	5	
	9.0×8.0	3.5	120	"	小堅、漆黒土	7.7×5.5	3.7	142	楕形
	3.9×2.2	1.0	10			8.1×6.5	3.3	74	
	3.6×3.6	1.9	11			6.3×5.9	3.0	84	発色
	8.0×6.0	3.6	94	楕形		6.4×5.3	1.6	48	
	4.1×2.5	1.2	15	発色		5.8×5.0	1.6	49	
	7.5×5.3	2.3	49	楕形、発色		6.6×3.2	2.0	33	楕形
	7.0×5.3	2.0	50	"		6.0×5.6	2.6	43	"
	4.5×2.9	2.0	15			4.9×4.4	1.0	25	
	5.8×5.8	2.7	96	発色		4.3×2.3	2.0	20	
	5.1×4.9	1.5	40			5.3×2.5	2.1	25	
	5.7×4.7	1.1	38			5.7×4.1	1.5	50	楕形
	5.3×5.1	2.0	30			6.1×2.8	1.9	32	
	5.0×3.3	2.4	24			4.8×2.6	1.0	10	
	2.9×2.1	1.4	8			3.6×3.3	1.3	14	
	5.2×3.0	1.3	18			4.0×2.2	1.7	12	
	4.5×3.4	2.3	20			4.2×3.1	1.0	13	
	3.7×2.4	1.5	14			3.0×3.0	2.2	15	
	3.9×2.1	1.8	10			3.6×2.9	1.3	10	
	4.2×2.7	2.0	18			4.2×2.4	1.4	16	
	4.7×3.5	2.8	25	発色		3.3×2.0	0.6	8	
	3.4×2.9	1.6	19	"		4.0×2.4	1.1	10	
	4.0×3.9	3.5	19			3.5×2.4	1.9	12	
	4.4×3.5	1.6	12			2.3×2.1	1.3	6	
	6.8×4.8	1.0	22			2.9×2.1	0.8	4	
	3.3×2.0	1.3	5			2.3×1.8	1.1	4	
	3.6×2.3	2.0	10			2.3×1.8	1.1	4	
	3.7×2.2	1.9	10			2.3×2.2	0.6	4	
	3.1×2.3	1.4	9			2.2×1.8	1.9	8	
	2.8×2.2	2.2	9			2.2×1.7	0.7	4	
	3.4×1.9	1.5	10			2cm以下	227個	268	重さは合計
	3.8×3.0	1.4	11						

出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
小堅周辺	7.7×6.5	2.0	105	楕形	溝状、漆黒土	3.8×2.7	1.2	6	
	11.5×9.0	3.2	160			4.1×2.4	1.6	10	
	5.5×5.1	2.3	85			3.1×2.2	1.3	3	
	3.4×3.1	1.1	5			2.9×2.0	1.7	5	
小堅西側壁土	7.1×5.0	2.1	70	楕形		2.5×1.6	1.0	2	楕形
	2.6×2.5	1.6	5			5.2×4.1	2.1	30	
	11.5×6.5	2.2	140			5.8×2.9	2.0	34	
	2.4×2.1	1.8	7			4.6×3.2	2.5	20	
(5)	11.0×9.0	3.5	285	楕形		2.5×2.2	2.3	15	発色
	10.7×8.5	3.6	210			3.5×2.1	2.0	19	
	6.9×6.6	2.7	125			3.7×3.6	1.2	10	
	9.1×6.4	3.7	62			3.9×1.2	1.8	15	
	4.5×3.2	1.5	12			3.8×1.8	2.3	15	
	2.5×1.9	0.9	5			5.0×4.4	0.9	20	
	3.6×3.0	1.6	10			3.7×1.5	1.7	10	
	10.0×7.0	2.2	90			4.4×2.5	1.4	15	
	2.6×2.1	0.7	2			3.0×1.5	1.5	9	
	9.5×8.5	2.2	135			3.5×2.7	1.2	10	
	18.0×13.5	4.5	1210			2.6×1.9	1.5	12	
	12.0×7.5	3.6	250			2.9×2.0	1.2	8	
	7.2×6.0	1.9	72			2 cm以下	14個	30	重さは合計
	3.6×2.3	1.1	8		溝状、砂礫土	10.0×6.5	3.0	132	楕形
	5.3×2.2	1.0	10			6.7×6.1	3.0	120	
	4.8×2.9	1.8	22			7.5×6.8	3.1	110	
	3.0×2.9	1.5	9			6.6×3.5	3.2	92	
	2.9×1.6	0.7	1			5.7×4.7	3.0	50	
	7.4×5.1	2.3	62			6.7×4.7	2.4	50	
溝状、漆黒土	5.8×5.1	2.6	50	楕形		6.3×5.7	2.9	55	楕形
	5.0×3.9	1.9	30			4.8×4.4	2.0	41	
	5.8×4.6	1.9	25			6.0×4.6	1.9	60	
	3.5×2.6	1.4	9			5.5×4.4	1.9	4.9	
	7.5×3.6	3.3	85			5.4×4.3	1.0	25	
	4.2×3.7	1.0	10			6.2×5.5	1.2	40	

出土遺構 出土土器	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	出土遺構 出土土器	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
溝状、砂礫土	4.5×4.0	2.5	50			7.9×5.0	3.3	82	
	5.1×3.7	3.4	35	楕形	溝状、上層 (漆黒土)	5.0×4.3	2.8	44	楕形
	7.6×3.0	2.2	60	"		4.1×3.5	2.0	30	
	4.4×3.9	0.8	29			4.7×3.1	2.3	24	楕形
	4.0×3.3	1.9	20			5.4×3.6	1.1	20	
	4.7×2.7	1.3	10			4.7×3.6	1.2	30	楕形
	3.3×2.7	2.2	13			4.9×3.8	1.9	34	
	4.0×3.3	1.1	14			3.8×3.2	2.5	23	
	4.0×3.0	1.3	16			4.7×4.0	2.2	30	
	3.3×3.3	1.7	5			5.3×3.5	2.0	28	
	3.3×2.3	1.1	8			4.8×3.3	2.7	24	
	3.3×2.7	1.9	14			3.7×3.7	2.7	18	
	2.8×2.2	1.4	7			7.2×3.7	2.7	40	
	2.9×2.3	1.2	8			4.5×4.4	1.6	38	
	2.5×2.1	1.3	6			4.2×3.0	1.5	15	
	2cm以下	35個	69	重さは合計		3.5×2.8	2.4	30	
溝状、上層 (漆黒土)	12.0×11.0	6.2	420	楕形		5.4×3.5	2.1	28	
	12.0×8.0	2.7	200	"		4.5×2.7	1.7	18	
	9.8×7.5	1.8	170	"		3.7×2.5	1.6	20	
	9.1×8.5	1.8	182	"		3.8×3.4	1.7	20	発色
	10.0×7.2	2.9	290	"		3.7×2.9	1.8	19	
	3.1×2.6	1.5	8			3.2×2.0	1.3	4	
	9.0×6.3	2.4	98	楕形		4.1×2.5	1.5	14	
	8.5×6.3	3.4	130	"		3.4×2.5	1.7	18	
	6.6×5.3	2.9	120			3.5×3.0	2.1	18	
	7.7×4.8	2.8	74			4.5×3.1	1.6	12	
	7.5×6.9	7.1	120	楕形		3.3×2.7	0.9	5	
	6.1×4.5	4.7	145	"		3.2×1.8	1.6	7	
	9.3×6.5	3.1	130			4.0×2.7	1.7	14	
	9.4×6.0	2.2	148			2.9×2.8	1.8	18	
	6.4×4.6	2.3	68	楕形		3.2×2.8	1.5	12	
	4.7×3.7	1.6	44			3.9×2.2	1.5	7	
	4.7×3.6	2.4	60			2.9×2.2	1.5	10	

出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考	出土遺構 出土土層	長さ×幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
溝状、上層 (漆黒土)	2.5×1.8	1.2	5		(小堅、溝状 の最上部)	黒色土	7.8×5.0	3.0	50
	3.8×2.2	1.2	7			5.5×5.2	1.8	30	楕形
	5.7×4.3	3.2	110			6.0×5.5	1.9	45	
	5.2×3.6	1.7	27			4.2×3.3	2.8	29	
	4.7×3.7	1.6	28			3.9×3.9	2.6	30	
	2.4×2.3	1.0	4			4.8×3.7	1.3	25	
	2.5×2.3	0.9	4			5.1×4.9	1.7	29	
	2.2×1.9	1.0	5	発色		5.8×4.6	2.1	20	
	2cm以下	23個	47	重さは合計		3.6×2.3	2.2	10	
溝状、下層 (礎土)	6.1×5.8	2.6	58	接合	(小堅、溝状 の最上部)	2.9×2.6	1.7	10	
	5.9×4.1	2.0	30	楕形、発色		2.9×2.2	2.1	11	
	3.1×1.7	1.2	3			4.2×2.5	1.7	15	
	黒色土	11.2×8.7	2.6	330		2.7×2.0	1.5	9	
	(小堅、溝状 の最上部)	9.0×7.3	3.3	210		2.9×2.4	2.0	5	
	10.5×7.4	3.4	200			2cm以下	32個	67	重さは合計
	6.6×4.9	1.8	38	楕形					

* 小堅は小堅穴 1、溝状は溝状址 1

出土遺構、出土土層()番号は遺物取り上げNo

楕形は楕形鉄津

発色はガラス化しブルーに発色する部分があるもの

付 編

高野遺跡出土鉄滓・羽口の金属学的分析調査報告

葉賀七三男

(島根大学客員研究員)

1.はじめに

飯田市久米所在の高野遺跡から鉄滓および羽口が発掘されたとの連絡により、昭和63年10月29日現地調査を大沢和夫先生と同道実施した。出土の鉄滓は一見椀形で、製鉄史研究者間では椀形滓と分類されている形状のものと、軽い上にガサガサ指先に引っかかる感触で、しかもガラス化した部分がきわめて鮮やかな淡青色を呈した、従来調査例を見たことのない特異な鉄滓と判断された。その詳細を明らかにするため、特に金属学的分析調査の必要性が認められた。飯田市教育委員会の高配によって、所要試料の提供があったので、東北大学運鉱製錬研究所岡田広吉助教授の御尽力で、同研究所で金属学的ならびに鉱物学的分析調査を実施した。以下椀形滓、ガラス化滓、羽口および遺跡の土質の順に、分析調査結果の大要を報告する。

2. 調査試料

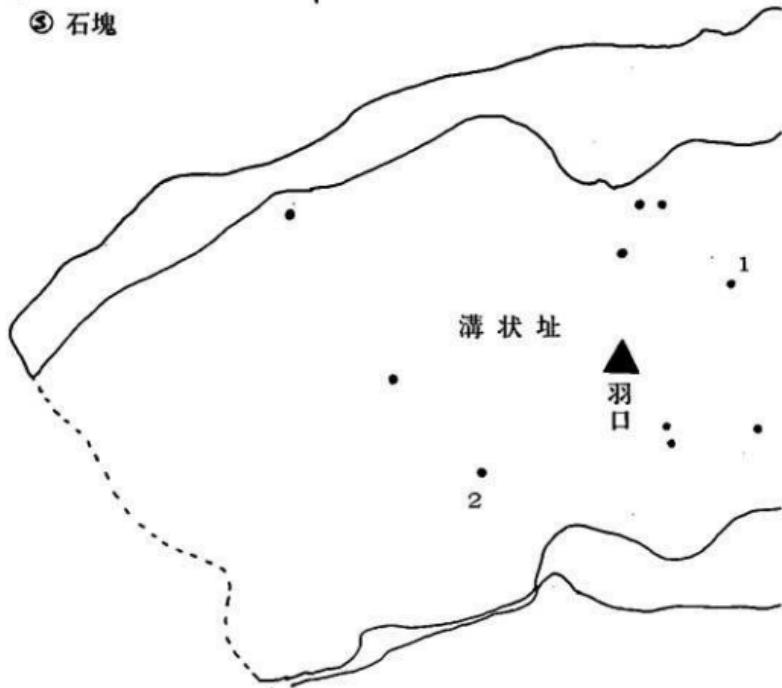
調査に使用した試料の出土状況は第1図に示す。鉄滓では個体の明確なもの62点、うち15個が竪穴内から出土、他はやや広い溝状址から発掘され、黒漆土の間に所在した。羽口のうち口径の知れるものは竪穴内に9個とまとめて出土し、他の溝状址からは1個のみの発掘であった。一般に金属の製錬もしくは鍛冶加工の場合には、粘土で構築された火床（ほど）あるいはその炉壁片が必ず散布するが、第1図の竪穴の石組を火床とするならば、周辺一帯に粘土塊が全く見当たらないのが、不思議に感じられた。遺構全面が花崗岩の風化による砂質土で、しかも所々に黒漆色を呈した部分が目立つのに強く印象づけられた。

分析調査試料1、2は溝状址から出土した椀形滓、試料3、4は竪穴内より出土したガラス化滓、羽口は溝状址から出土した羽口で、3個に割れていたのと、先端に付着する鉄滓が少ないので、X線分析調査の試料にはならなかった。

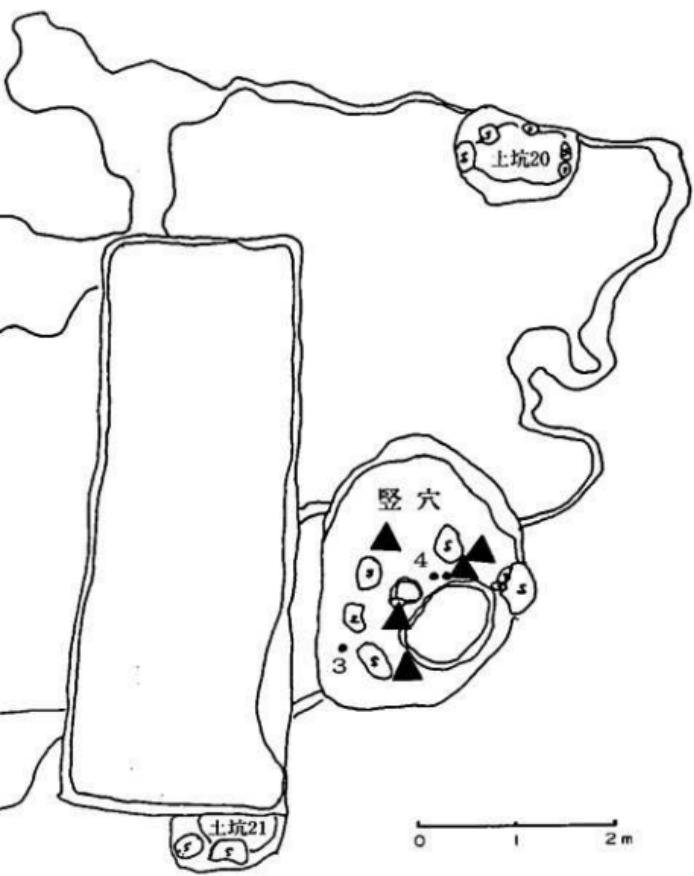
● 鉄滓出土地点

▲ 羽口出土地点

◎ 石塊



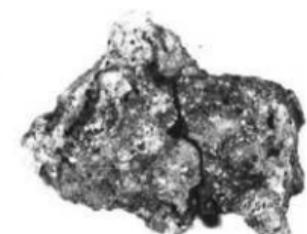
第1図 調査資料出土状況



3. 梶形津調査結果

3・1 実態写真

試料1、2の実態写真、表、裏、横（側面）を写真1、2に示す。試料は大塊で送付中大小に割れたが、一個体として取扱うこととした。なお、倍率はそれぞれにスケールで示すこととした。（以下同様）



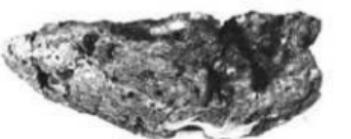
3・2 試料の物理性

試料1、2の重量、気孔率（孔のあき具合）、吸水率、比重を第1表に示す。試料1は大塊でかなり孔が多いため、吸水率も大きい。比重はいずれも鉄そのものの半分程度で、石よりやや大きい。



3・3 試料のX線分析

試料1、2のX線分析については、第2図にX線回析、第3図に蛍光X線分析結果を示す。これにより試料の鉱物組成と元素組成を第2表にまとめて掲げる。ただし、蛍光X線分析では金属のみが検出されるので、非金属のカリウム、カルシウム等は他のEPMA分析法などによらなければならない。



0 ————— 5 cm.

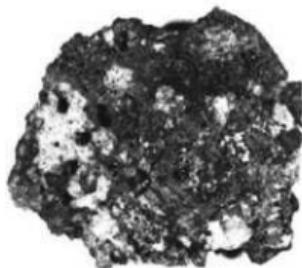
写真1 試料1（上：表、中：裏、下：横）

第2表の蛍光X線分析結果で特に注目すべきは、試料1、2ともに微量のマンガン、ごく微量のチタンを含有するのみで、これらに使用された鉄は鉱石産出で、砂鉄原料ではない事実である。

3・4 試料の切断面

試料1、2を半分に切断し、その面を写真3、4に示す。驚くべきことには、X線回折では調査できなかった金属鉄がかなり散在しており、特に写真3では矢印で示すごとく直径7ミリ近い鉄の大きい粒が確認された。試料2でも写真4の矢印で示すごとく粒は小さいが、かなり多数の金属鉄が含まれている。

なお、写真3、4の切断面の鉄粒以外の大きく白い部分は、花崗岩の風化した石英である。灰色のやや硬い感じのする部分は鉄滓の割合に均質で、孔、気泡の少ない部分である。



0 2 cm.

写真2 試料2（上：表、中：裏、下：横）

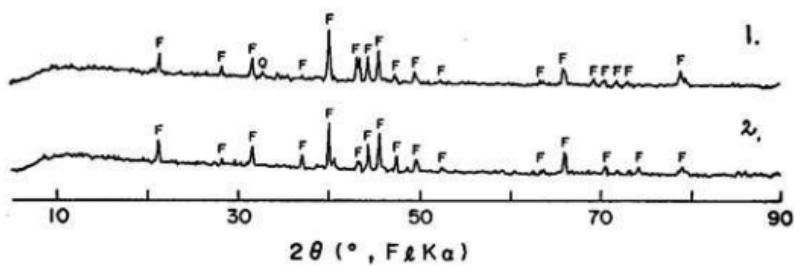
第1表 試料の物理性

試 料	1	2	3	4	羽 口
重 量 g	449.2	170.4	65.8	32.2	80.2
見掛け気孔率 %	30.24	26.76	20.22	23.56	27.48
吸 水 率 %	15.04	11.80	11.25	13.55	15.21
見掛け比重	3.13	3.10	2.25	2.23	2.09
カ サ 比 重	2.06	2.27	1.80	1.74	1.81
出 土 位 置	漆黒土	漆黒土	豎 穴	豎 穴	漆黒土

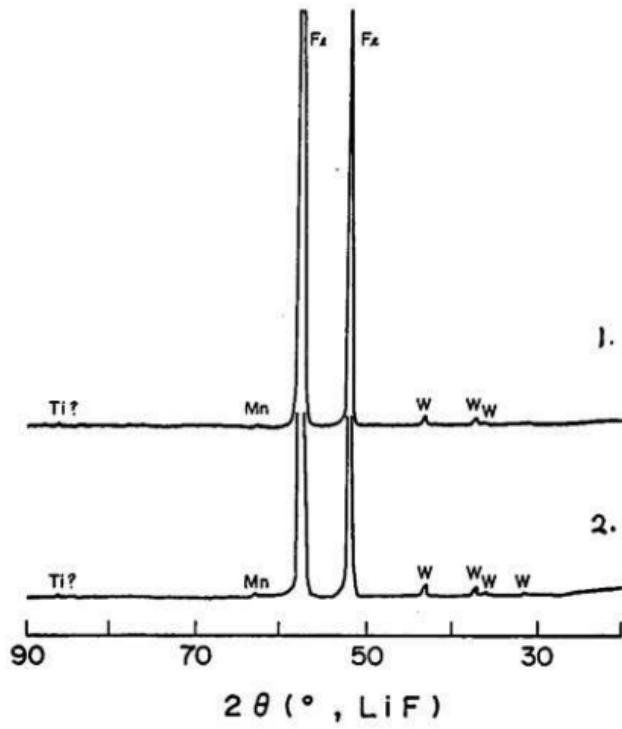
第2表 試料のX線分析結果

試 料	1	2	3	4	羽 口
X 線 物 回 析 成	ファイナライト マグネタイト 石英 黒雲母 カオリין クリストバル石	◎ ? • ○ ? ○	◎ ? ○ ○ ? ○	?	◎ ○ • ○
光 X 線 分 析	元 素 錄 成	鉄 マンガン チタン	◎ • ?	◎ • ?	• • •

注 ◎ 多量、○ 普通、。 少量、・ 微量、? (ごく微量)



第2図 試料1・2 X線回析結果



第3図 試料1・2 蛍光X線分析結果

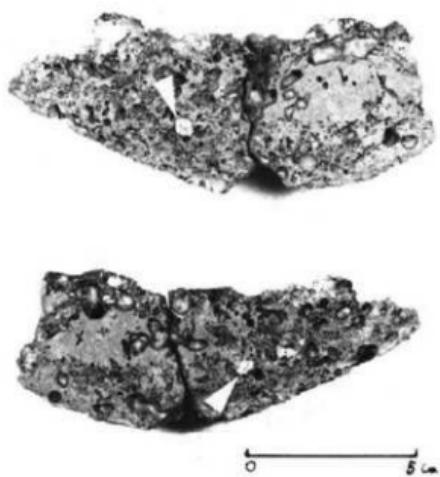


写真3 試料1切断面

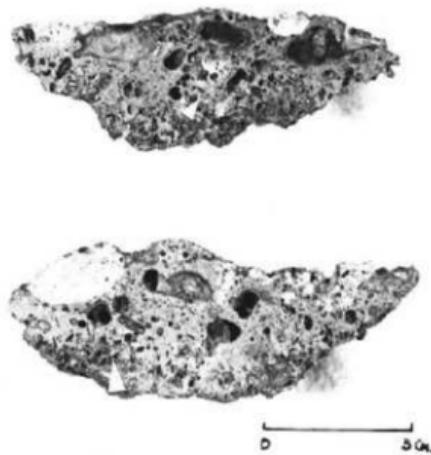


写真4 試料2切断面

3・5 反射顕微鏡調査

試料1、2の反射顕微鏡による調査結果を写真5、6に示す。それぞれ倍率の異なる点をスケールによって確認されたい。写真5の上では、孔Pが相当部分を占めるが、特に点々と金属鉄mの存在のほか、きわめて珍しい脈石aのかなりの分布が注目される。鉄滓に必ず存在するファイヤライトf (Fe_2SiO_4) の間に細長く灰黒色のガラス部分が入りこんでいる。黒灰色の脈石は石英と推測されるが、金属鉄の多い点をも考慮する必要がある。従来から掩形滓は大鋳治工程、つまり銑鉄もしくは鉛(けら)のごとき荒鉄から鍊鉄(包丁鉄)を精練する際に生成排出されるというが、前掲第2表蛍光X線分析結果とも併せ検討すると、大鋳治滓にあらず、鉄鉱石からの製鉄の場合生成された製練滓と認めるのが妥当であろう。

試料2の反射顕微鏡像を写真6に示す。試料1と同様多孔質の部分に金属鉄mが存在し、ファイヤライトとガラスが交互に帯状に並んでいる。反射顕微鏡による調査の場合、その検鏡位置によって、鉄滓の構成が大きく変化している。ガラス化した部分、ファイヤライトの多い部分等、典型となる構成像を掲げておいた。いずれも、ガラス化の部分あるいはファイヤライト中に、微細な鉱物質の存在が認められる。今後これらの詳細な検討が必要であろう。

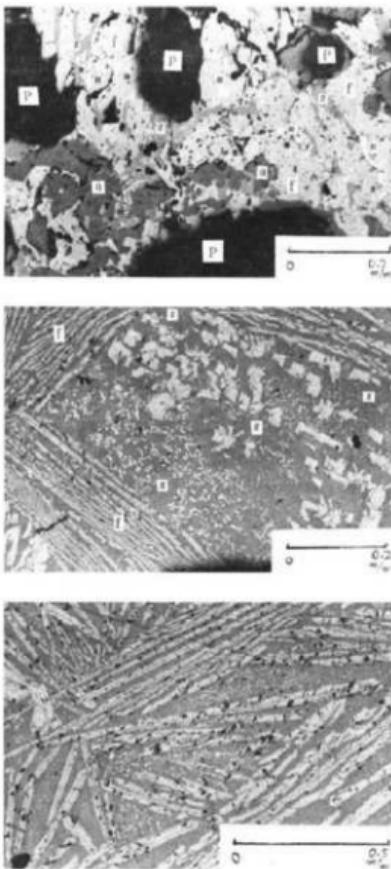


写真5 試料1反射顕微鏡像

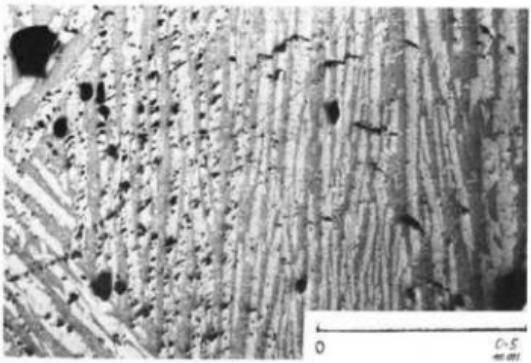
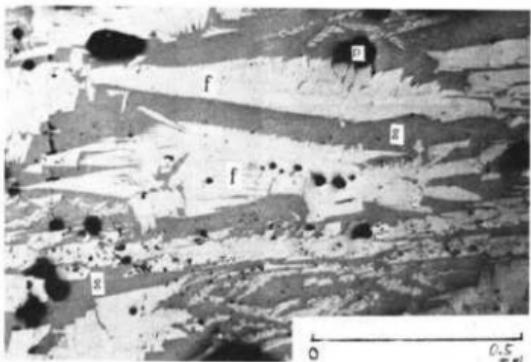
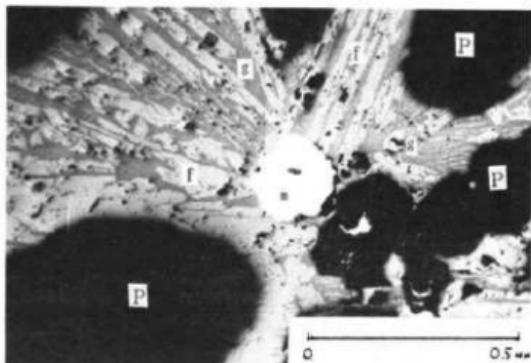


写真 6 試料 2 反射顕微鏡像

3・6 透過顕微鏡調査

鉄滓は見方を変えるならば人工の鉱物である。天然の鉱石を溶鍊して金属を生産することもある。したがって、その生産工程で生成されるスラグ（金属滓、鉄滓等）は人工の鉱物としての調査がなさるべきである。しかし、残念にも、現在の鉱物研究者は天然鉱物の研究中心で、鉄滓のごとき異種の人工鉱物を対象に研究する者は皆無といえる。前記のごとく鉄滓のガラス化した部分あるいはファイアライト中にも、きわめて微細な鉱物質が存在している。そこで、反射顕微鏡による調査のほか、特に試料1についてのみ透過顕微鏡による調査を実施した。その結果を写真7、8に示す。

透過顕微鏡による調査に2方式があり、普通の光で検鏡するオーブン（光の波動を遮る役目のスリットを平行におく）方式と、横波か横波か一方のみの光で検鏡するクロス（スリットを直交させる）方式とがあり、試料の同じ位置を両方式で検鏡すると、写真7、8に掲げるごとく両者上、中、下いずれも同一部位の写真であるが、含まれている鉱物によって、光の透過度に差が生じ、例えば両写真の中のうち右端のオーブンでは白に点の結晶質の部分は、クロスでは灰黒色となり、写真下の右端はオーブンでは透過して他の部分と変りはないが、クロスでは真黒に全く透過していないことが把握できよう。その他、写真7、8をそれぞれ比較してみると微妙な差を認められるが、実際の透過顕微鏡視野では、美しい天然色である。したがって、鉱物の種類によって、色調ならびに透過度の変化は既知があるので、この2方式を重ねることによって、

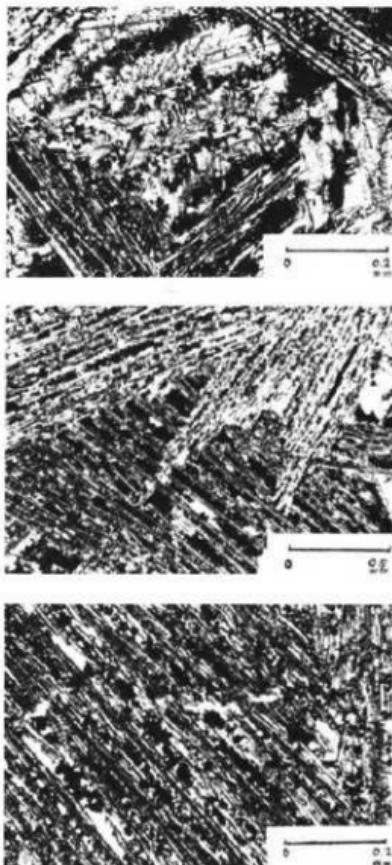


写真7 試料1透過顕微鏡（オーブン）像

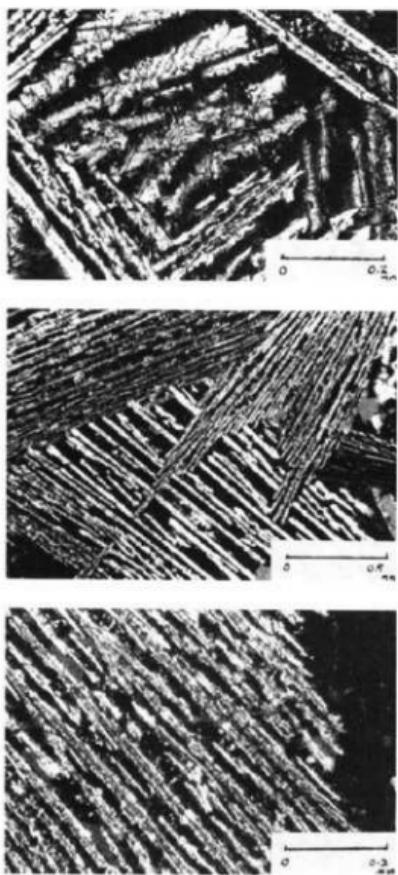


写真8 試料1透過顕微鏡（クロス）像

きわめて微細な鉱物についても同定が可能となる。

写真7、8には細長いファイヤライトの中に、かなり鉱物質の小片が含まれているが、東北大学岡田広吉先生の同定では、一部ウスタイト (FeO) と疑われるが、ほとんどがマグネタイト (磁鉄鉱 Fe_3O_4) であるとしている。しかも、ファイヤライト中の微粒をよく検討してみると、いずれも角ばり、溶融した形状でなく、鉱物片となっているので、前記したとおり本遺構出土の鉄滓が鉄鉱石、この場合磁鉄鉱を中心とする原料として製鉄が行われたものと判断される。いずれにしても、透過顕微鏡像をカラーで報告できないのが残念である。将来は鉄滓の調査も透過顕微鏡による分析調査が普及することを強く期待している。

ガラス化滓調査結果

4・1 実態写真

ガラス化滓試料3、4の実態は写真9、10に掲げるが、矢印に示す白い部分は、ガラス中に美しい淡青色を呈する個所である。カラーには報告ができないのが残念であるが、異質の鉄滓である。

4・2 試料の物理性

前掲第1表のとおり、小塊で出土は竪穴内であり、比重はもっとも小さく一般の岩石並みであって、鉄滓としては最もかるいのである。手ざわりはきわめて特異で鉄滓のみならず一般に金礦滓は表面が平滑であるが、試料3、4はいずれも角ばり、しかもその角が鋭いためか手にひっかかる感触である。ガラス化した上に淡青色が鮮やかで、こうした特徴の鉄滓は、初めて調査する未経験の遺物である。

4・3 試料のX線分析

試料3、4ともに蛍光X線分析では非金属の調査ができないので、X線回折による鉱物組成の分析調査およびEPMA（X線マイクロアナライザ）による調査を実施した。

試料3のX線回折結果は第4図のとおり、石英Qのほかに黒雲母B（BIOTITE）およびカオリン鉱物Kの存在が明らかにされた。特に前掲第2図の試料1、2のX線回折と比較して黒雲母Bのきわめて多量であるのは特異で、これはEPMAによる分析結果第3表にもはっきり認められる傾向である。

第3表には試料3、4の中、特に青くガラ

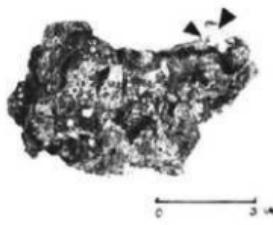


写真9 試料3（上：表、下：裏）

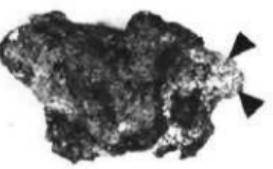
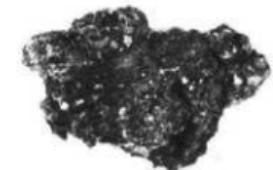


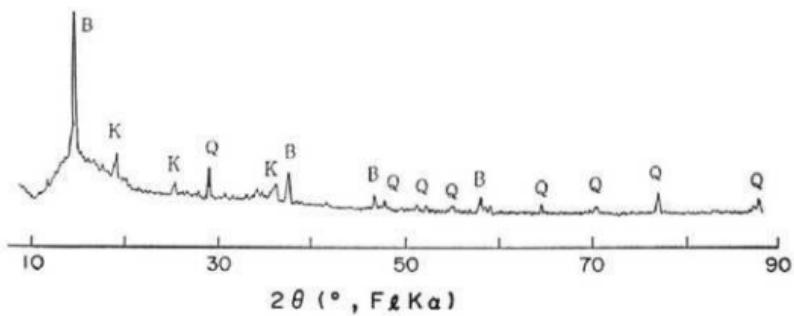
写真10 試料4（上：表、下：裏）

ス化した部分を選んだ試料と単なるガラス化部分とを比較するためEPMA分析を実施したが、併せて後述反射顕微鏡調査によってガラス化部分の中に真四角な斑点が散在するので、その組成を調査することとした。その結果、非金属のケイ素、アルミニウム、カルシウム、チタン、マグネシウム、ナトリウム等の酸化物の存在比は、一般的鉄滓との相異はさほど目立たなかつたが、特にカリウムにつ

いては、きわめて多量に含まれるのが、明らかにされた。カリ分の多いとされる窯業用粘土でも2%前後の含有で、平均ではコンマ以下のものが、5%以上も検出されるのは、第4図に示すごとく相当多量の雲母分がガラス化に使われたと判断される。カリ分の多い鉱物としては雲母類が唯一の供給源と考えられる。淡青色を呈するガラスは、黒雲母が寄与した結果と判断される。

第3表 EPMA分析結果

試 料		青ガラス	ガラス	ガラス中白色四角形
鉄	Fe ₂ O ₃	24.77		
	FeO		13.96	
	Fe ₂ O ₄		(15.00)	64.24
シリカ	SiO ₂	45.50	50.40	4.42
アルミナ	Al ₂ O ₃	11.96	15.68	14.91
カルシウム	CaO	4.42	3.75	0.15
カリウム	K ₂ O	5.68	5.45	0.64
チタン	TiO ₂	0.55	0.53	2.26
マグネシウム	MgO	1.33	0.92	0.70
ナトリウム	Na ₂ O	0.36	0.89	—
計		94.57	FeO 91.58	87.33
			Fe ₂ O ₄ 92.62	
	(注) 酸素O ₂	40.37	41.17	28.47



第4図 試料3 X線回析結果

4・4 試料の切断面

試料3の切断面を写真11に示すが、ガラス化した部分と石英質がそのままの状態で取り囲まれている。多孔質であるのはいうまでもなく、試料4も同様であるので、写真は省略する。

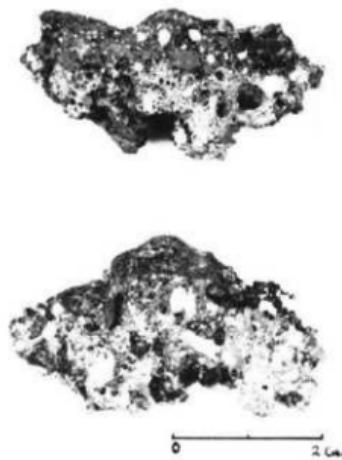


写真11 試料3 切断面
—77—

4・5 反射顕微鏡調査

試料3の反射顕微鏡による調査結果を写真12に示す。いずれの位置の検鏡でも、ほとんどがガラス質で結晶していないが、その中に白い角ばった点と黒い点とが、散在している。今回は第3表に掲げるごとく、この四角い白い点の鉱物について特にEPMAによる調査の結果、それらは磁鉄鉱（マグнетাইト）であることが確認された。この事実は前記試料1の透過顕微鏡による調査結果によって楕円萍のファイヤライト中にも磁鉄鉱の微細片が含まれる点と関連し、この造構から出土する鐵萍を製鍊萍として検討する上で、重要な手懸りを与えるものである。

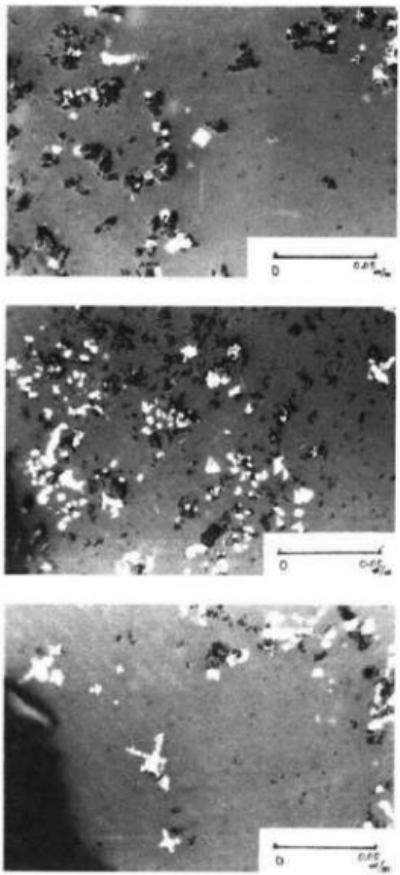


写真12 試料3反射顕微鏡像

5. 羽口調査結果

5・1 実態写真

高野遺跡溝状出土の羽口（はぐち）の実態を写真13に示す。金属の製鍊あるいは鍛冶等の加工工程において、火床において加熱する際、送風が不可欠である。その送風管の先端に粘土製羽口を装着して使用するのが普通である。送風管には竹幹を使用する場合がほとんどで、火床の火熱で送風管の損耗を防止する目的で粘土製羽口を使用する。したがって、金属関連の遺跡においては必ず羽口あるいはその破片が出土することになる。

今回調査した羽口は、先端内径20ミリ、外径50ミリ、したがって厚さ約15ミリの粘土管の形状を示すが、長さについては破片のため推測値も求められない。古代からの羽口の実績値を参考に掲げれば、一般に鉄、銅等の金属の種類を問わず先端内径は30ミリで一定であるが、外径については50～150ミリと大小さまざまである。この事実は、送風器つまり吹子は人力で操作するから、その押圧力に対応した内径寸法として30ミリが経験的に割り出された数値である。

吹子については、平安末期までは皮吹子であり、木製箱吹子は鎌倉時代以降の開発登場であるが、一方古代から現代にいたるまで人力で操作する吹子に使用された羽口先端の内径は30ミリと一定である。ただ、例外として、近世初頭以降発展した金銀製鍊加工の場合は、溶解量がきわめて少量である点から、銅、鉄では火床径が60センチ前後の規模のものが、金銀では30センチと小規模であったため、使用羽口の先端内径は、写真14、第5図のとお

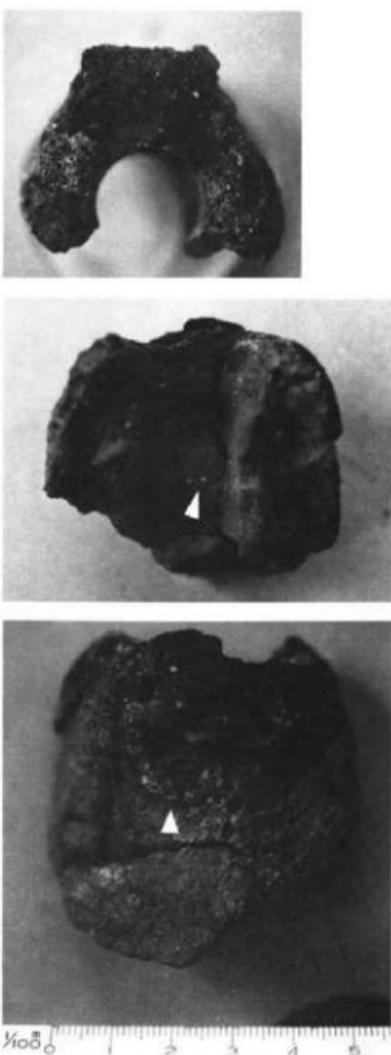
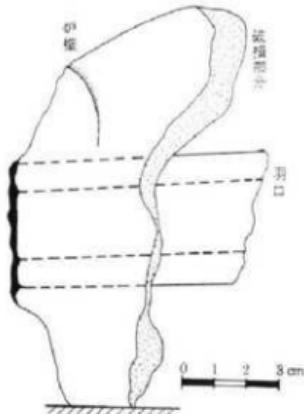


写真13 羽口（上：先端、中：内面、下：外面）



写真14 鶴子銀山羽口



第5図 鶴子銀山羽口

り鶴子銀山（16世紀末、稼行）のごとく20ミリと細目のものが使用された例がある。それ以外には20ミリ程度の細い羽口の使用は少ない。したがって本遺跡出土羽口は特異な部類に属する。

使用羽口の先端には鉛津がこびり付くが、写真13下に示すごとく、矢印の位置が青い色を呈しており、一見緑青つまり羽口が使用されたのは銅に関連する溶融かと判断されたので、特にこの部分のX線分析調査を実施したが、その結果は第3図の試料1、2と同じく鉄のほかに微量のマンガン、ごく微量のチタンが検出され、鉄系統の滓であると確認された。

次に羽口形態の中、特に検討すべきは羽口内面の形状である。内径が先端から根元まで同一径であるか、先端から根元にかけて次第に太目になっているが、それに統く根元において送風管との接合のためラッパ状に広げられているか否かも調査する必要がある。しかしながら、根元については復元が不可能であるので検討はできないが、先端から根元までの径は、写真13中の内面でうかがえるごとく平行であるので、同一径と判断される。これは羽口の整作に際して、径20ミリの棒に粘土を巻き付け成形したものと推測される。

5・2 羽口の特異性

羽口先端内径が20ミリと細目である事実は、重要な問題を提供する。細目であるのは、普通の人力で送風を行っても、30ミリの場合と比較してかなりの強風を吹き付けたと考えられる。一方、前述金銀山使用羽口の場合と同じく、火床が小規模であったことを証している。したがって、遺構から出土した遺物の中、鉄滓は少量でもあるにかかわらず羽口数が比較して多い事実と関連して、鉄鉱石を使用して製鉄を実施したのは、ごく少量の生産量でしかも長期間に亘って製鉄が行われたのではなく、臨時に製鉄作業が展開した遺構ではないかと想定される。金属学的に調査を実施する場合、羽口の特異性は注目して検討すべき事項のひとつである。

写真13中に掲げる羽口内面には、詳細に点検すると、矢印で示すごとくきわめて微細な雲母が付着している。これは羽口の出土した地点の黒漆土の中にかなりの雲母分を含んでおり、これに埋没していたことと深く関連付けられる。

6. 遺構の土質調査

6・1 壊穴内の土質

ガラス化試料3の分析結果（第4図、第3表）によれば、多量の雲母分を含む特徴が認められたが、最近の上郷町矢崎遺跡の鍛冶工房遺構出土の鉄滓についても、付着する雲母片に関連して、遺構一帯の土質が全国的に見て特異性があり、それをも勘案し、高野遺跡でも、火床跡と一応は見なされる壊穴内の土質を詳細に検討することとした。

発掘作業を担当された飯田市教育委員会の関係各位に依頼して、壊穴内の土を約500グラム試料として送付していただき、所要の調査を実施した。写真15に掲げるが、発掘報告では黒漆土と分類されるごとく、きわめて濃黒の艶やかな色を呈し、灰黑色とはかなり正確に区別される。乾燥水を除いたため粘土質がコロコロしたが、含まれる礫と大まかに分別した試料を写真15の上に示す。特に選別した、白い石英分に豊んだ礫と、黒漆色の素材である崩れやすい礫様の塊とを、写真15中に示し、下はその後者をすこし潰してその組成を観察したものである。微細な雲母質の岩石の風化したものと、有機質の粘土分とが混合していると判断される。また、壊穴内で金属製錬に関連する作業が実施されているとすれば、それを証する木炭片、鉄滓小片、金属粒等が含まれているはずが、残念ながら送付を受けた試料からは、それらを検出することができなかった。

6・2 低位段丘南条面の黒漆土

前述矢崎遺跡は、『下伊那の地質解説』によれば、松川左岸の低位段丘別府面（a₂）に位置するが、その雲母分の多い土質と高野遺跡竪穴内の土質を比較検討する際、たまたま筆者の軸中平所在の生家で別府面よりなお低い南条面（a₁）を約2メートル掘上げていて、運良く往時の堆積状況を把握することができた。地表から10センチ前後が表土であり、その下に約40センチの灰色細砂層があり、続いてその下に黒漆色粘土層が約50センチ、その下底がかなり大きい、それこそひと抱えもある大きな石が混ざった砂礫層がかなり深く、松川の氾濫による堆積と考えられる。その上部の隙には、共に流された植生の繊維分がかなりまとわり付いている。参考試料として少量採取した黒漆土を写真16に示すが、ひと握りの少量でもその表面には、金雲母の小片がかなり輝いている。これらの事実から龍西方面一帯の雲母の存在を改めて調査する必要が生じた。

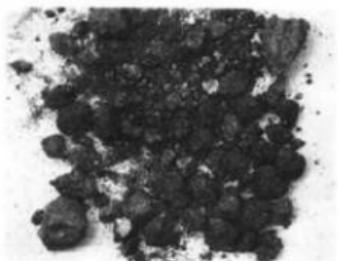


写真15 小型穴1内土質



写真16 軸中平採取黒漆土

6・3 三穂丘陵の雲母類

松川沿岸地域と比較するため、高野遺跡付近の地質鉱物学分野の報文を調査した結果、飯田高校（現県立田川高校）小木曾勝弥氏の報告「長野県飯田市三穂地域の塩基性岩類（1）」に久米を含む三穂丘陵一帯に賦存する雲母類の化学組成に関する分析結果が、詳細に記載されているのが判明、三穂丘陵地区から採取された雲母類は、第4表のごとく、黒雲母には9%、金雲母には7%、白雲母には

10%前後と、いずれも酸化カリウムで含まれていると報告されている。したがって、高野遺跡周辺もこの地域の一部分であるので、これらのデータと同様、雲母には7~10%前後の酸化カリウムが含まれ、これを粘土の代りに火床に溶剤として装入すれば、前述のごとく、淡青色のガラスとして溶出し、特にカリ分の多い部分では第3表の5%台の酸化カリウムと検出されるものであろう。

第4表三穂丘陵地区雲母化学分析結果（小木曾論文より）

化学組成	黒雲母			金雲母			白雲母
SiO ₂	38.0	37.5	37.2	37.5	36.4	35.4	46.9
TiO ₂	2.01	1.7	1.42	0.22	0.13	0.61	Tr.
Al ₂ O ₃	13.1	15.0	15.1	17.0	16.6	18.8	36.0
FeO	18.6	17.3	18.9	6.71	9.4	11.2	0.33
MnO	0.46	0.24	0.23	0.2	0.03	0.1	0.02
MgO	13.1	12.6	12.7	21.9	22.0	18.5	0.57
CaO	0.13	0.08	0.06	Tr.	0.06	0.15	0.08
Na ₂ O	0.12	0.12	0.08	0.68	0.36	0.24	Tr.
K ₂ O	9.07	9.15	8.91	6.8	7.41	6.68	10.5
計	94.6	93.7	94.6	91.0	92.4	91.7	94.4

7. むすび

高野遺跡F4地区は、次に掲げる諸点から、わが国の金属関係遺跡のうち、小規模ながら金属技術史上きわめて特異な遺構であると判断される。

- 1) 鉄滓の出土が少量ではあるが、きわめて短期間鉄鉱石を原料として鉄が製鍊された遺構である。
- 2) 火床の構築に粘土が使われた形跡がきわめて少く、淡青色にガラス化した鉄滓の出土は、粘土の代りに雲母分に富んだ砂の使用が考えられる。わが国ではきわめて少數例の製鉄方式と見込まれる。
- 3) 出土羽口の先端内径が20ミリと細く、かなり強い送風によって製鉄が実施されたと考えられるが、この点もきわめて異例に属する。

したがって、高野遺跡において原料として使われた鉄鉱石を、如何にして入手したか、近傍で産出したか、他地区からの搬入かが検討されねばならない。また、小規模ながら、高野遺跡において製鉄が行われた目的は何かをも検討する必要がある。

鉄鉱石の産地については、郡下一円に適切な候補地を見出しえないので、他地区からの搬入を考慮に入れねばならない。この点では東山道の存在をぬきにしては考えられない。美濃赤坂方面がわが国でも古代における鉄鉱石産地であるので、一応の候補にあげられるが、なお詳細には鉱滓中の鉄粒の微量成分調査等によって、産地を確定する必要が残される。

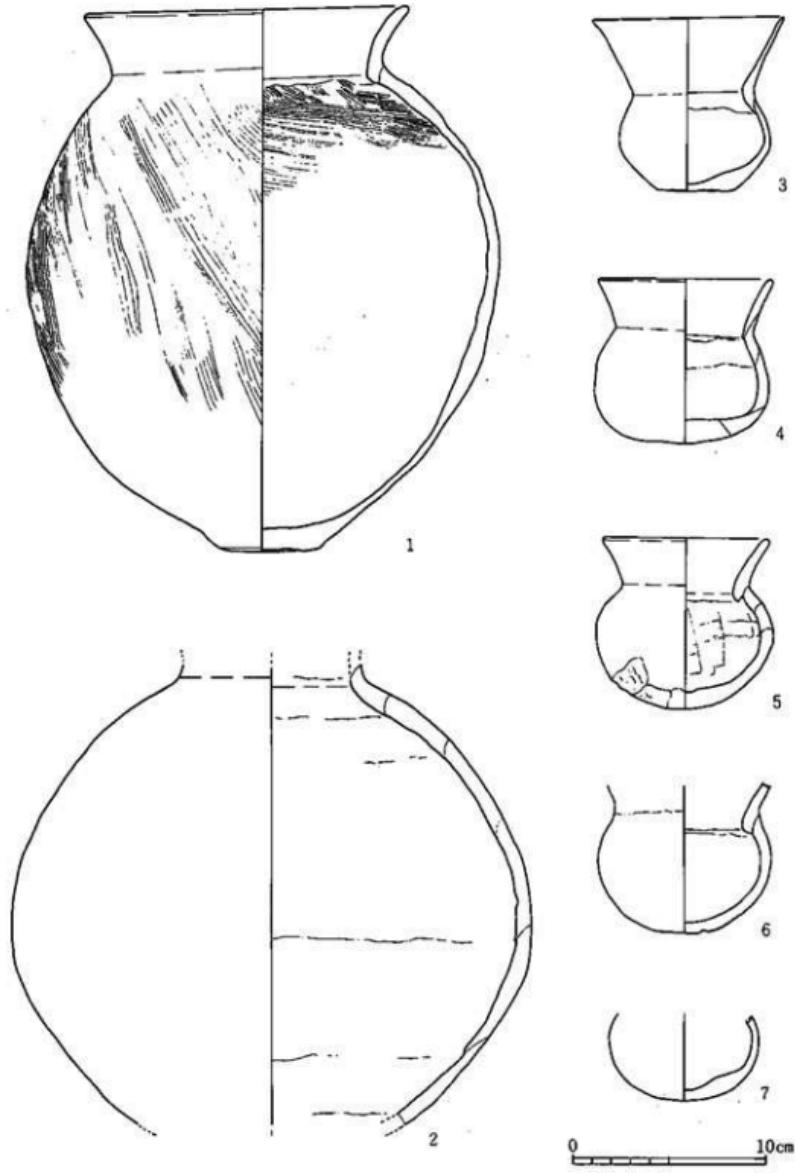
次に製鉄の目的では、近傍の養老年間開基の寺伝をもつ円行山光明寺の存在が検討の手懸りを与える。寺建立作業の一環として、臨時に小規模な製鉄の実施は、当然にあり得ることである。したがって、なお高野遺跡周辺一帯の精査によって、光明寺関連遺跡の発見調査に関連して、今後の検討を加える必要があろう。

本報告をまとめるに際して、試料の分析調査を担当された東北大学選鉱製鍊研究所岡田広吉助教授、同所分析スタッフの各位、現地調査に御尽力賜った大沢和夫、岡田正彦両先生、試料の採取、送付等について御高配を賜わった飯田市教育委員会福島稔教育長、中井洋一係長、発掘を担当された小林正春、馬場保之、佐合英治氏をはじめ教育委員会職員の各位に深甚なる謝意を捧げる次第である。

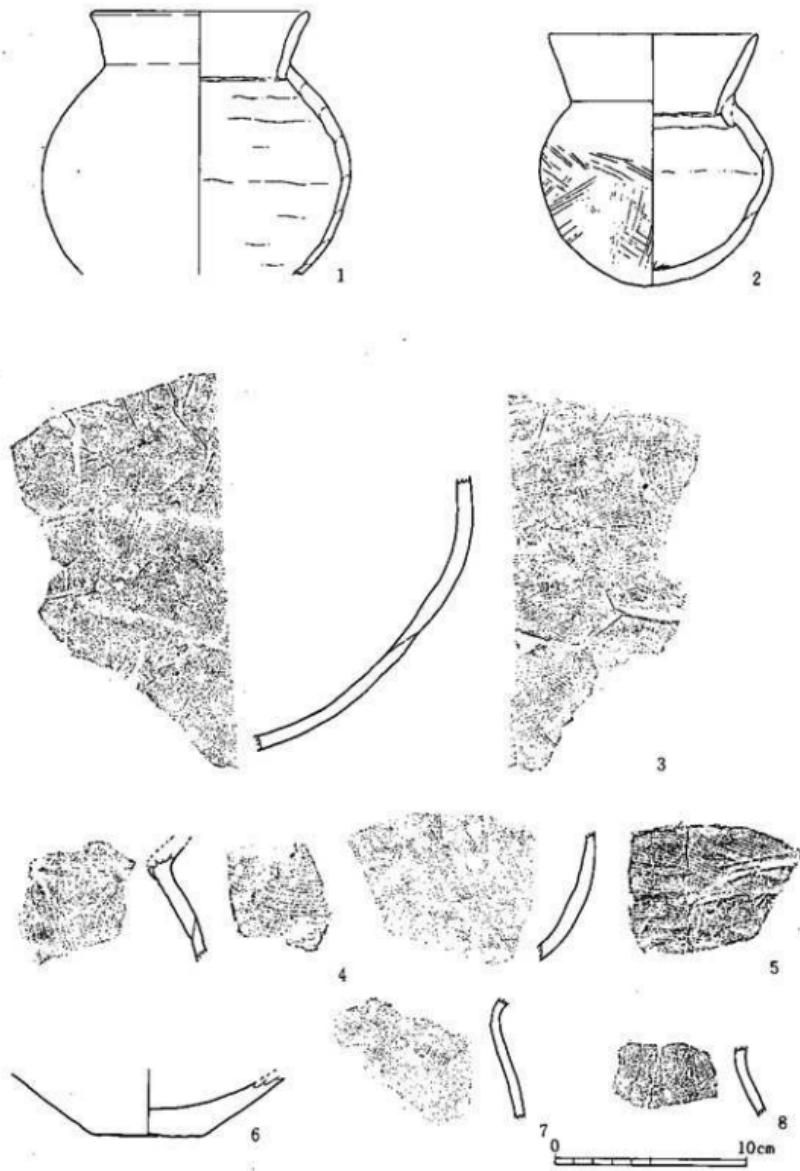
参考文献

1. 下伊那郡地質誌編集委員会編、下伊那の地質解説（下伊那地質図説明書）、昭和51. 6.
2. 小木曾勝弥、長野県飯田市三郷地域の塩基性岩類(1)、岩石鉱物鉱床学会誌、第79巻第5号、昭59. 5.
3. 名古屋光影館編、信濃宝鑑（日本名額図誌第7編）、7巻、明治34. 8.
4. 葉賀七三男、鶴子銀山の羽口、続尾鉱録81～82、日本鉱業会誌第1125～1126号、昭和56. 11.～12.
5. 葉賀七三男、考古学と金属生産、コインブックス20、クオリ、昭和61. 10.

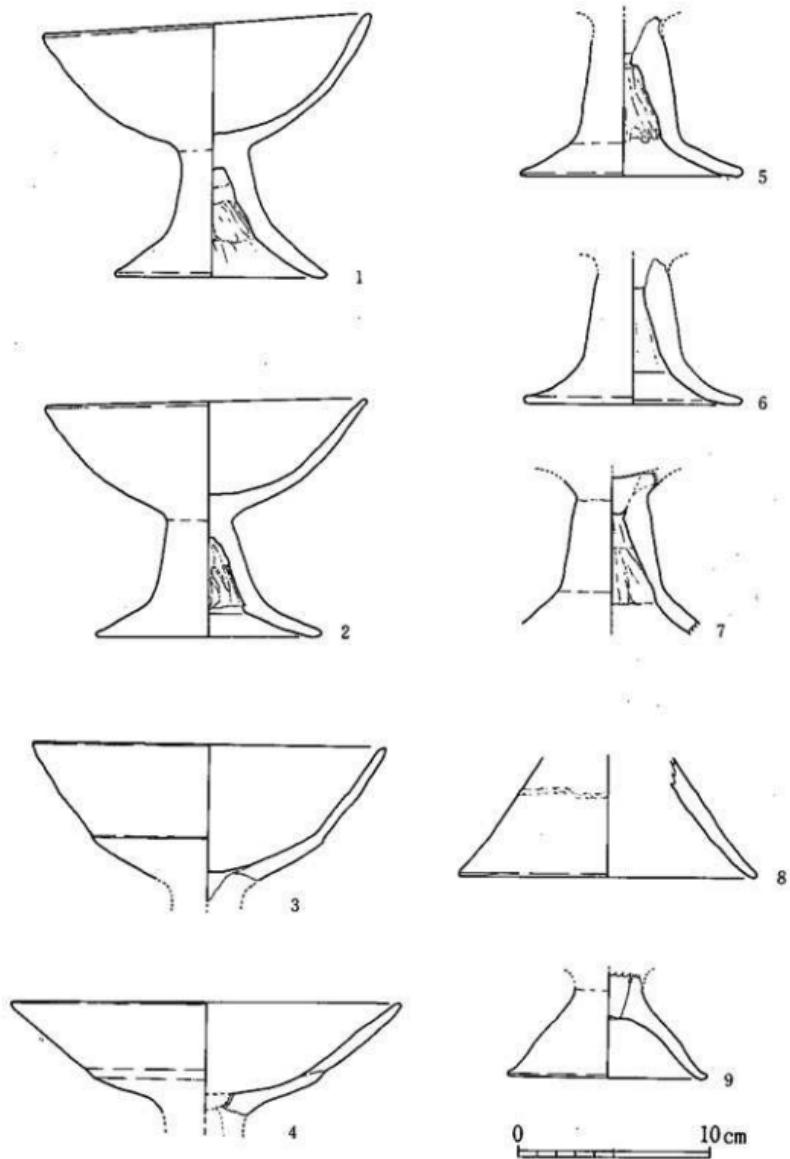
図 版



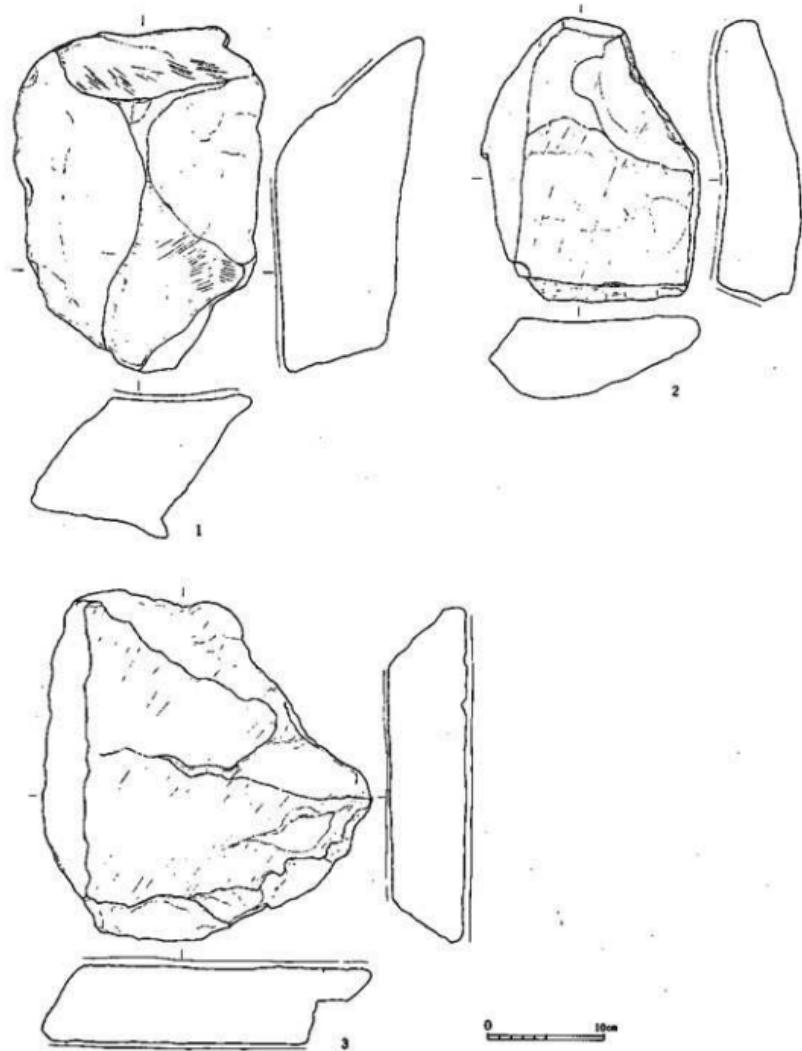
第1図 TKN 2号住居址出土土器



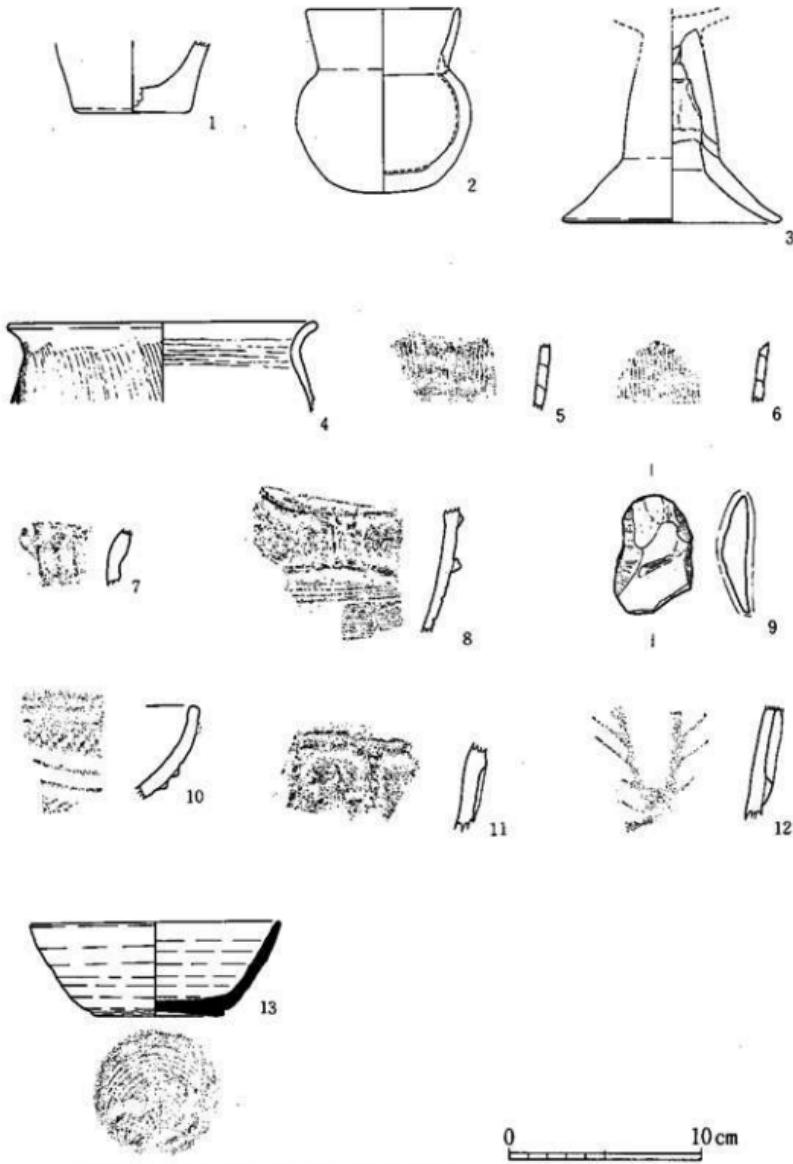
第2図 TKN 2号住居址出土土器



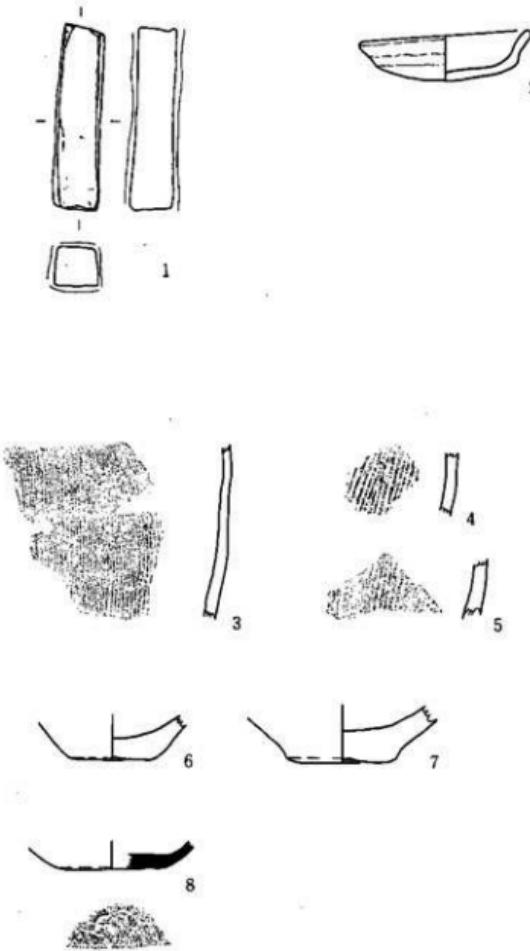
第3図 TKN 2号住居址出土土器



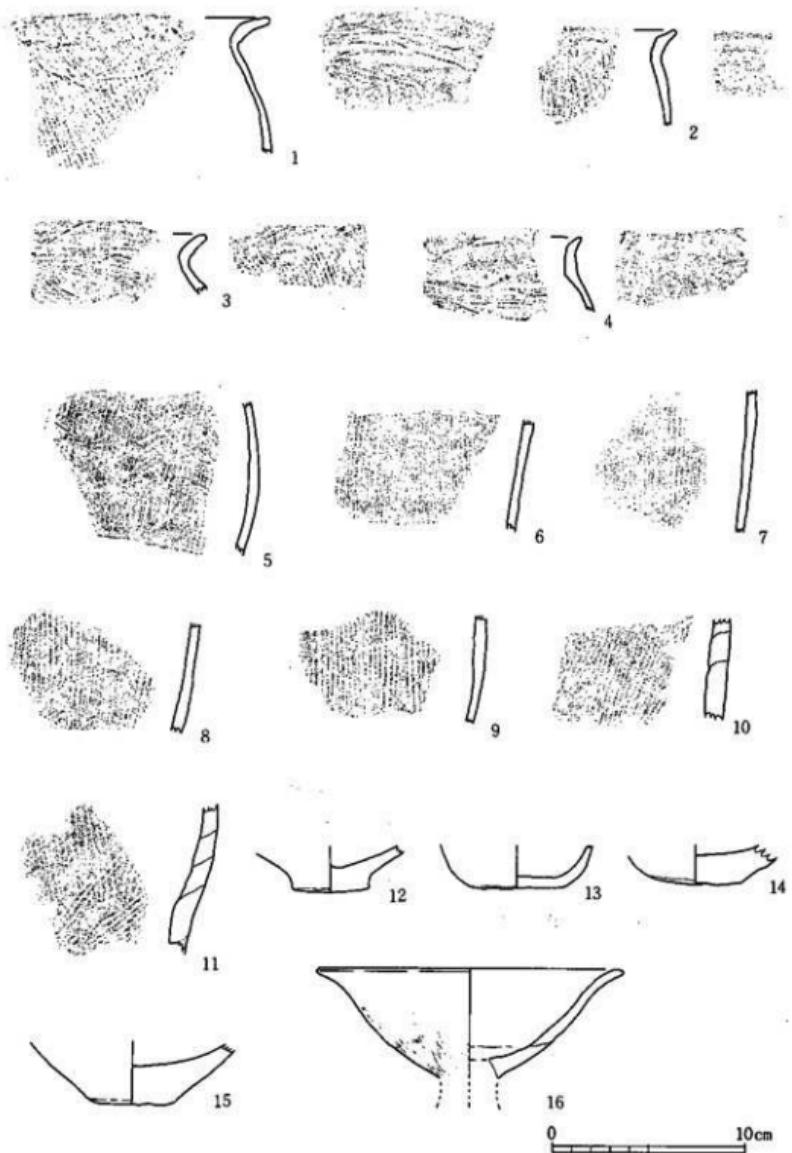
第4図 TKN 2号住居址出土石器



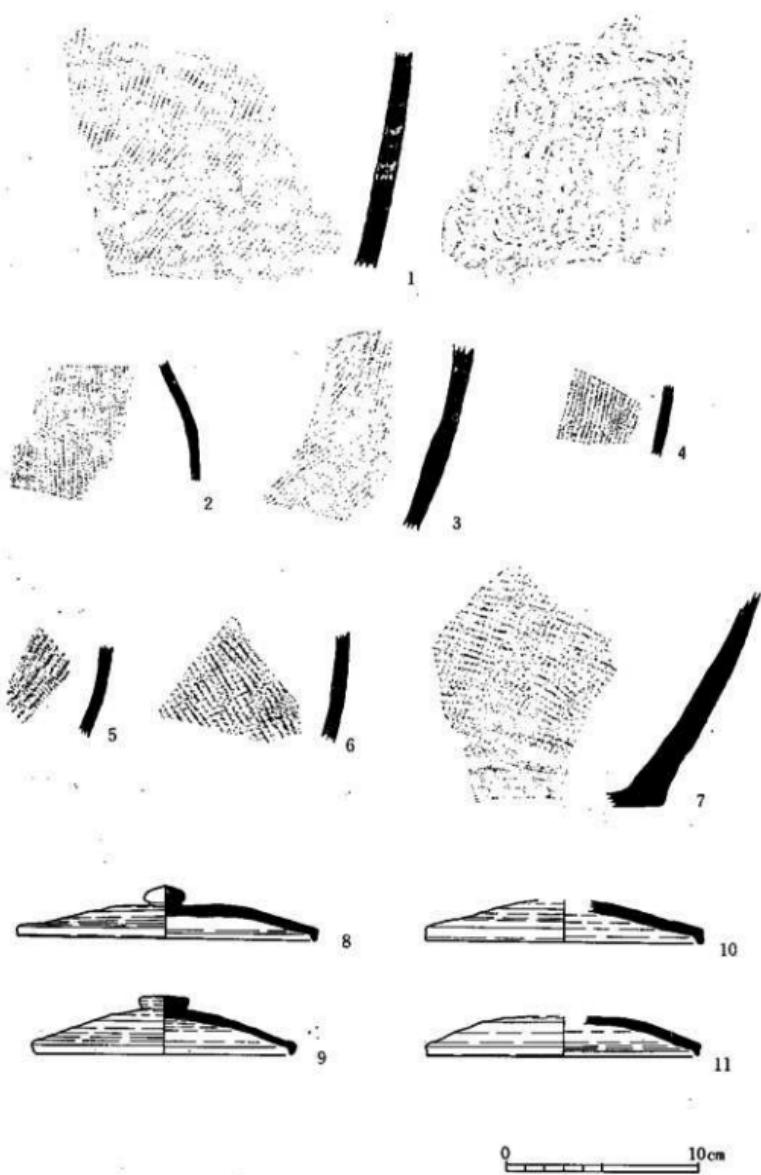
第5図 TKN 1号住居址(1~3)、3号住居址(4~6)、溝址2(7)、
土坑1(8)・4(9)・8(10~12)・20(13)出土土器、石器



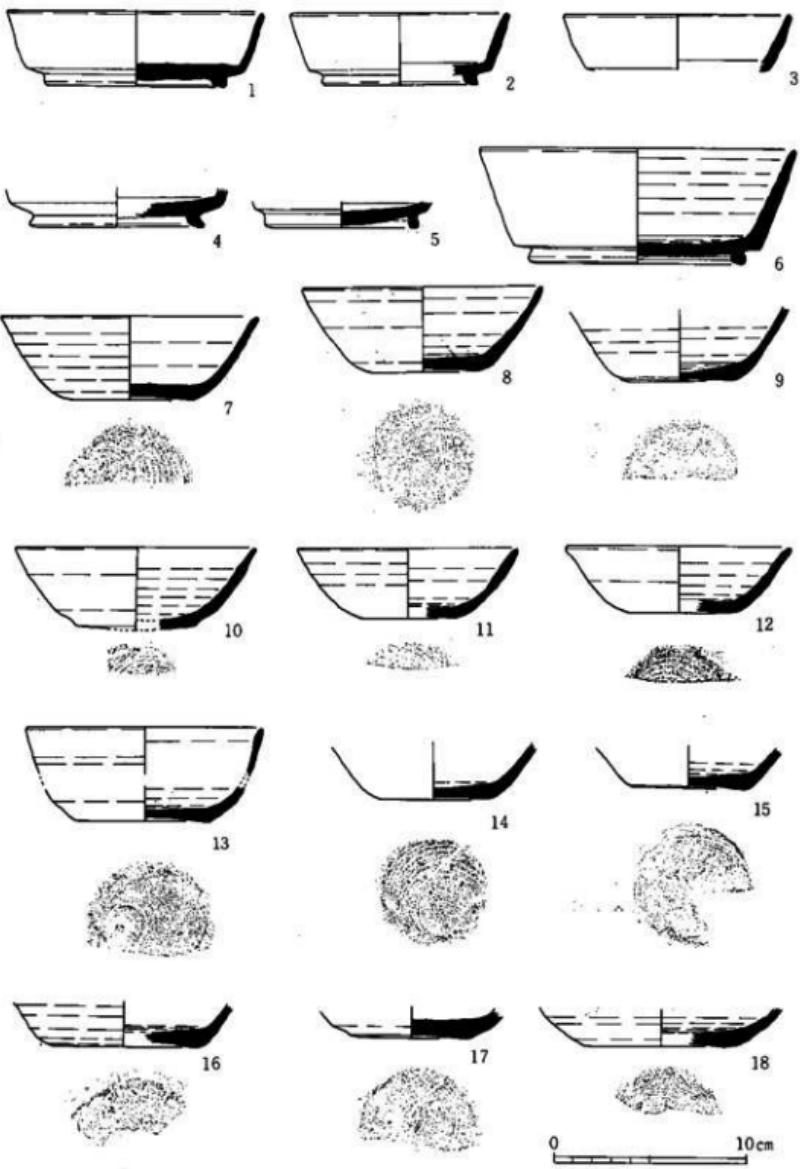
第6図 TKN 各地区柱穴出土土器、石器



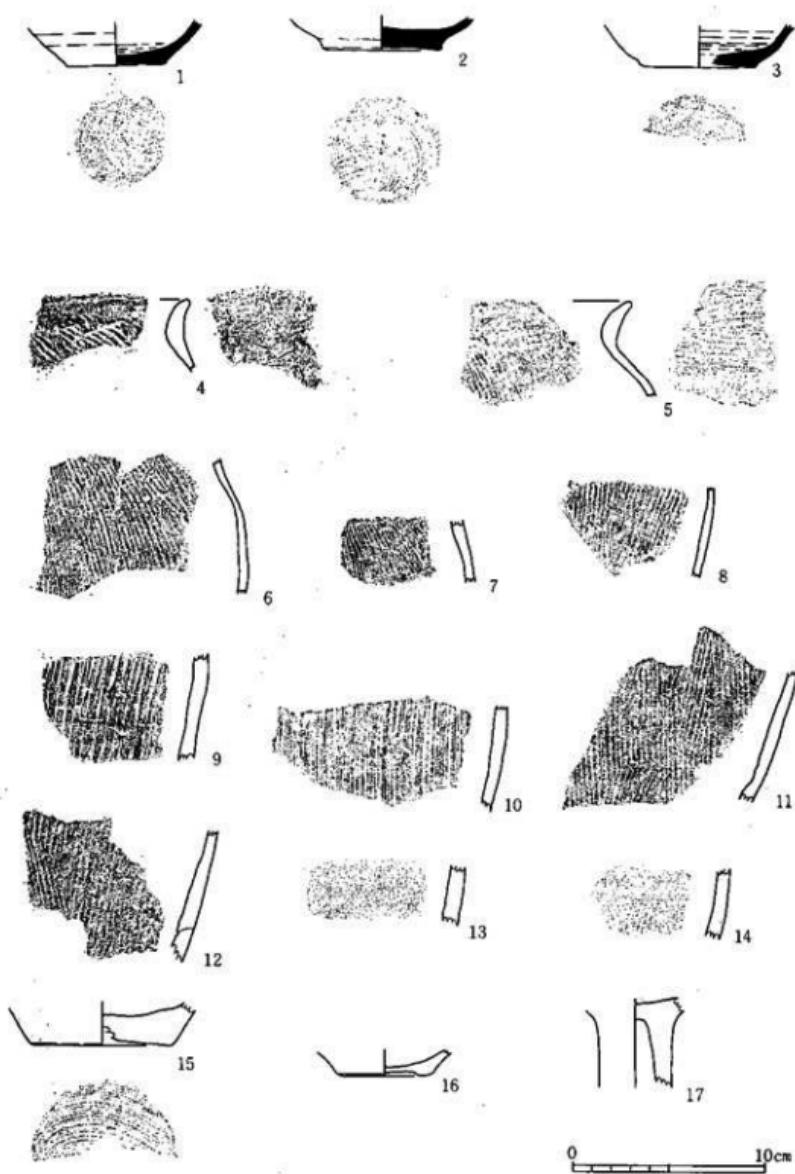
第7図 TKN: 小豎穴1出土土器



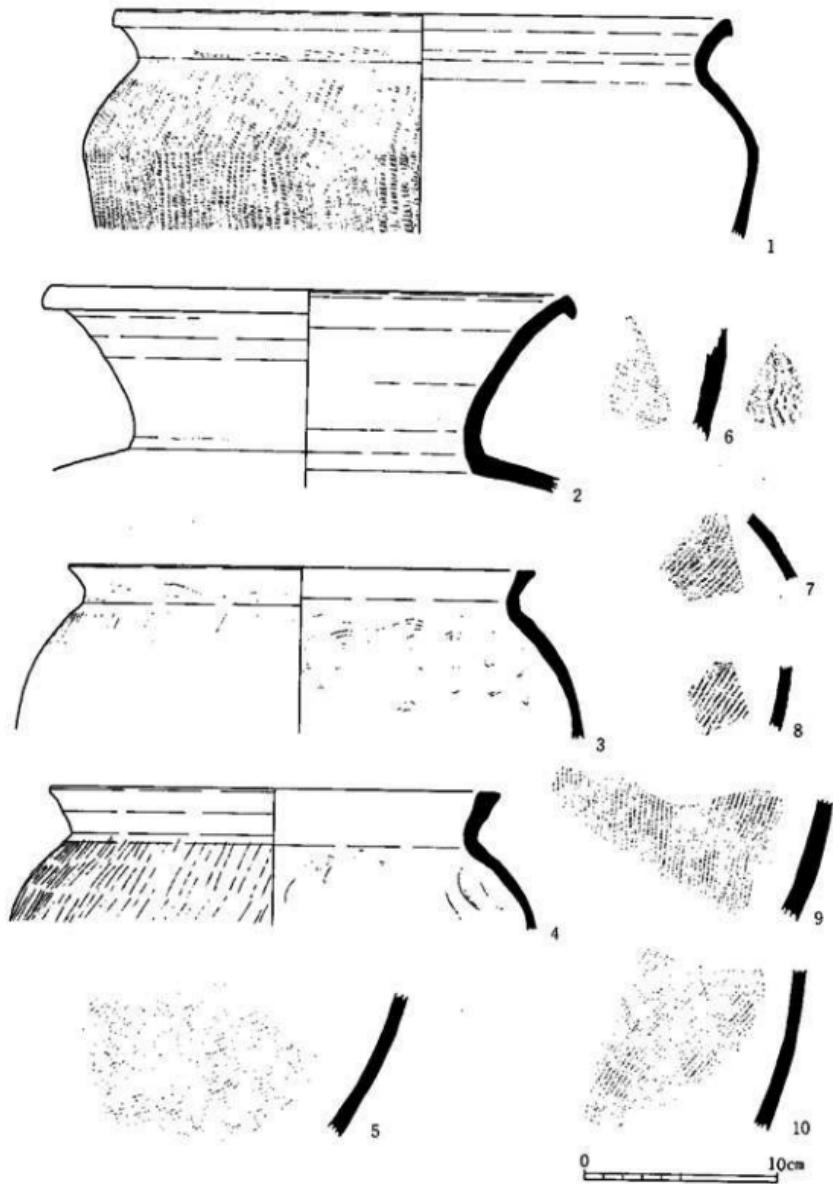
第8図「TKN 小豎穴1出土土器」



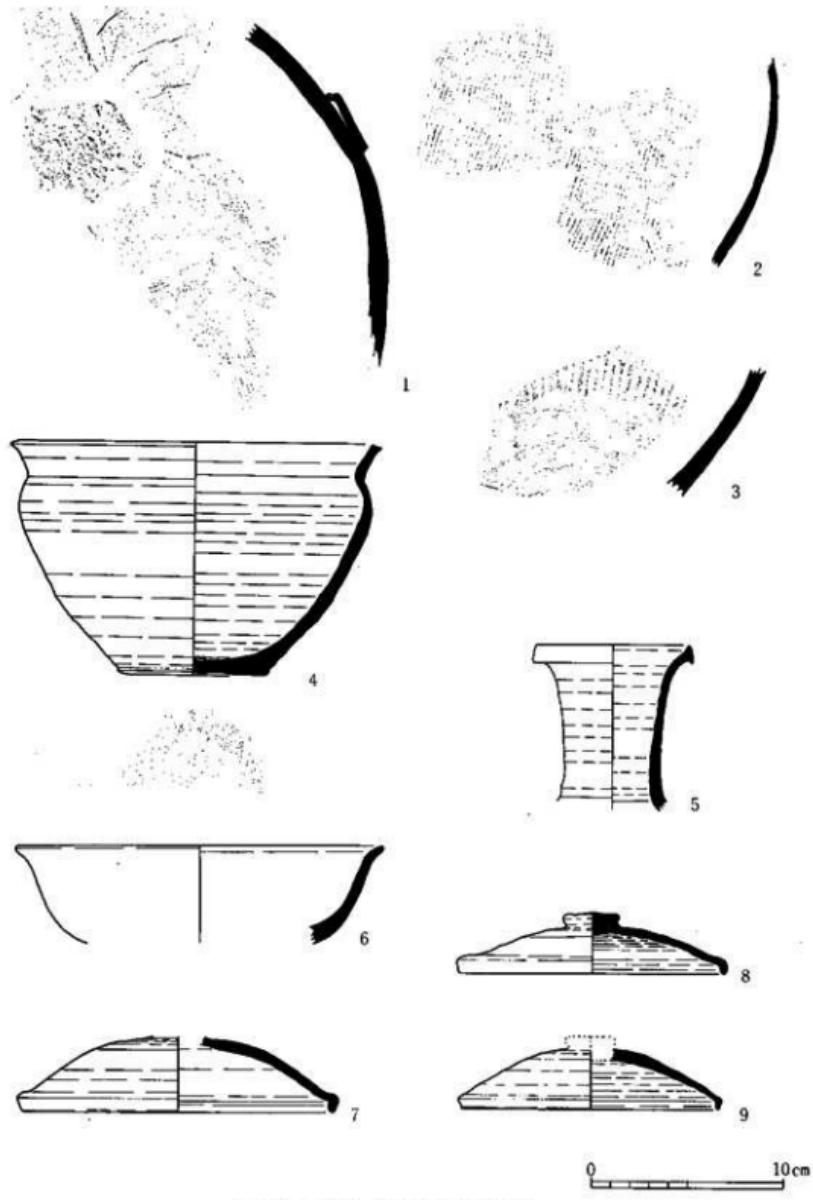
第9図 TKN 小豎穴1出土土器



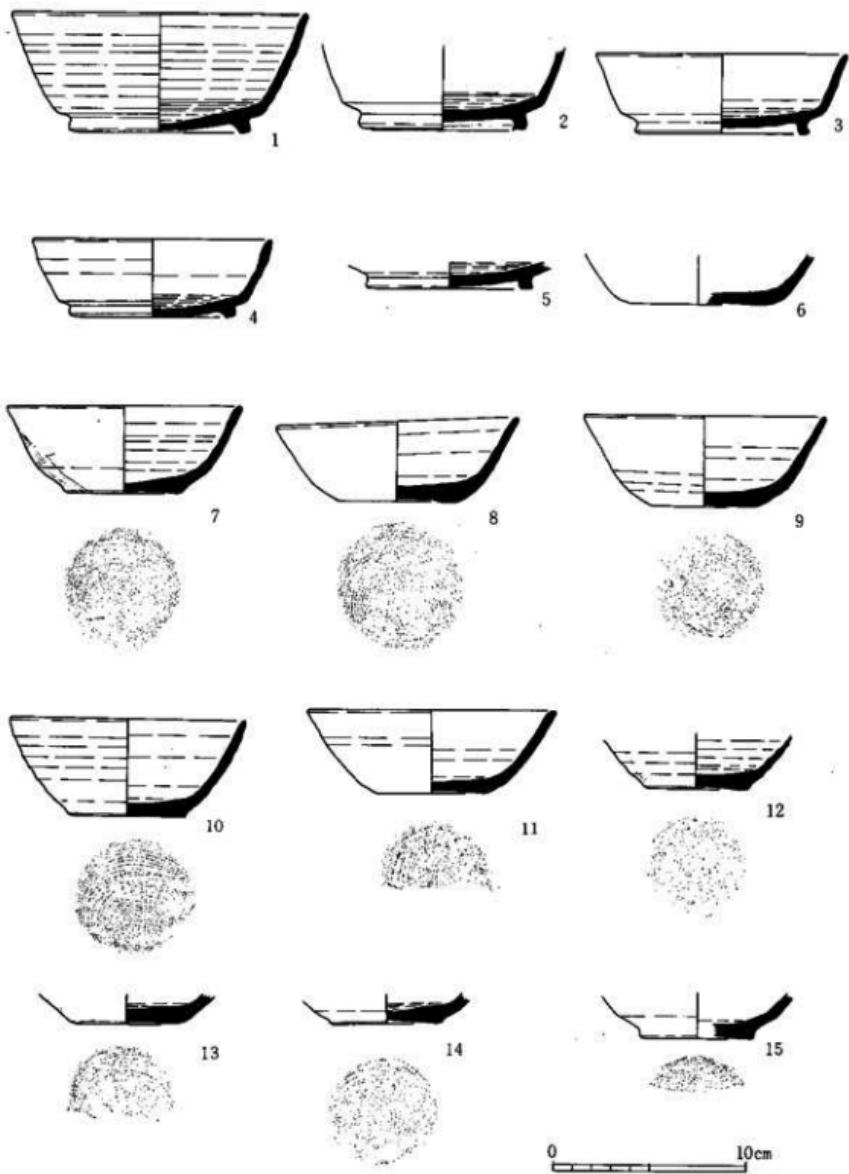
第10図 TKN 小竪穴1(1~3)、溝状址1出土土器(4~17)



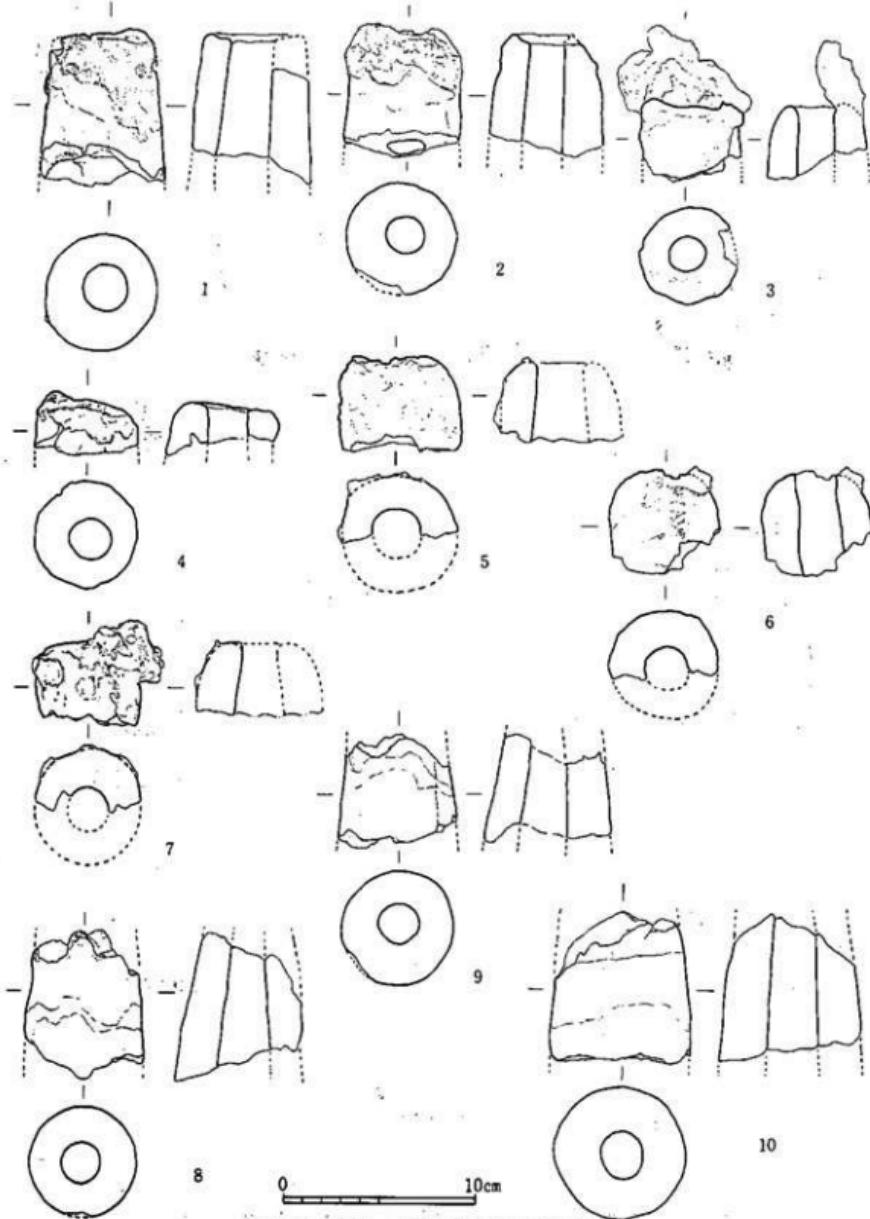
第11図 TKN 溝状址1出土土器



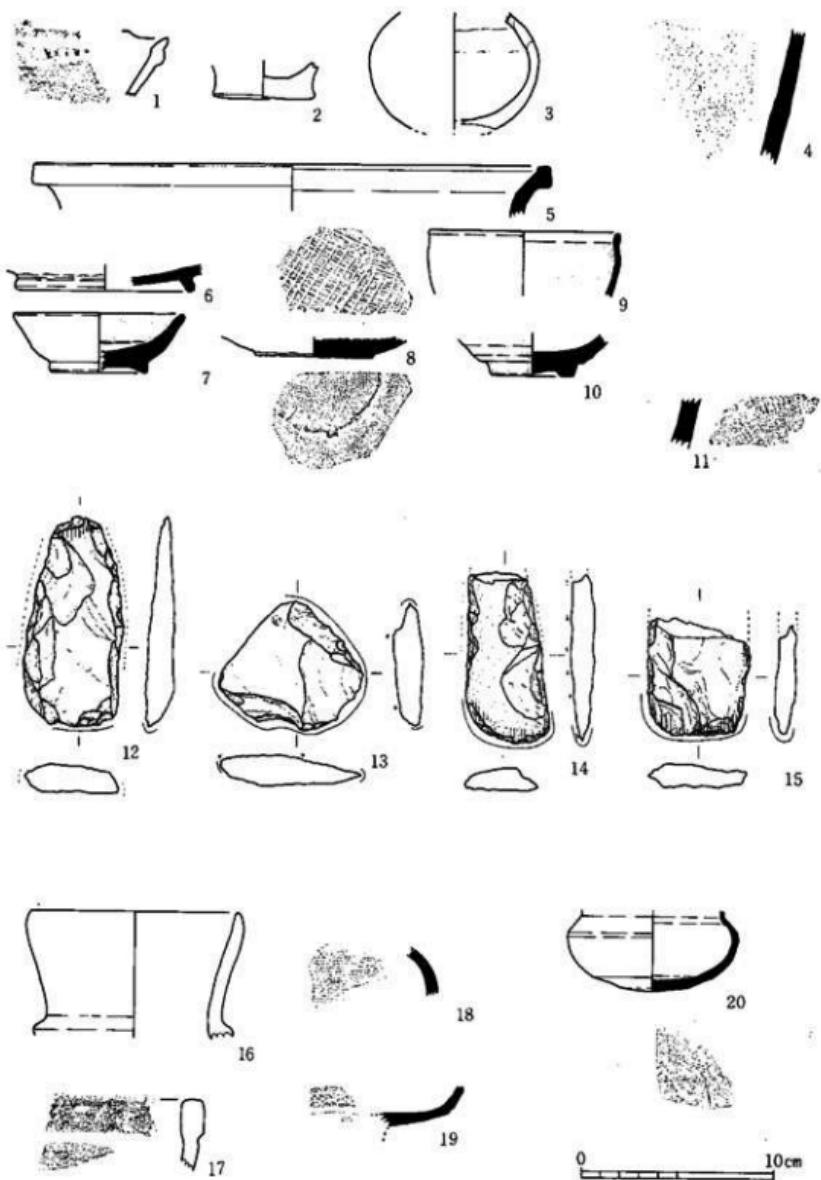
第12図 TKN 溝状址1出土土器



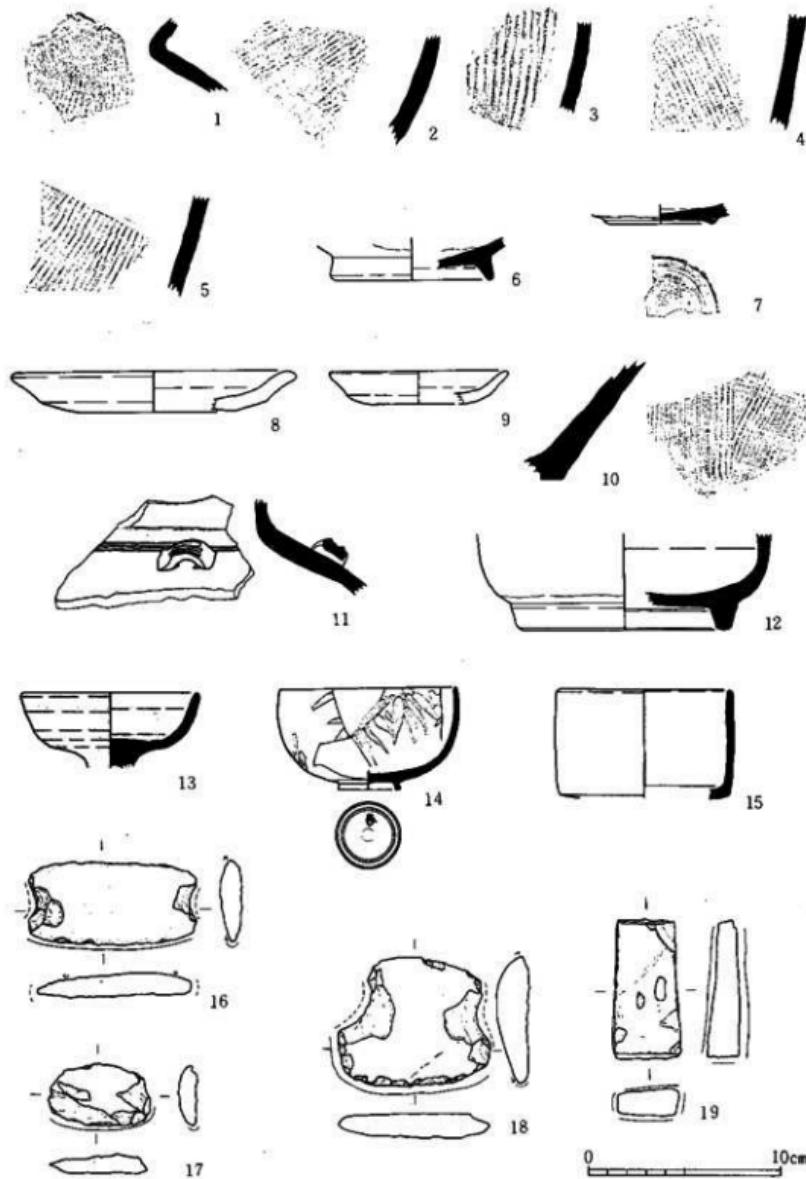
第13図 TKN 溝状址1出土土器



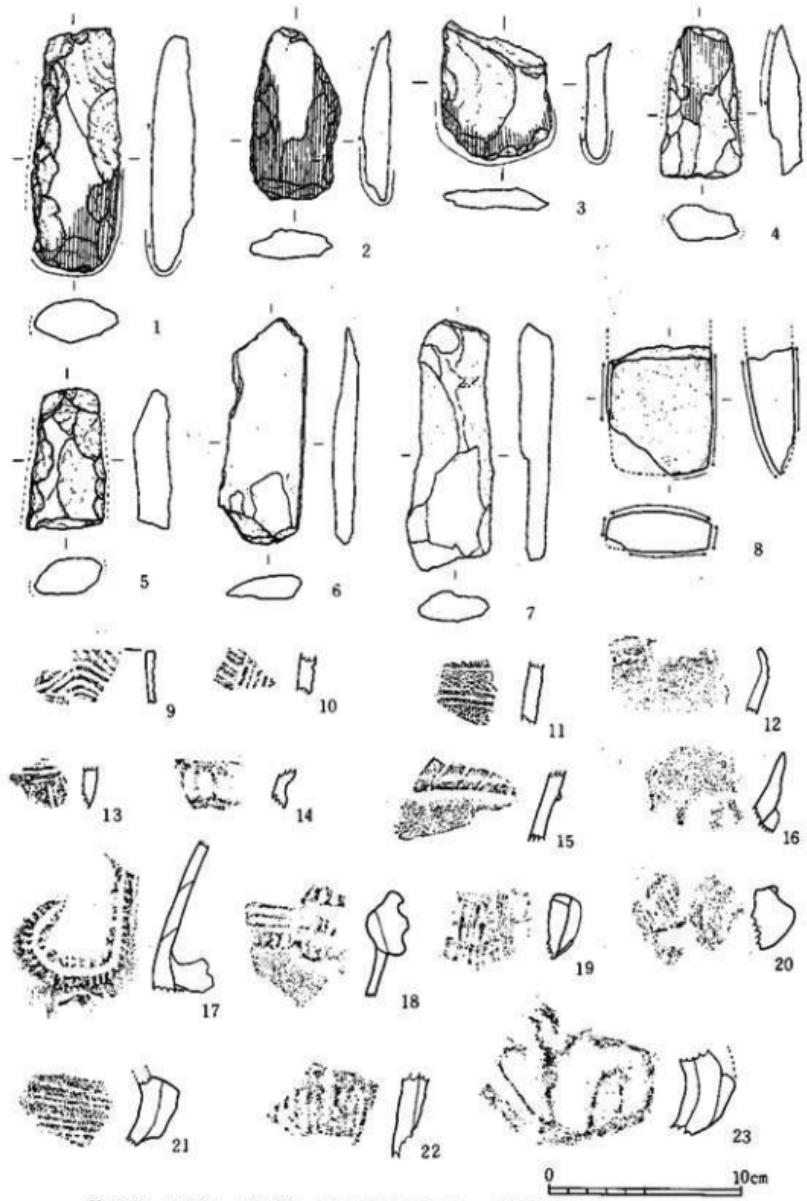
第14図 TKN 小竪穴1、溝状穴1出土羽口



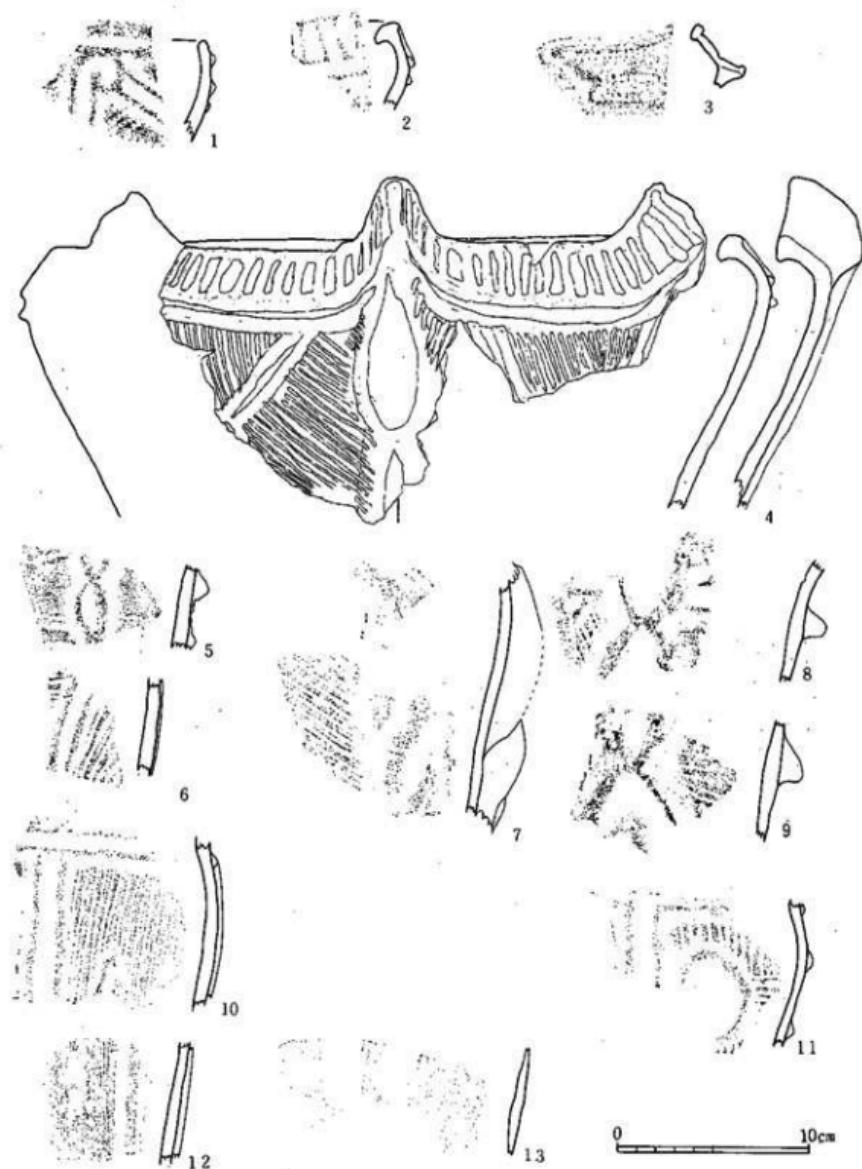
第15図 TKN A2・3区(1~15)、B2区(16~20)遺構外出土土器、石器



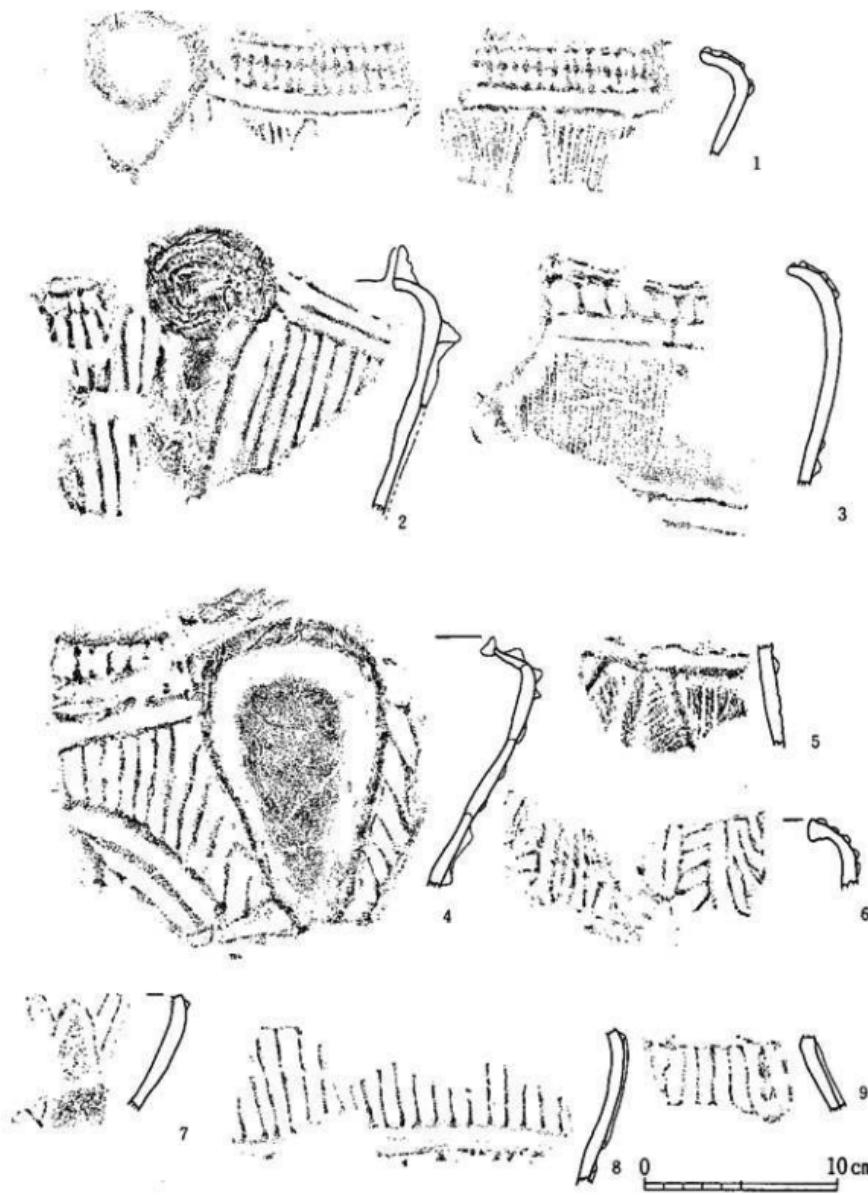
第16図 TKN B2区遺構外出土土器、石器



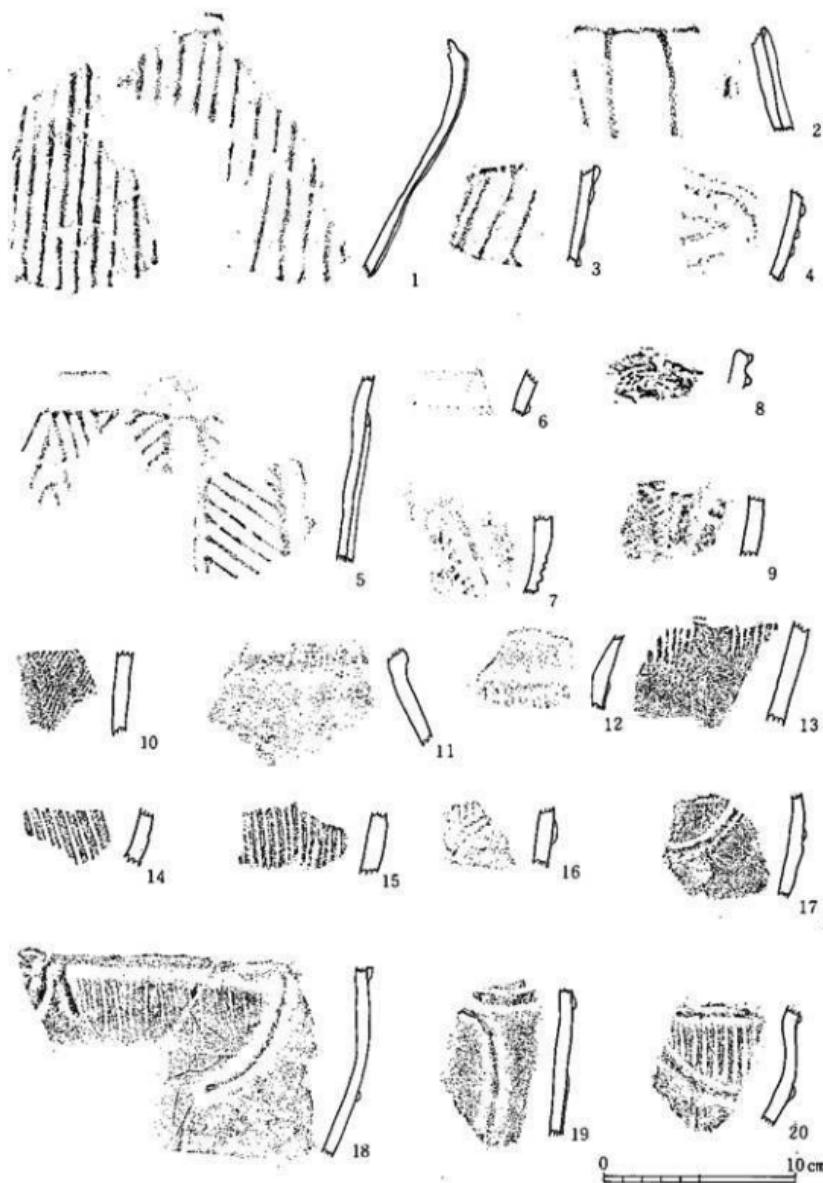
第17図 TKN B2区(1~8)、B3区・C3区(9~23)遺構外出土石器、土器



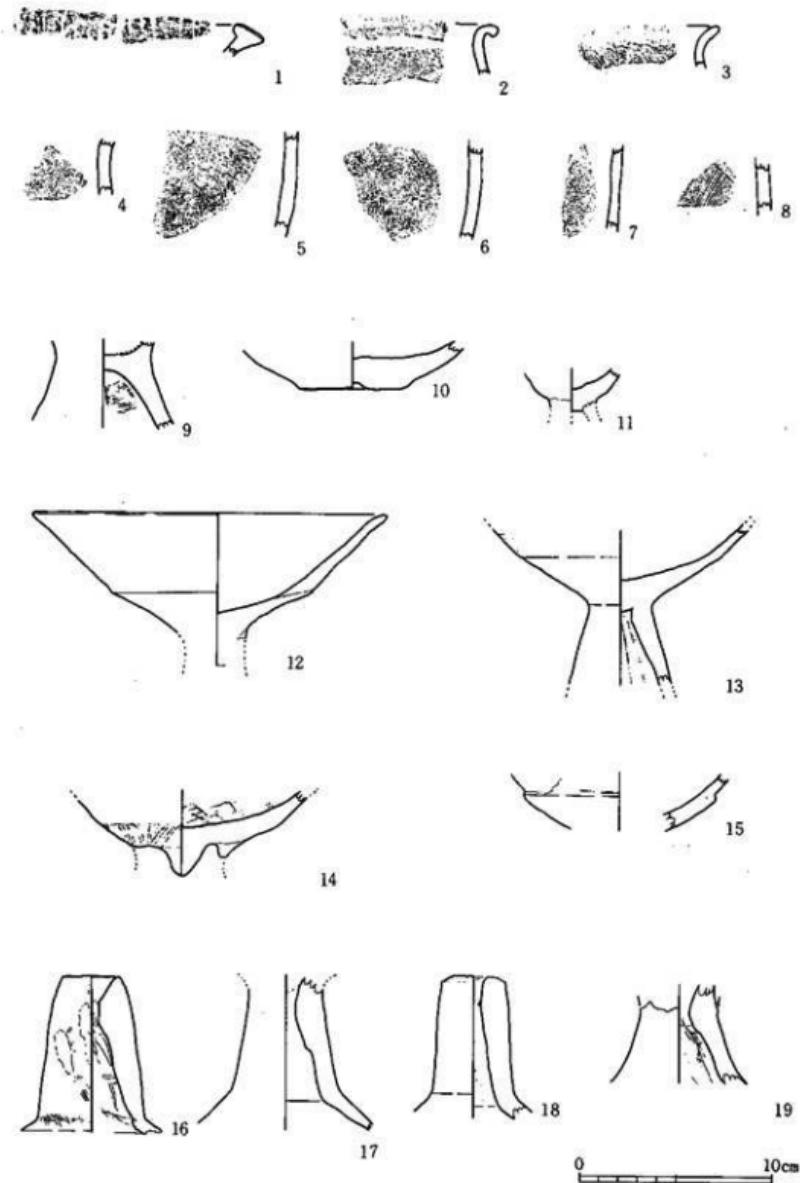
第18図 TKN B3区・C3区造構外出土土器



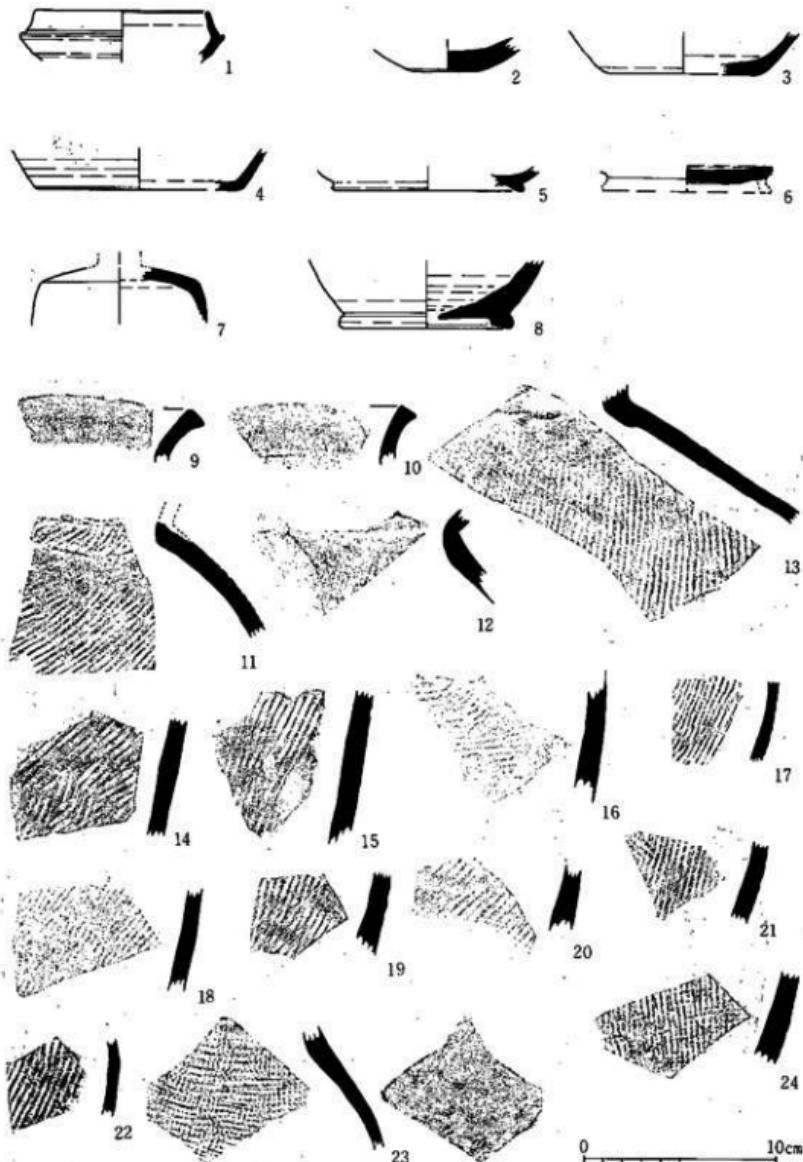
第19図 TKN C3区遺構外出土土器



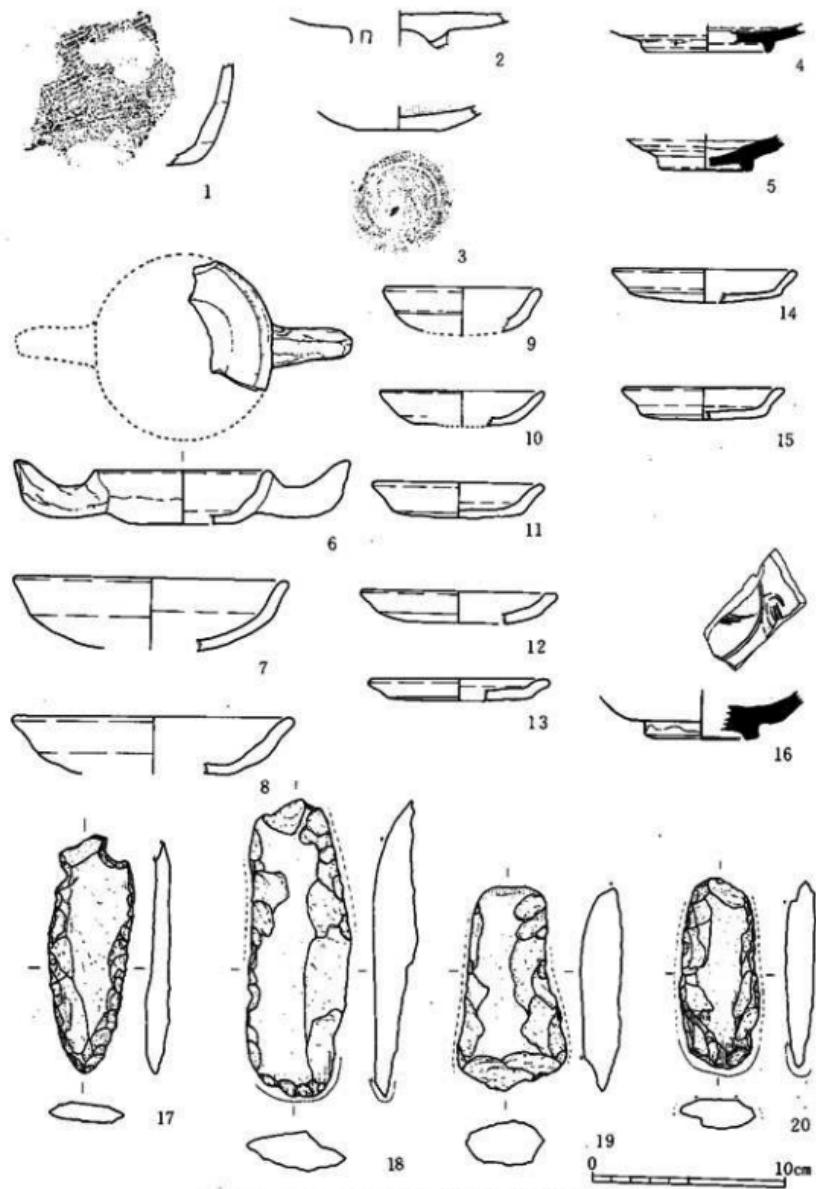
第20図 TKN B3区-C3区遺構外出土土器



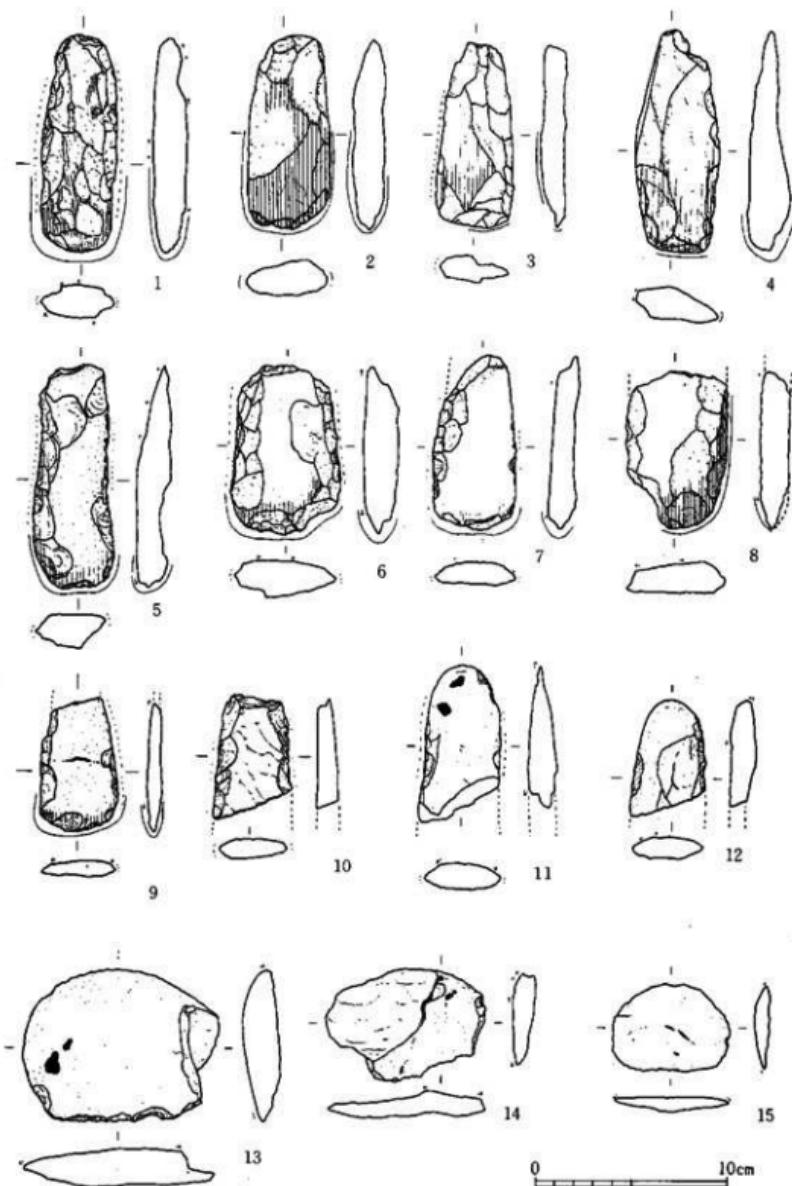
第21図 TKN B3区・C3区遺構出土土器



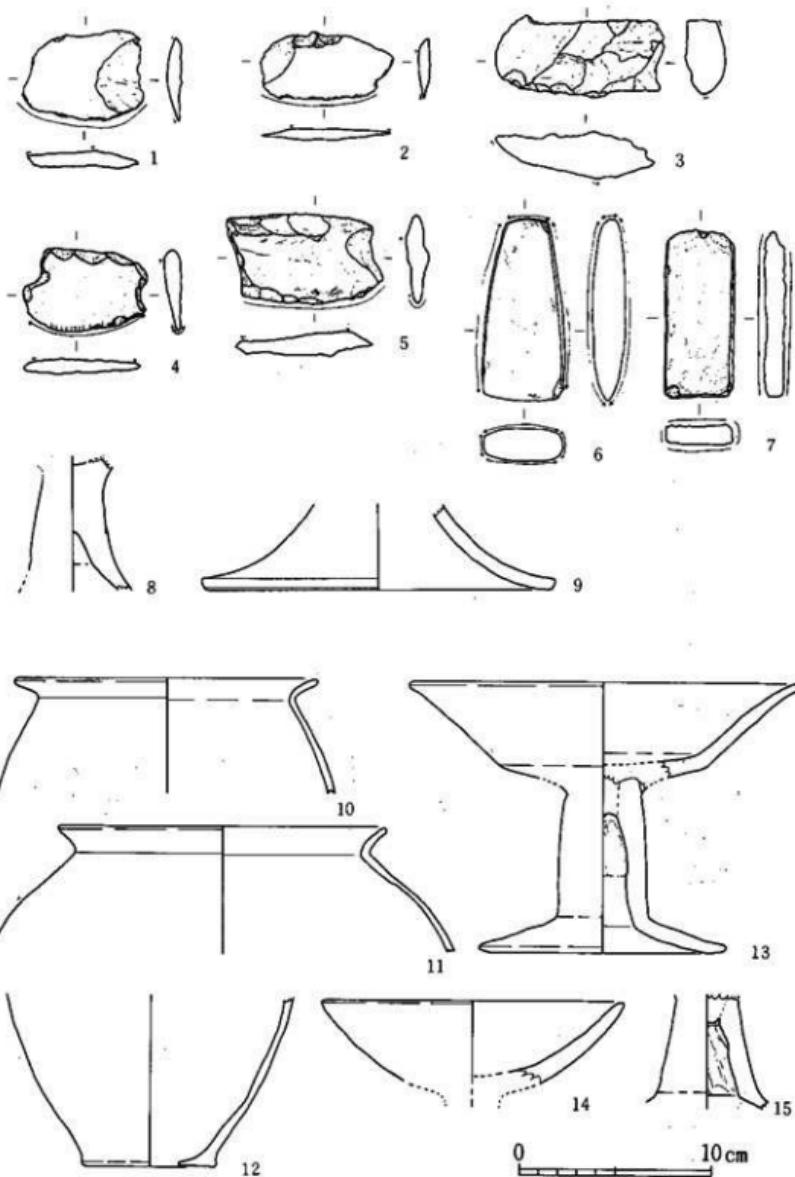
第22図 TKN B3区・C3区遺構出土土器



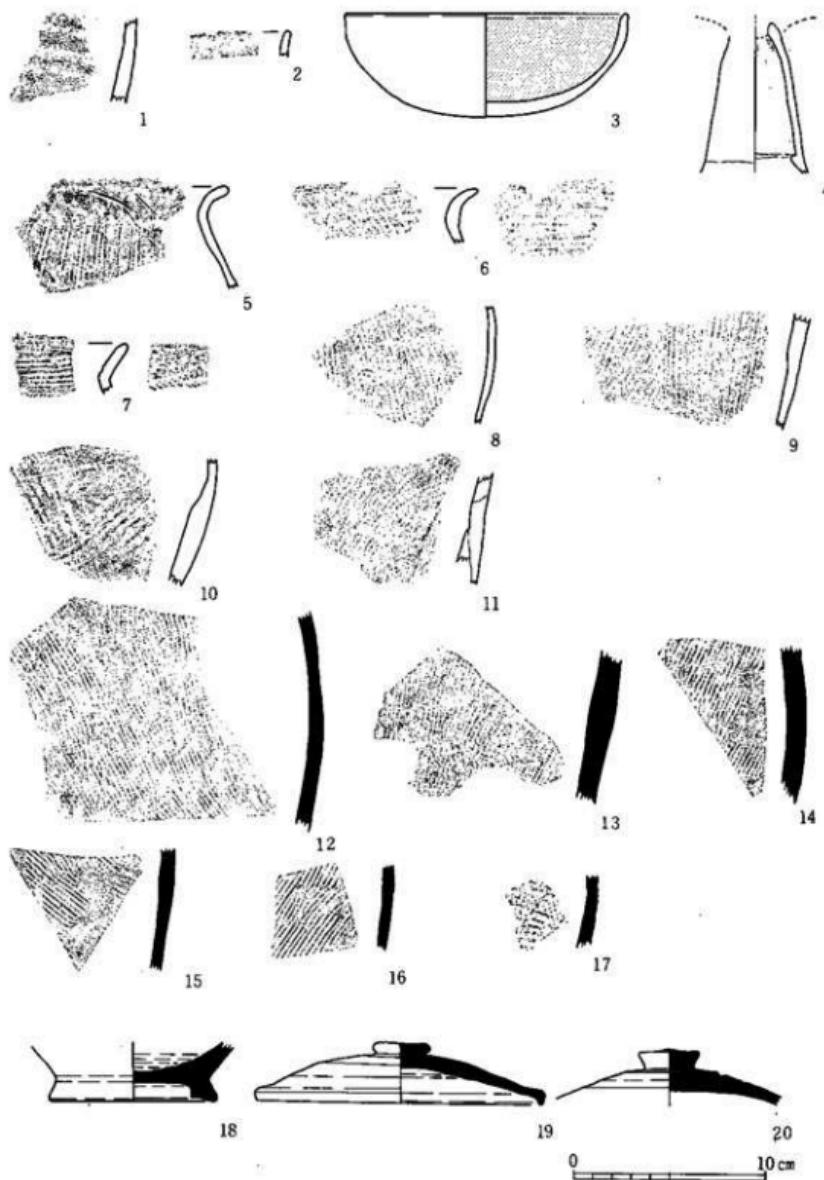
第23図 TKN B3区・C3区 造構外出土土器、石器



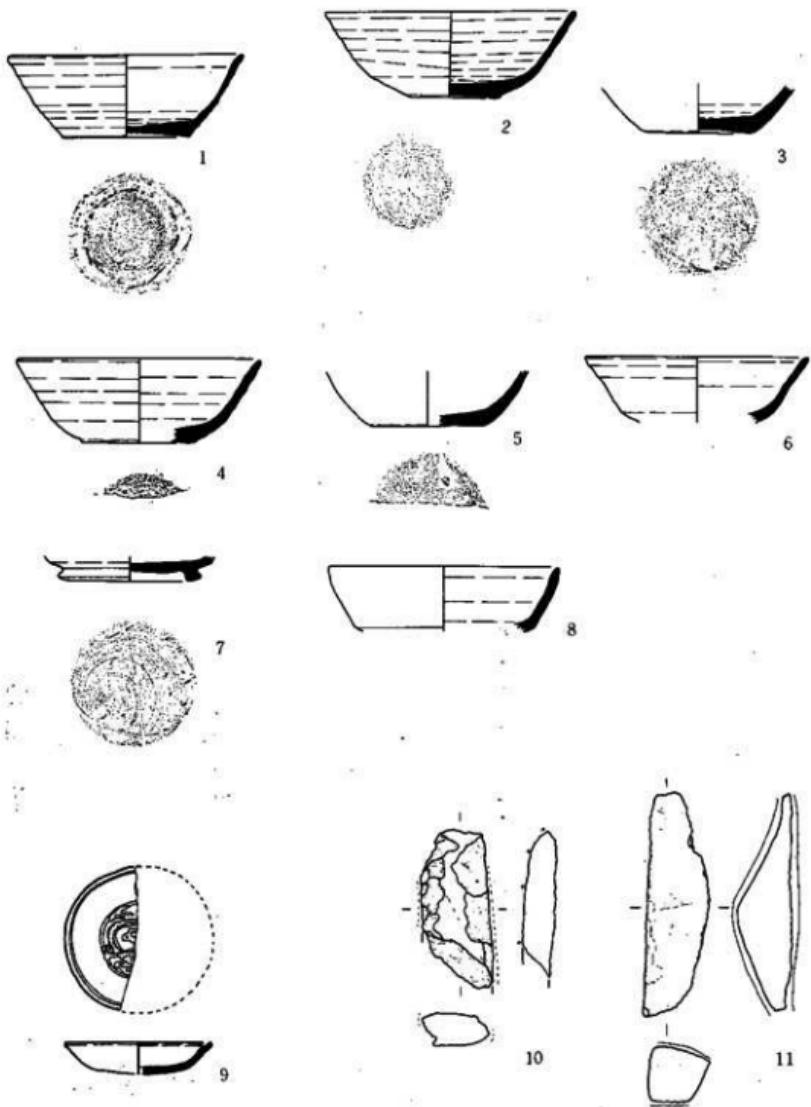
第24図 TKN B3区・C3区 造構外出土石器



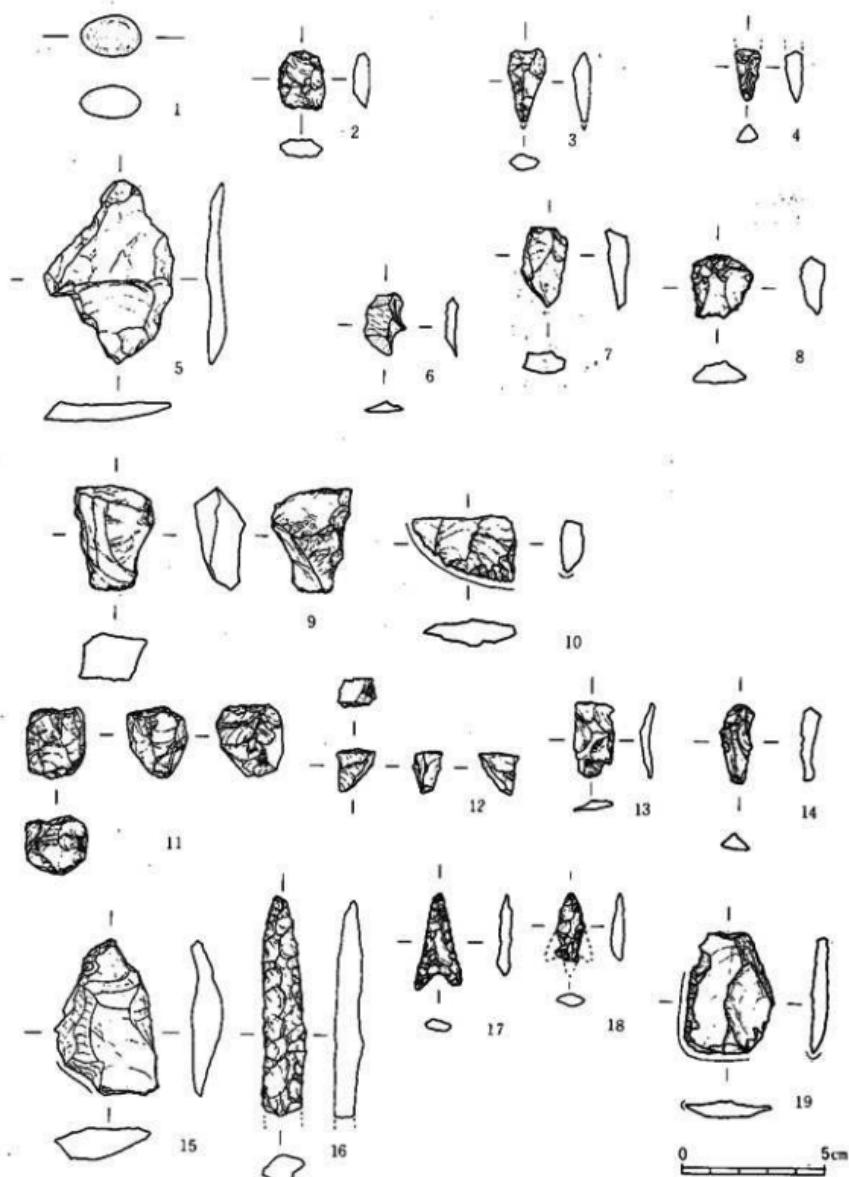
第25図 TKN B3区・C3区(1~7)、D3区(8~9)、F4区土器包含層(10~15)、出土土器、石器



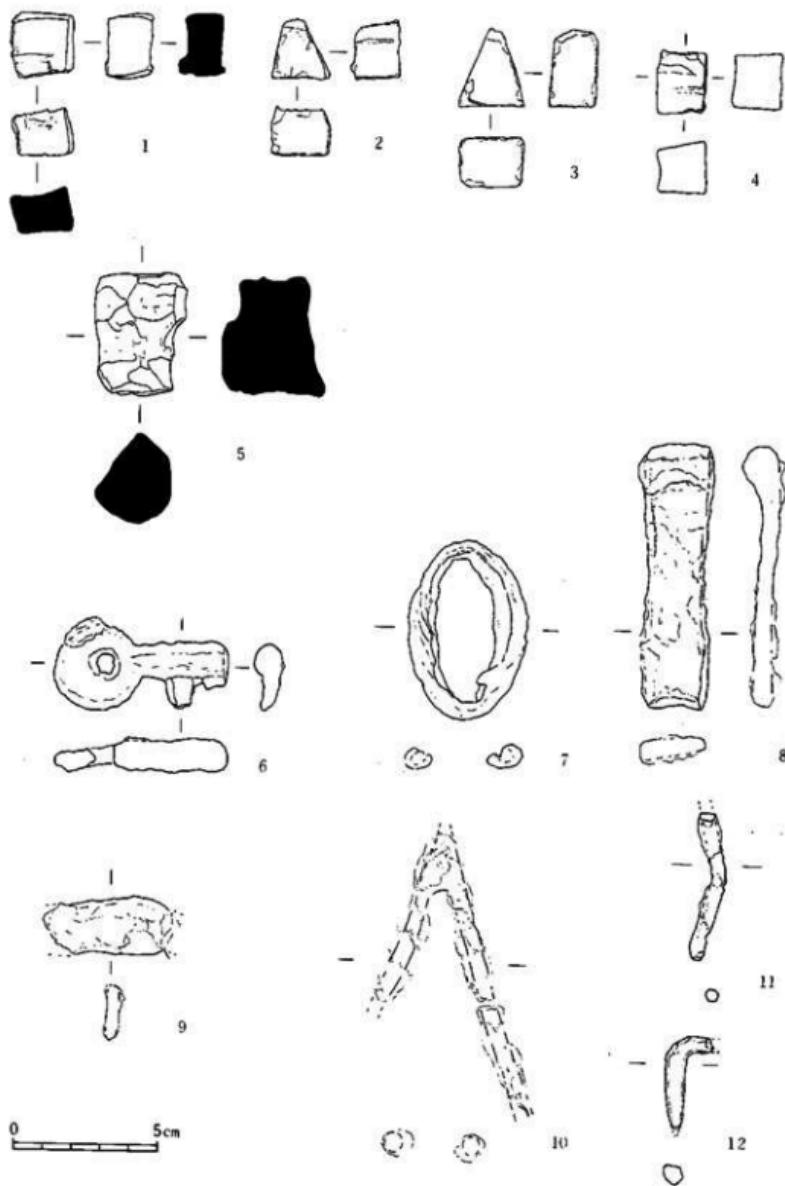
第26図 TKN F4区造構外出土土器



第27図 TKN F4区造構外出土土器、石器



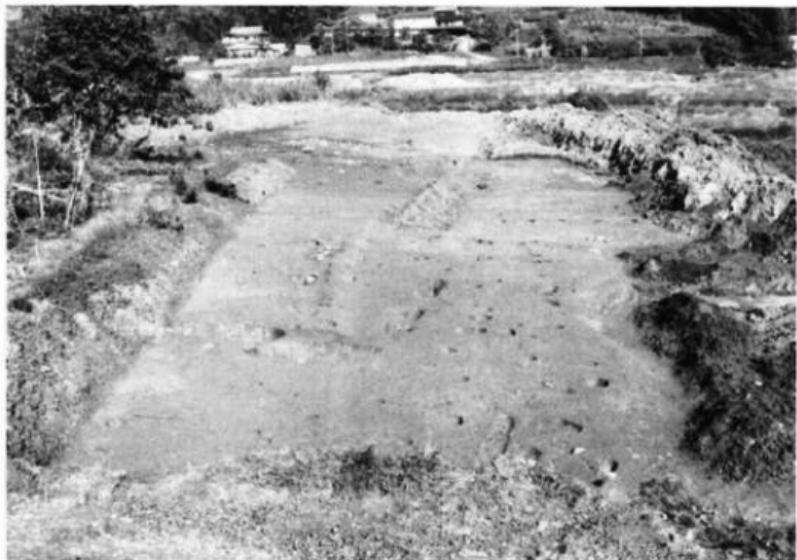
第28図 TKN 2号(1)・3号(2)住居址、溝址2(3)、土坑2(4)、A2・3区(5)、
B2区(6~10)、B3区・C3区(11~18)、F4区(19)出土石器



第29図 TKN A2・3区(1)、B3区・C3区(2~5)出土土器、各地区出土鉄製品(6~12)

写 真 図 版

図版 1



B 2 区調査地全景(南から)



B 2 区調査地全景(北東から)



B 3 区調査地全景(南から)



B 3 区全景(東から)

图版3

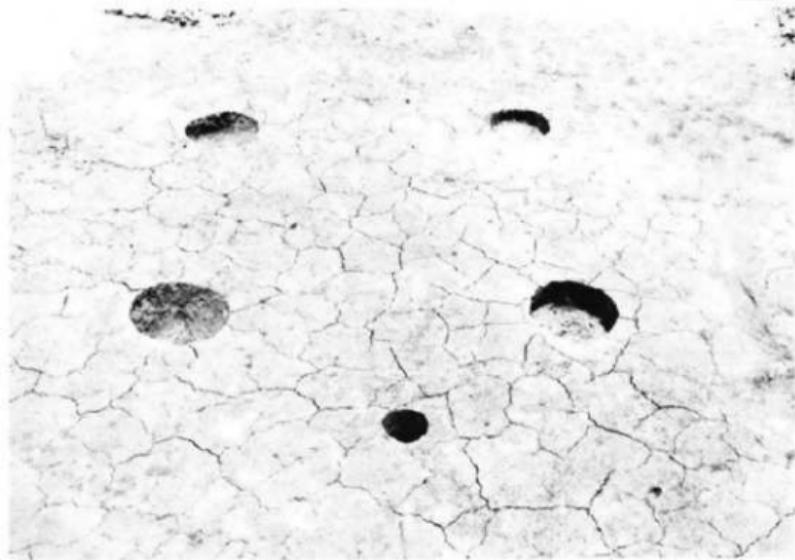


2号住居址 遗物出土状态



同上 遗物出土状态



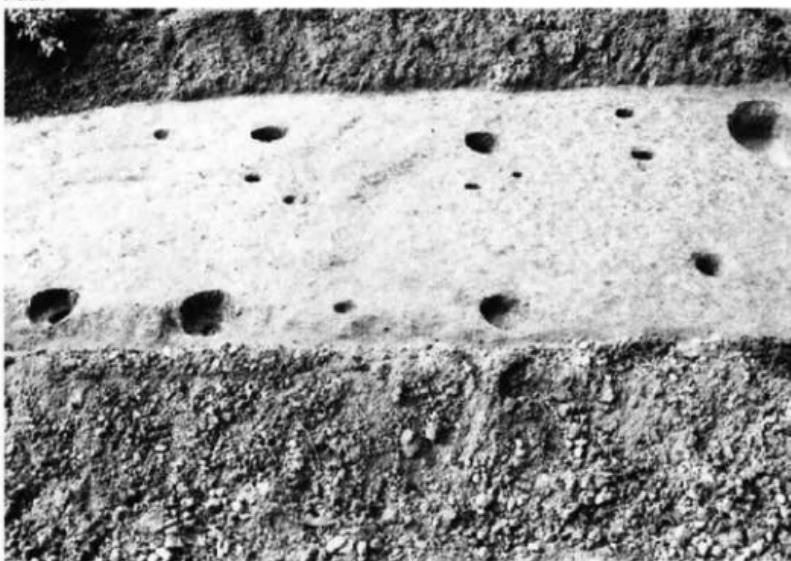


掘立柱建物址 1



掘立柱建物址 2, 溝址 3, 土坑 6

图版 5



据立柱建物址 3



据立柱建物址 4



掘立柱建物址 5



掘立柱建物址 6，溝址 7

図版 7



溝址 1



溝址 4



清址 2, 暗渠



暗渠断面

図版9



溝址 5



溝址 7



小豎穴1



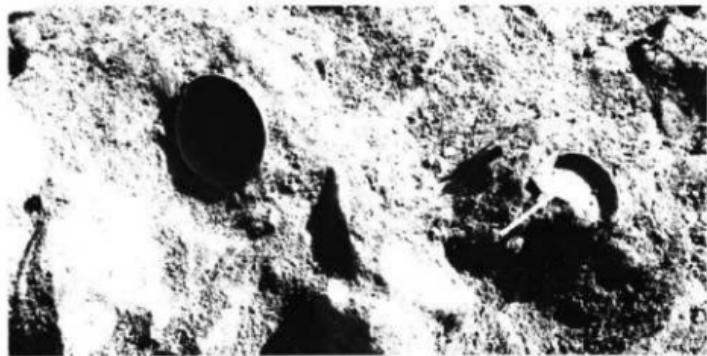
溝状跡1、小豎穴1（南から）



溝状址1、小窪穴1（東から）



同上（西から）



溝状址1土器出土状態

图版13



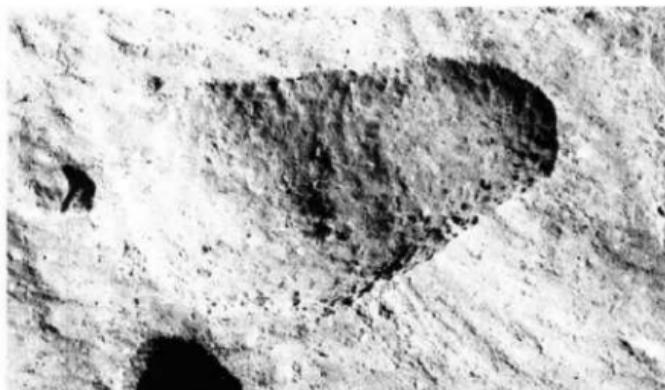
土坑 1



土坑 2·3



土坑 4·5



土坑 7



同 9・8



同11・12

图版15

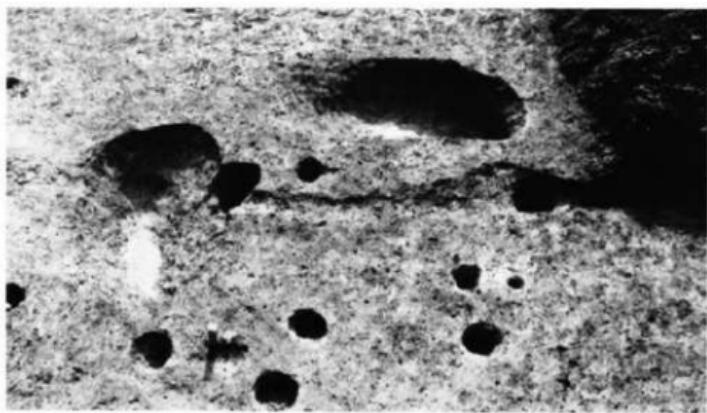
土坑
13·14
周边柱穴



土坑
15



土坑
16·17
18



圖版16



土坑19

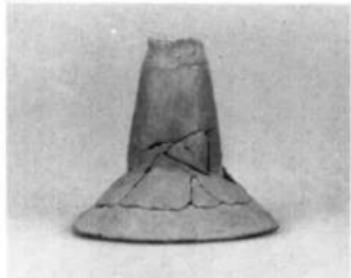


同20

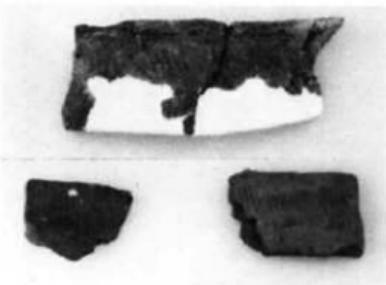


同21

图版17



1号住居址 土師器高环



3号住居址 土師器甕



2号住居址 土师器甕



同 土师器甕



同甕

1号·2号·3号住居址出土土器



土師器壺



土師器小形壺



土師器小形壺



土師器小形壺



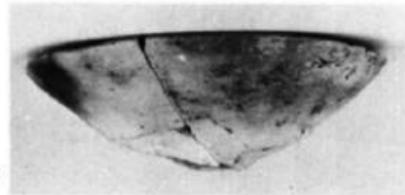
土師器高壺



土師器高壺

2号住居址出土土器

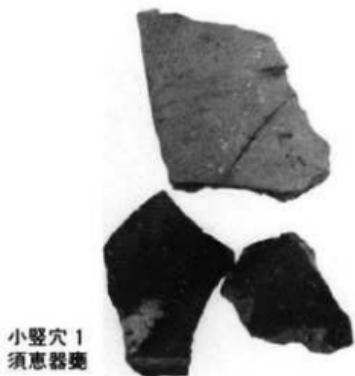
圖版19



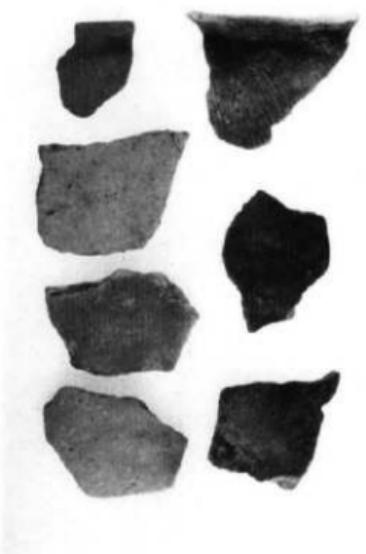
2号住居址
土師器高坏



同 土師器高坏



小竖穴1
須恵器壺



小竖穴1土師器壺



同 裏面

2号住居址，小竖穴1出土土器



須恵器 蓋

須恵器(酸化焼成) 蓋



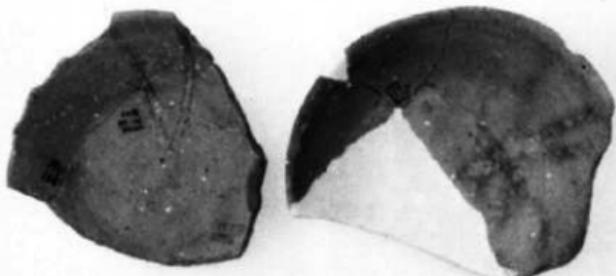
須恵器 蓋

須恵器 壺

小豎穴1出土土器

図版21

須恵器 坯
上から



同
横から



同
底部



小豎穴1出土土器



須恵器
坏 上から



同
坏 横から



同
坏 底部



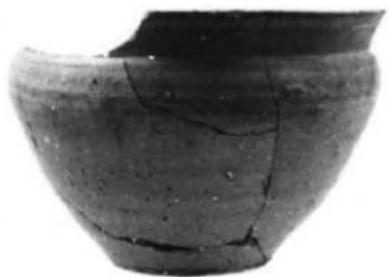
須恵器
坏



小豊穴1出土土器



須恵器 壺



須恵器 壺

須恵器 壺 横から



須恵器 蓋 上から

同 底部



同 横から



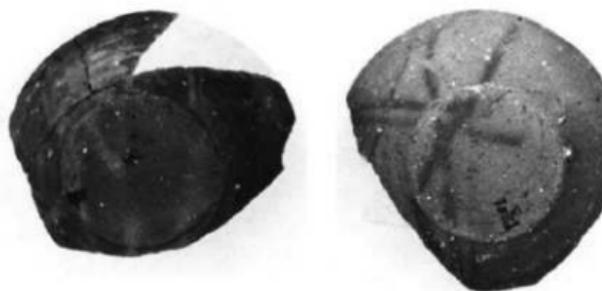
須恵器 壺



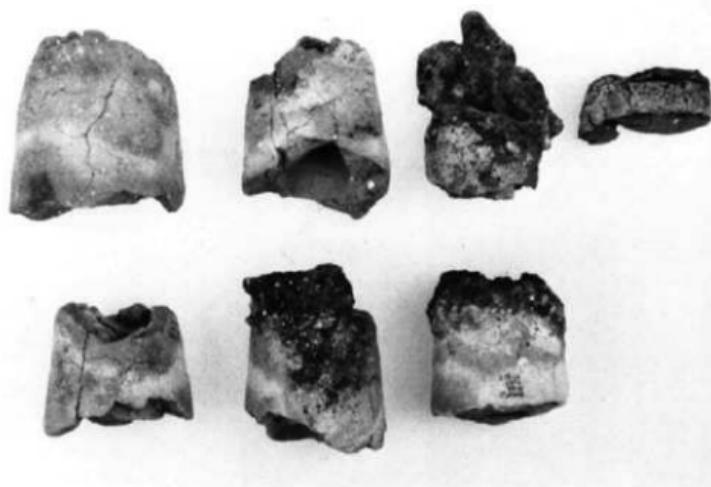
同 底部



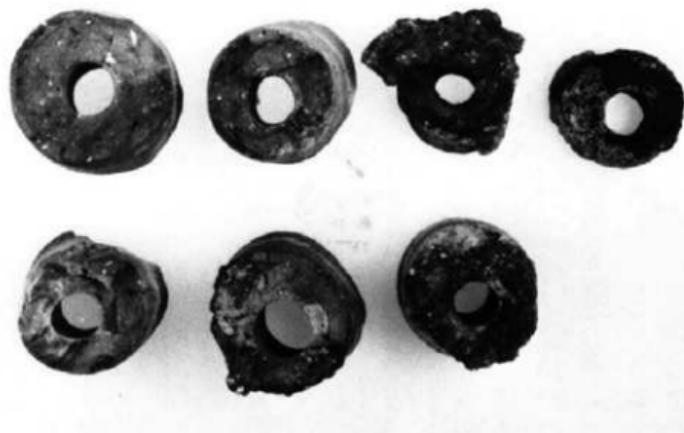
須恵器 壺



同 底部



小豈穴1、溝状址1出土羽口



同 上部から

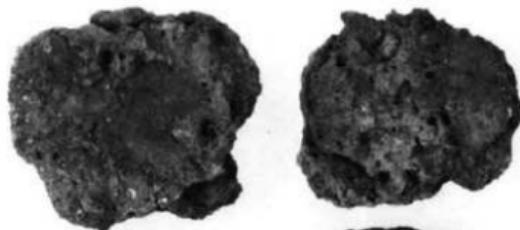


小竖穴1、溝状址1出土羽口

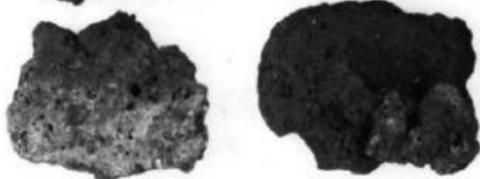


同上

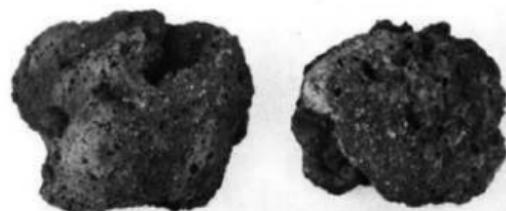
図版27



鉄滓 上面から

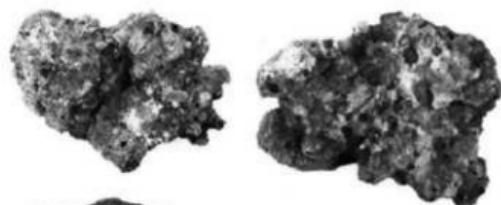


同 側面から

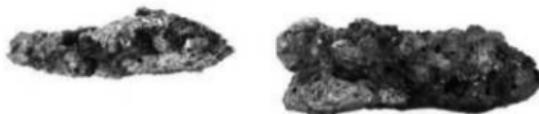


同 底面から

小豎穴1、溝状址1 鉄滓



鉄滓
上面から



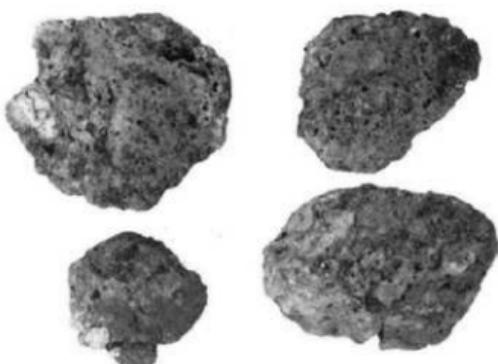
同 側面から



同 底面から

小豎穴1、溝状址1鉄滓

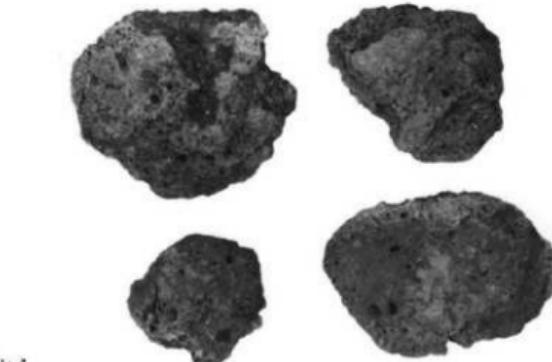
図版29



鉄滓 上面から



同 側面から



同 底面から

小豈穴 1、溝状址 1出土鐵滓



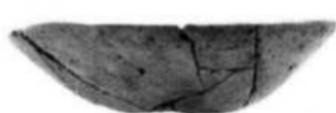
小豊穴1、溝状址1
出土鐵滓



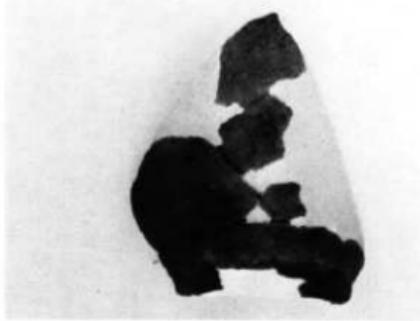
土坑 1 出土土器



土坑 4 出土土器 石器



土器包含层出土土器 高坏



同 脚



同 脚

土器包含层出土土器 壶

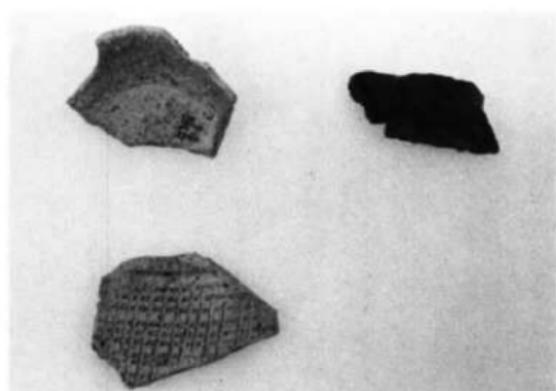
土坑 1・4, F 4 区土器包含层出土土器, 石器



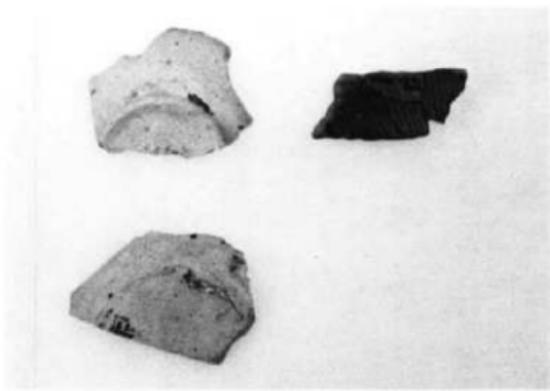
灰釉陶器



同 底部



灰釉陶器, おろし皿, 瓦器



同 底部・内面



天目茶碗, 陶器



同 内面・底部



磁器碗



同 底部



同石器

A 2・3区
陶器



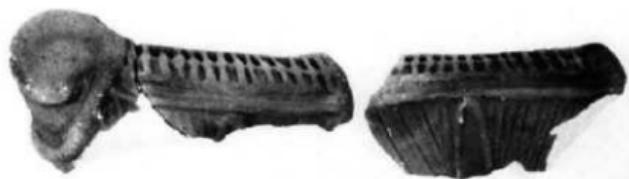
同石器



B 2区出土石器

A 2・3区, B 2区遺構外出土土器, 石器

図版35



縄文時代中期 深鉢

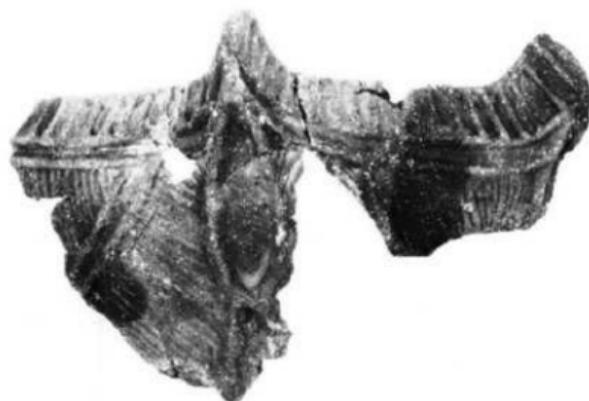


同上



B3区・C3区
造構外出土土器

同上



縄文時代中期深鉢
(同一個体)



同上



同上

B3区・C3区遺構外出土土器

図版37



縄文時代中期鉢



同上



同上

B3区・C3区遺構外出土土器



弥生時代後期壺、甌

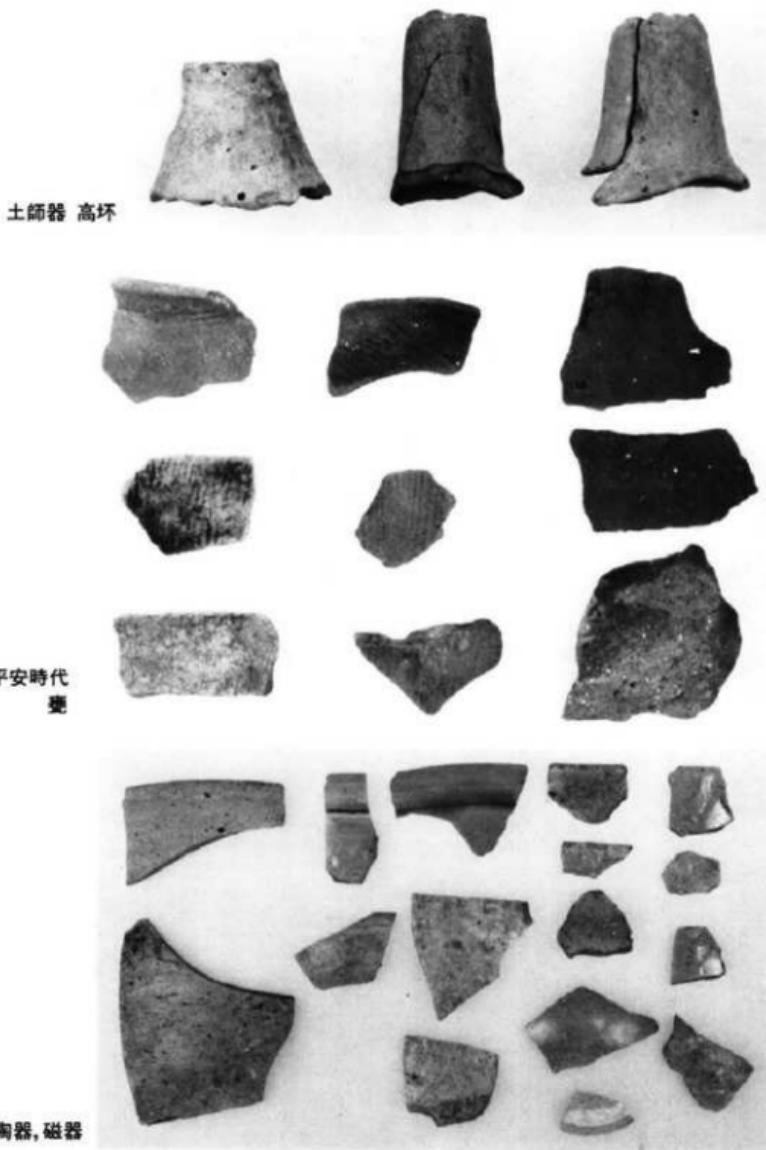


土師器 高坏



同上

図版39



B3区・C3区遺構外出土土器



磁器、灰釉陶器



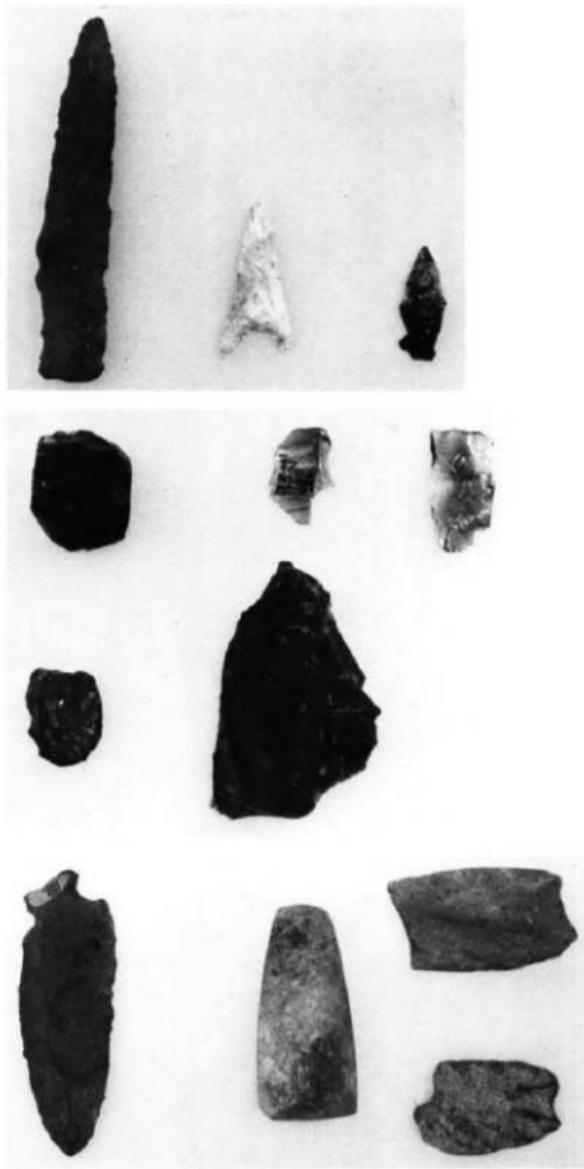
土器 皿

B3区·C3区遗构外出土土器

图版41



B3区·C3区
遗构外出土石器

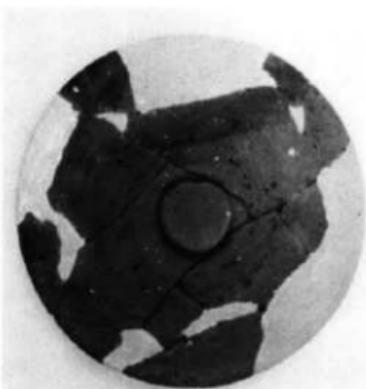


B3区·C3区遺構外出土石器

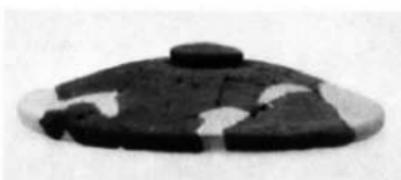
圖版43



土師器 杯



須惠器 蓋



須惠器
蓋



F 4 区遺構外出土土器



F 4 区出土陶器



F 4 区出土石器

F 4 区出土石器



A 2·3 区, B 3 区
A 2·3 区, C 3 区

F4区, A2·3区, B3区·C3区遗构外出土土器, 石器

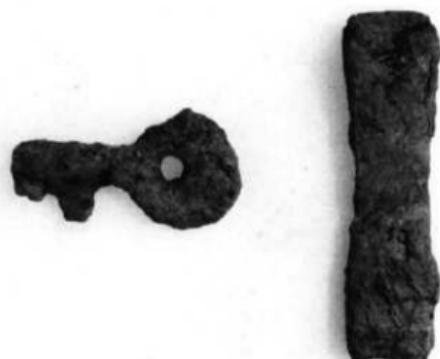
图版45



A2·B2区



B3区·C3区



F4·5区

A2·3区, B3区·C3区, F4·5区遗構外出土鐵製品



調査風景



同上

農村基盤総合整備事業飯田市久米地区
にかかる埋蔵文化財包蔵地高野遺跡発
掘調査報告書

高 野 遺 跡

平成元年3月30日 印刷
平成元年3月31日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会

印 刷 業 飯 田 プ リ ン ト
